

Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

社会主義 体制史研究

No.13 (June 2020)

アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀

—東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (2)—

青木國彦(東北大学名誉教授)

Die heimliche Kämpfe um die Anthologie
»Berliner Geschichten« in der DDR

--Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (2)--

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)



社会主義体制史研究会

The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

『社会主義体制史研究』 (Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

下記の旧 URL から自動切替(リダイレクト)

旧 URL: <http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

(違いは www の次に「2」の有無のみ)

publisher: 社会主義体制史研究会

(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to aoki_econ3tohoku.4.5 (3=@ 4=ac 5=jp)

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。

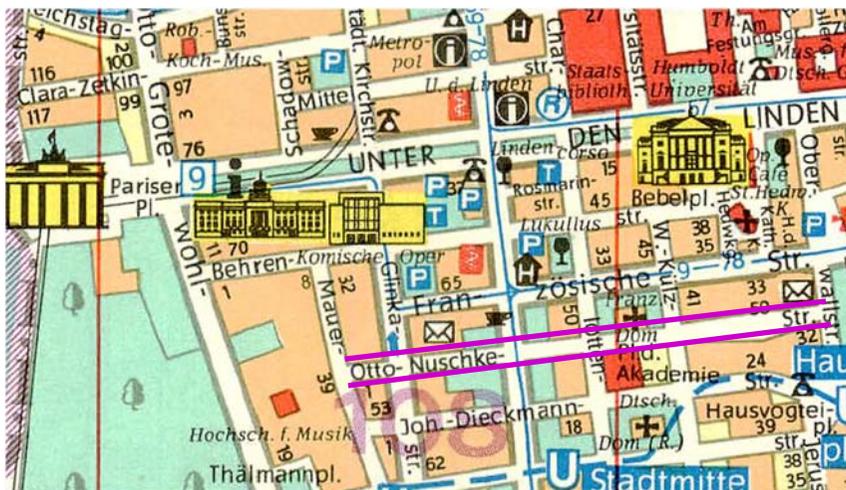
旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

表紙の写真 東独国家保安相ミールケ(Erich Mielke)執務室(2010.02.22撮影, © Kunihiko AOKI) 左上が彼のデスク、右下は彼のデスク側から見た執務室全景。

下図 ミールケの執務室があった元シュタジ本部(2010.02.22撮影, © Kunihiko AOKI)



下図 「寄稿者会合」(本号9・27ページ)があった東ベルリンOtto-Nuschke-Str.(現Jägerstraße)



紫色の上下線内が O.ヌシュケ通り。左端半ばがブランデンブルク門。右上隅がフンボルト大学(旧ベルリン大学)。(出所)VEB Tourist Verlag (1980:16)

アンソロジー「ベルリン物語」をめぐる東独作家たちの野望とシュタジの陰謀

—東独ホーネッカー政権初期の自由化について(3)—

青木國彦*

Die heimliche Kämpfe um die Anthologie »Berliner Geschichten« in der DDR

Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (3)

Kunihiko AOKI*

目次

1. はじめに:20年後のアンソロジー「ベルリン物語」 1
2. 東独にとっての第10回世界青年学生祭典 5
3. シュタジの文学(者)対策の多様化 5
4. アンソロジー「ベルリン物語」企画(1974-76年) 7
5. 対策主役:IMアンドレ(作家ラウドン Hasso Laudon)、IMヘルマン(作家ゲールリッヒ Günter Görlich)、IMマーティン(作家ヘルマン・カント Hermann Kant)、作家同盟第1書記 G.ヘニガー(Gerhard Henniger) 10
6. フォルカー・ブラウン(Volker Braun)「未完の物語」 11
7. ZAIG(中央評価情報グループ)の751110情報 12
8. 注意報:ブラハの春の想起、ピアマン誕生会、IMアンドレの「作家たちの出版社」通報 16
9. 警報と作戦重点「自主出版」の開始、最初の成果 18
- 9a. 作戦重点「自主出版」とは 20
 - (1)1975年11月12日、(2)1975年11月21日、(3)1975年12月16日、(4)ソルジェニーツィン追放との関連
10. 作家レスキーン(Jürgen Leskien)の対応 22
11. 作戦:差別化・分解・引き抜き・個別協議 23
12. 作家デ・ブルイン(Günter de Bruyn)(IMSロマン)のシュタジ離反とシュタジの「作り話」作戦 25
13. 「作家たちの出版社」から「著者編集」へ:ヴァルター(Joachim Walther)の対抗策(1)「静かさ」 26
14. 作家ヘートル夫妻(Gert u. Heide Härtl)対策 27
 - (1)VAO アンソロジー、(2)「陰謀的家宅捜索」と寄稿者会合の「観察」、(3)「陰謀的に入手された諸原稿」の鑑定、(4)ヘートル夫妻分解作戦
15. 劇作家グラチク(Paul Gratzik、IMペーター)の貢献と離反 29
16. 引き抜き:作家ウーヴェ・カント(Uwe Kant)を「トロイの木馬」に(IMヘルマンとIMマーティンの工作) 30
17. 作家ラントグラフ(Wolfgang Landgraf)の引き抜き:ヴァルターの対抗策(2)「広い世論の中」へ 32
18. シュタジの作戦状況分析と組織者の対応 33
19. アンソロジー組織者3人の弁明的抗議とヘルマン・カント(Hermann Kant)らの追撃 35
20. 断念:ヘルマン・カント(IMマーティン)の最後の一撃 37
21. 作戦終了と次の対策 38
22. おわりに 40
 - (補注1) 東独における書籍検閲の実態と制度 41
 - (補注2) 「政治的・イデオロギー的確信」に基づき長期かつ積極的にシュタジ非公式協力者(IM)であった東独作家 43
 - (補注3) 作家に対するシュタジの作戦の種類と暗号名 43
 - (補注4) 作家へのシュタジOV(作戦事案)の刑法容疑 44
 - (補注5) ZAIG(中央評価情報グループ)とその「情報」書式 45
 - (補注6) 対抗アンソロジー『ベルリンの作家たちが物語る』46
 - (補注6a) 『物語る』寄稿の早熟女性詩人エックカート(Gabriele Eckart):体制の寵児・IMから離反・底辺記録者へ 47
 - (補注7) 党大会成功のための「妄想症的」予防措置 48

1. はじめに:20年後のアンソロジー「ベルリン物語」¹

東独の代表的ビート・グループ「レンフト・コンボ」のメンバーだったグレーザー(Peter Gläser)は、1970年代前半を次のように回想した(Rauhut 1993:289):

ホーネッカー(Erich Honecker)[当時第1書記、1976年から書記長]の発言によって「タブーがなくなると思われた時、我々の心臓は高鳴った。今や新しい時代が始まりこの国での生活を困難にした諸々も次第によくなるだろうと我々は信じた。なんとやろうと緩和のシグナルが多く存在した」し、「私は殆どの人がそう

感じたという印象を持った」。

1927年にドイツ共産党(KPD)に入党した古参党员で、スペイン国際旅団にも参戦した東独の作家シュテルン(Kurt Stern)²は、1972年3月の(東)ベルリン作家同盟³の集まりにおいて、「第8回党大会[1971年]後の今は、新しい雰囲気が始まったのであり、今では、すべての作家が純粋の真実を書かねばならず、“純粋の真実”しか書いてはならず、自分の良心のみに責任がある」と論じた⁴。

この雰囲気の中で著名作家ハイム(Stefan Heym)らに支持されながら、1974年1月に作家プレントドルフ(Ul-

* 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University.

¹ []内と省略を示す「…」は青木、省略を示す[...]は引用原文による。ドイツ人名は初出時に原語姓名を付記する(例外あり)。

シュタジ(東独秘密警察)や作家同盟の旧秘密文書からの引用は抜粋を含む要約である。Plenzdorf(1995)所収の文書は概ね全文だが、Walther(1996)は抜粋所収であるため脈絡や日付などに不明点がある。しかし原資料の調査は果たしていない。

本稿は2019年11月9-10日のロシア東欧学会大会提出の報告フルペーパーのうちアンソロジー企画関連部分を抜き出し、大幅に増補し一部改訂した。

² 1907-1989。作家、脚本家、ジャーナリスト、翻訳家。1927年KPD入党、1930-31年共産主義学生フラクシオンの帝国責任者、1931-32年ソルボンヌ大学留学、1936-38年スペイン第11国際旅団でアジプロ委員、1938年KPDの了解のもとパリへ、1942年

メキシコへ亡命、1946年帰国、SED入党、1949年以来作家、翻訳家、ディーツ出版社の原稿審査係、1958年反ファシズム闘士メダル、1967年ハインリッヒ・マン賞、1972年祖国功労賞、ピアマン追放を批判[抗議声明への署名はしていない]、1978年作家同盟理事引退、同幹部会員は継続、1982年諸国民友好の星賞、1987年祖国功労賞(Müller-Enbergs 2010:1274f.; Baumgartner 1996:895)。

³ 東独の作家同盟は県別組織と全国組織から成る[以下では前者は県名を付記、後者は単に作家同盟とする]。作家同盟の最高機関は大会(Kongreß)、大会選出メンバーと各県同盟の議長、書記が幹部会(Vorstand)を構成し、幹部会が会長(Präsident)、副会長、理事会(Präsidium)を選出した(BMiB 1985:1137)。

⁴ Walther(1996:648)。これを作家ゲールリッヒ(IMヘルマン、5節)は「陰険かつ敵対的」な内容だとシュタジに通報した(同前)。

rich Plenzdorf)、同シュレジンガー(Klaus Schlesinger)、同シュタデ(Martin Stade)の3人が、「組織者」ないし「発起人」として『アンソロジー“ベルリン物語”』(Anthologie „Berliner Geschichten“)への寄稿を東独の作家たちに呼びかけた(以下単にアンソロジーないしアンソロジー企画と略称)。テーマは東ベルリンの「戦後から現在まで」と限定されたので、これは東ベルリン史企画でもあった。3人は当時いずれも40才前後、いわば中堅であった。

「アンソロジー」は名詩選や名文選、単に文集などと訳されるが、シュタジの作戦名になっているので本稿ではカタカナのまま用いる。このカタカナ言葉は広辞苑にもある。

組織者は、時代の変化を背に受け、その更なる徹底のために、検閲(補注1参照)を打破してアンソロジーを出版することを企画し、戦略戦術はいあいまいながら、一時は非法手段の利用と「反体制」まで決意した。

シュタジは第XX局・第XX/7局⁵を中心に、まず監視作戦を、次いで作戦重点「自主出版」(operativer Schwerpunkt „Selbstverlag“⁶) (1975-76年)⁷を発動し、それを阻止した(以下アンソロジー事件(1974-76年)と呼ぶ)。

『アンソロジー“ベルリン物語”』が日の目を見たのは、事件の20年後、Plenzdorf(1995)によってである。

1970年代前半の東独の雰囲気、世相を最も端的に物語るのは、第10回世界青年学生祭典(1973年7月28日-8月5日)とその広く深い影響であった。それは、「世界に開かれた」東独を最大のアピール・ポイントとし、「自由」拡大を東独全土からの青年学生50数万人が体験し、殆どの東ベルリン市民が目の当たりにし驚愕した(青木2019)。東独テレビは全土に113時間[12.5時間/日]も生中継し、全国2.3万カ所です「小祭典」が並行開催された(Falk 2003)。

世界祭典では議論やカウンターカルチャーの「自由」が謳歌されて「赤いウッドストック」と呼ばれ、世界の「左翼抗議文化」に触発されて「民主的社会主義」願望が生成したと回想される。他方、その場限り、ショーウィンドーの出来事、幻想との論評も多い⁸。いずれにせよ共通の問題がある。

いずれも同時期の他の分野、特に文化分野の状況との関連が視野に入っていない。祭典における「自由」がその場限りかどうかを見るには、祭典自体とその継承度に加えて、文化面の様相を参照することが必要かつ有益である。

時代の変化の象徴として祭典のみではなく、「率直な」連

続トークショー「アイントップ」(Eintopp)の開催(4節)や、音楽の変化(ビート・グループの再公式承認)、文学の変化(ハイム3冊ほか従来の発禁本の出版、ブラウン(Volker Braun)の戯曲上演と新作の「意味と形式」誌(Sinn und Form、隔月刊)掲載(6節)、同誌上討論の活発化等々)など多彩な現象が挙げられる(青木2020参照)。

しかし全く注目されないアンソロジー企画こそ、変化した時代の文化分野における最も突出した出来事であった。

アンソロジー企画は一部作家の突出によるものであって、祭典のような大規模現象でも1989年を担う世代を育んだわけでもないし、発禁本の出版のように一般市民が手に取ったわけでもない。ビアマン(Wolf Biermann)追放のような国内外の世論を揺さぶる大事件でもなかった。

それはシュタジの諜報網と巧妙な差別化・分解作戦によって大声(逮捕・有罪判決)なしに静かに消された。組織者たちも大声(広い提携や世論への訴え)なしに、わずかな専門家集団に呼びかけて支配の基本手段の1つ、検閲に挑戦した。それはいわばドンキホーテ型挑戦であった。

だから挫折は当然と思われるが、彼らはアンソロジー企画による検閲打破を実現可能と見た。挑戦はドンキホーテ型であったが、逆にだからこそ、いわば自己陶酔的に突き進んだ。なぜか。アンソロジー企画は「この時期に、この雰囲気の中で」生まれた(Plenzdorf 1995:8)からであった。

言い換えると、アンソロジー企画は、検閲打破を可能と思わせるような時代の「雰囲気」の例証である。

第7回作家会議(1973年11月14-16日)と第7回映像芸術同盟会議(1974年5月28-30日)も「寛容の文化政策」、「創造的リスクを賭ける勇気」とそれに「信頼と理解」を示す「社会的雰囲気」を謳った(Jäger 1995:156-158)。

Jäger(同前)は、そうした場でザコウスキー(Helmut Sakowski)ら、「党機構と緊密に結びつき、その作品が芸術的よりもイデオロギー的な要請を満たす若干の作家は、より寛容な文化政策への不満を示し」、さらに「DDR[=東独]文学に、国境内外での地位と評判をもたらした作家たち[ハイムら]への明白な攻撃」を行なったことを指摘し、これは「来たる抑圧の予兆」であったと言う。

SED(ドイツ社会主義統一党=東独支配党)第8回党大会後の文化政策をめぐる党内闘争に関して、当時の「意味と形式」誌編集長ギルヌス(Wilhelm Girnus)によれば、「それはクレラ⁹のまわりの人々に違いない。激怒している連

⁵ シュタジ本部の第XX局は国家機構(司法など)とブロック政党、文化、メディア、教会、「政治的地下」を担当し、シュタジの「政治的抑圧と監視の体制の核心部門」であった。第XX/7局は第XX局第7部から昇格し(1969年6月18日命令20/69)、「文化とマスメディア」担当と、責任者ミュラー(Heinz Müller, 1975年まで)を継承した。第XX局の調査報告(1969年1月24日)が、東独の「多くの芸術家や、社会的組織[文化施設など]の管理幹部に至るまでの文化創造者が「プラハの春」に共感し、チェコスロバキアでの軍事介入に反対しているという結果」であったため、対策強化の必要からこの昇格となった。第XX/7局には評価作業グループのほか4課(Referate)あり、第1課から順に「テレビ・ラジオ・映画」、「文化省・文化施設」、「新聞雑誌・出版」、「重点事案」を担当した。第XX/7局とシュタジ各県支部第XX/7部によって「ラインXX/7」を構成した(Auerbach 2008:3f.,28,125ff.,175)。ちなみにアンソロジー組織者も「プラハの春」に学んだ(後述)。

⁶ Selbstverlag の訳語は独和辞典では「自費出版」である。それは出版費用を出版業者ではなく「自分で負担すること」(広辞苑)

だが、アンソロジー企画では作家たちの出版社設立と既存出版社利用のどちらかによる検閲排除を目指し、シュタジはその両形態を含む意味で「Selbstverlag」を作戦名にした。そこで本稿では「自主出版」と訳した(言葉の由来は10節参照)。

⁷ 作戦重点「自主出版」の期間をWalther(1996:339)は1975-76年、同前(S.364)は1975-77年とした。実際は1976年9月2日に作戦終了宣言があり(21節)、作戦開始日は1975年11月10-12日の間と推定され(9節)、期間は1975-76年である。

⁸ その詳細は青木(2019)にあるが、長文のため、幅広い体験者の回想(5、6、12、13節)を垣間見ていただければ幸いである。なお祭典の概略は本稿2節に記す。

⁹ クレラ(Alfred Kurella, 1895-1975)はKPD創立時以来の古参党员かつ国際共産主義青年運動創設者の一人、長年のSED文化政策幹部であった。ミュンヘン共産党を経て1918年12月KPDに入党。1919年クーリエとしてモスクワに派遣されレーニンと会見し、またロシア共産主義青年同盟代表として共産主義青年

中におそらく教授カウル¹⁰も加わって」おり、「プレントドルフの映画“パウルとパウラの伝説”¹¹も上映されるべきではなかった」と言っている。これはIM「詩人」(Dichter)であった作家ヴィーンズ¹²の通報(1973年4月18日)の中にある(Walther 1996: 602f.)。しかし当時彼らは「若干の作家」にすぎなかった。なおIMはシュタジの「非公式協力者」(密告者)の略語である。

アンソロジー事件はまさに批判的作家集団の野望と権力の大規模な陰謀の衝突であった。本稿は、アンソロジー企画の東独史上前例のない集団的検閲挑戦の内実と、その秘密裏の鎮圧のために党[=SED]・シュタジ・文化省・作家同盟が展開した、司法に拠らない「静かな」抑圧の実態を明らかにし、「この時期」を考える一助としたい。

Plenzdorf(1995)がアンソロジー事件の基本資料である。同書はアンソロジー組織者3人が編集し、「事件」(Die Affäre)と題するまえがき(S.6ff.)と、18人のアンソロジー寄稿(S.23ff.)、作戦重点「自主出版」に関係する旧秘密文書を主とする資料編(S.213ff.)から成る。

寄稿の末尾はヴァルター(Joachim Walther)の寄稿である。彼は本稿が依拠する主要文献の1つWalther(1996)(図1)の著者で、当時書籍出版社デア・モルゲン¹³(以下出版社モルゲン)の原稿審査係でもあった¹⁴。

資料編には「党と[作家]同盟とシュタジの間の協力を暴露する資料」が選ばれた(Plenzdorf 1995:15f.)。文化省の資料も多く含まれればさらに充実しただろう。

インターナショナル(KJI)を創立し、1921年から同執行委員・第1書記に就任した。スターリン時代には活躍と同時に非難も受けた。独ソ戦末期にはNKFD(自由ドイツ国民委員会)の宣言案やKPDの戦後綱領作成に参加し、NKFD機関紙「自由ドイツ」(Freies Deutschland)編集長代理。戦後はコーカサスで作家・翻訳家。彼の叔父(または伯父)は1937年モスクワで銃殺刑。

1954年2月東独に移住、SED入党。1954[1955]-57年ライプツヒ文学研究所長、1965-74年芸術アカデミー副会長、1955年から作家同盟幹部会員。1958年からSED中央委員、1958-63年政治局員候補。「“社会主義リアリズム”の実現やSED指導部の多くの文化政策」に参画。1963年から政治局イデオロギー委員会委員(Müller-Enbergs 2010:751f.)。彼は1975年6月12日死去し、アンソロジー事件の行方もピアマン追放も知らなかった。

クレラは1955年のライプツヒ文学研究所設立に尽力し、初代所長になった。同研究所は東欧で唯一、モスクワのゴーリキー文学研究所を手本に設立され、1958年に大学となり、1959年ライプツヒ・ベッヒャー文学研究所に改称した(Walther 1996:43f.)。本稿は改称以前を含むので、単にライプツヒ文学研究所と呼ぶ。

¹⁰ カウル(Friedrich Karl Kaul, 1906-1981)はユダヤ系で1935年ゲシュタポに逮捕され収容、国外移住を条件に釈放、中南米に亡命、1945年まで米国の反ナチキャンプに収容。1946年SED入党、1948年から弁護士、西独におけるKPD禁止裁判やナチ裁判で活躍。1965年フンボルト大学現代法史研究所所長・教授。作家でもあった(Müller-Enbergs 2010:638)。カウルの主張については青木(2020:11)参照。

¹¹ 高岡智子(2011)参照。映画写真:https://dept.sophia.ac.jp/is/ei/wp-content/uploads/2016/06/160628_lecture_PDF.pdf

¹² ヴィーンズ(Paul Wiens, 1922-1982)は母がユダヤ人、両親と1933年亡命、1943年ウィーンで逮捕、SSの一時的強制収容所収容。1947年ワイマールに帰還しSED入党、1949年からベルリン在住。1948-50年アウフバウ出版社原稿審査係・翻訳編集委員、1950年作家活動開始。1961-69年ベルリン作家同盟議長。1962-68年GI、1972年からIMS、1980年からIMB「詩人」(Dichter)。長期かつ積極的IM(補注2)。1970年代半ばから外

ここで予め**アンソロジー寄稿者**を整理しておきたい。1975年12月30日時点のアンソロジー参加者はシュタジの作戦情報によると「少なくとも25人」であった(Plenzdorf 1995:252)。第1次寄稿(1975年春取りまとめ)が18人(表1のWalther以外)ゆえ、第2次(1975年秋から募集)は「少なくとも7人」となる。

図1 左がWalther(1996)、右はペーパーバック版



(注)右は著者のウェブサイト(<http://www.taulos.de/>)から。

作家同盟第1書記G.ヘニガー(Gerhard Henniger)へのシュレジンガーの手紙(1976年2月10日)には「アンソロジーにはこれまで25人が寄稿した」とある(Plenzdorf 1995:278)。すると第2次寄稿は7人になる。

1976年4月28日にシュレジンガーがIMアンドレ(Andre)に知らせた第2次寄稿者も7人で、うち6人の名前をアンドレは聞き取った¹⁵。6人にはラウドン(Hasso

国でも活動し「一時的にKGBに貸出された」。1981-82年「意味と形式」誌編集長(Müller-Enbergs 2010:1420f.; Baumgartner 1996:1006f.; de.wikipedia)。アンソロジー事件や、その後のザラ・キルシュ対策にも投入された(Walther 1996:603)。

¹³ Buchverlag Der Morgen。1950年に東ベルリンで体制内政党(いわゆるブロック政党)ドイツ自由民主党(LDPD)が設立。日刊紙Der Morgenも発行。同党は主に中産階級や小規模私営、手工業者を基盤とした(Links 2016:270)。

¹⁴ Walther(1996)に基づく記録映画を東独映画監督Heiner Sylvester(ピアマン追放抗議声明署名)が1996年に制作した:http://gedenkbibliothek.de/download/Joachim_Walther_und_Heiner_Sylvester_Wahn_und_Methode_-_Schriftsteller_und_Stasi_-_vom_05._April_2016.pdf

ヴァルターは1943年生まれ、1963-67年フンボルト大学で文学・芸術史を学び教師を経て1968年から出版社モルゲンの原稿審査係、1983年検閲問題で解雇され(補注6a参照)、以後自由業作家。1969-89年にシュタジのOV「原稿審査係」、OPK「蝶」、OV「出版者」の対象[時期は異なる]。

1970年に最初の小説、1972年作家同盟入会、1975年青年小説がヒット。1974-75年ワルシャワ留学[この間彼のアンソロジー企画関与は中断しただろう。但し期間の月日は不明]。

1976-78年[FDJ系の出版社Neues Leben(以下新生活出版社)の季刊]青年向け文学雑誌「熱情」(Temperamente)編集委員、1978年「政治的理由」で編集委員全員解雇。1977年以後西独・西独・東欧・英米に研究旅行。1984-89年はメクレンブルクに「撤退」、1989年ベルリンに戻り、「革新されたDDR作家同盟の議長代理」になった[が、それは1990年解散し西独のドイツ作家同盟に吸収された](Müller-Enbergs 2010:1377; Walther 1996:888)。Plenzdorf(1995: 315)は彼のメクレンブルク撤退を「国内亡命」と表現した。彼は東独側から見た第10回世界青年学生祭典の成果の記録Steineckert(1974)の共著者でもある。

¹⁵ 6人はベルリン在住のWolfgang Trampe, ザイペル, ラウドン, ヴァルター, Ekkehardt Krumbholz, ポツダム在住のEgbert Lipenskiである(カタカナが本稿登場人物)。

Laudon)、つまり IM アンドレ自身も含まれた(Plenzdorf 1995:303) (IM アンドレについては 5 節、この時の IM アンドレの通報の詳細は 20 節参照)。

アンドレは残る 1 人、「コトブス在住」作家の名前を聞き取れなかったと言う(Plenzdorf 同前)。

その作家はケーラー(Erich Köhler)に違いない。彼はシュタジ・コトブス県支部第 XX/7 部の IME(特別投入 IM)ハインリッヒ(Heinrich、指導将校は少尉リーバック(Lieback))¹⁶であり、作家同盟の事情聴取によれば、彼は「シュレジンガーに 1975 年 11 月半ばに勧められ」第 2 次寄稿に応じた(Plenzdorf 1995:268)¹⁷からである。

ケーラーは 1975 年 5 月に寄稿したが、すでに第 1 次寄稿が締め切られ、組織者が各寄稿者に全寄稿のコピーを送ったあとであり、第 1 次に間に合わなかった(同前:10)。

上記の 7 人のほかに若手ラントグラフ(Wolfgang(Fulko) Landgraf、23 才くらい)も第 2 次に応じた。彼も最初の寄稿が第 1 次締め切り直後であった(17 節)。ところが彼は 1976 年 1 月 27 日の組織者への手紙で寄稿を取り下げた(Plenzdorf 1995:12)ので、第 2 次寄稿者は結局 7 人にであった。

1976 年 1 月 11 日にシュレジンガーがシュタデに、ヴァルターとレンツ(Werner Lenz)、リボウスキー(Egbert Lipowski)の寄稿を受け取ったと話した(IM アンドレの通報、Plenzdorf 1995:260)。このうちリボウスキーは脚注 15 にある E. Lipenski のことではないかと思う。

レンツは、上記の 4 月 28 日の寄稿者リスト(脚注 15)にないので、取り下げたとすれば、寄稿取り下げは第 1 次 1 人、第 2 次 2 人になる¹⁸。

寄稿者のシュタジとの関係では第 1 次のグラチク(Paul Grazik)¹⁹が IM であり(15 節)、当時 IM であったデ・ブルイン(Günter de Bruyn)は協力(密告)を拒否し(12 節)、レスキーン(Jürgen Leskien)に IM 疑念があった(10 節)。第 2 次では上記のラウドンとケーラーが IM であった。

Plenzdorf(1995)の寄稿編は第 1 次寄稿から 17 人、第 2 次寄稿から 1 人(表 1 の Walther)を収録した。1975 年春締め切りの第 1 次寄稿 18 本のうち、U.カント(Uwe Kant)〔後述の H.カントの 10 才違いの弟〕は取り下げ、「今も使わせようとしなかった」(Plenzdorf 1995:9,11,15, 221) (表 1)。

原稿合計は、1975 年秋からの第 2 次募集により、「数週間以内に 350 ページにまで増え、更なる寄稿が予告された」。第 1 次寄稿 18 本が約 200 ページだったので、第 2 次は約 150 ページであった。しかしヴァルター以外の第 2

次寄稿は「もはや我々のもとにない」ので収録されなかった Plenzdorf 1995:11,15)。

表 1 アンソロジー「ベルリン物語」: 表題判明の寄稿

姓	名	表題
de Bruyn #	Günter	Freiheitsberaubung
Erb	Elke	Ein Siedlungshaus in Berlin-Hohenschönhausen
Fries	Fritz Rudolf	Ich wollte eine Stadt erobern
Gratzig *	Paul	Transportpaule in Berlin
Grüning	Uwe	Novemberschelf
Härtl #**	Gert	Vom Bowling
Härtl	Heide	Besuch
Heym #	Stefan	Mein Richard
Kant	Uwe	Monopoly
Klingler #	Ulrich Hans	Am Montag fiel der Hammer
Kunert	Günter	Die Druse
Leskien	Jürgen	Gründonnerstag
Plenzdorf #	Ulrich	kein runter kein fern
Schlesinger #	Klaus	Am Ende der Jugend
Schneider	Rolf	Hanna
Schubert	Dieter***	Fünf ziemlich phantastische Geschichten
Schubert	Helga	Heute abend
Stade #	Martin	Von einem, der alles doppelt sah
Walther	Joachim	Entlassungsgesuch

(注)第 1 次寄稿 18 人全部(取り下げた U. Kant に取消線)と、第 2 次寄稿のうち Walther。姓アルファベット順(原文は Gratzig のみ異なる)。#「敵対的」寄稿者(7 節)。*本名 Gratzik。**シュタジ文書では姓が Neumann。*** Hansdieter ともあるので、以下 HD と略記。(出所) Plenzdorf(1995:Inhalt); 751110 情報。

Plenzdorf(1995)を酒井(2002-2003、2018)²⁰が、難解な日本語ではあるが、紹介し、参考にした。

ただ残念ながら、シュタジの作戦上最も重要な 751110 情報(詳細 7 節)を、氏は IM からシュタジへの通報と誤解した(酒井 2002:13; 2018:235)。

751110 情報は IM の通報ではなく、ZAIG(中央評価情報グループ)というシュタジの情報分析の中枢が作成し、1975 年 11 月 10 日(月)にシュタジ本部名で、ホーネッカーやイデオロギー担当政治局員ハーガー(Kurt Hager)、アジプロ担当政治局員ランバーツ(Werner Lamberg)²¹と

¹⁶ Walther 1996:315。ケーラーが寄稿したのは 1976 年に入ってからである。彼はシュタジのためにアンソロジー第 1 次寄稿のうち 10 寄稿の「非公式評価」を引き受けた。リーバックはその評価結果を「作戦上重要」と考え、コピーをシュタジ本部に送った。但しフリース(Fritz Rudolf Fries)の寄稿の評価提出は 6 月 1 日 [=アンソロジー企画破綻後]であった(Walther 同前)。同県支部は第 1 次寄稿を、第 2 次寄稿に応じたことによって第 1 次寄稿を送られたはずのケーラーから入手したに違いない。第 2 次寄稿者には第 1 次寄稿全部のコピーを送ることを 1975 年 9 月 10 日の寄稿者会合が決めたからである(4 節参照)。

¹⁷ 「事情聴取」は 1976 年 1 月 30 日に作家同盟理事ホルツ=バウマート(Gerhard Holtz-Baumert、1977 年から同副会長)が実施。彼は長期かつ積極的 IM(補注 2)の一人であった。事情聴取は寄稿者への圧力のための「協議」の一環である(11 節参照)。

¹⁸ 「IM-V パウル」(Paul)はアンソロジーへの「彼の参加に関連して作戦的に知られた」。つまり、シュタジはアンソロジー参加者の 1 人に目を付けて IM 候補(IM-V)とし、暗号名をパウルとした。そこで彼に「差別化された影響行使」をし、彼は「参加を取り消した」。そのため組織者たちとの関係が断たれたので、IM 採用の「目的性」はなくなったとシュタジは記録した(Walther 1996:341)。レンツがパウルかもしれない。パウルがレンツとは別人なら、レンツと異なり、寄稿することなく参加とその取り消しをしたのだろう。

¹⁹ Gratzik が本名である(Müller-Enbergs 2010:421)が、Plenzdorf(1995)では人物紹介(S.311)以外は資料編を含め Gratzig である。Walther(1996)はすべて Gratzik と記述。

²⁰ 当時西ベルリン在住の同氏は通訳として第 10 回世界青年学生祭典に参加したとのことである(酒井 2003:34-35; 2018:302)。

²¹ ランバーツ(1929-1978)は[わが国ではあまり知られていない

いう東独文化政策の3トップなどに、アンソロジー企画の現状を説明し、その阻止を提言し、「原稿」(アンソロジー第1次寄稿18本)閲覧の用意もあることを知らせた「情報」であり、アンソロジー事件の最も重要な文書であった。

「原稿」をシュタジが入手したことがアンソロジー事件の急展開の転機の1つとなった(7・9節)が、その入手はいつ、どのようにかが明らかでなかった。複数ルートを検討の結果、本稿は、751110情報が利用した「原稿」はシュタジ自身が1975年9月10日にヘートル(Härtl)夫妻宅の「陰謀的家宅捜索」の際に入手したものと結論した(15節)。

なお、東ドイツ短編集刊行委員会(1992)にアンソロジーに寄稿したか、何らかの関与をした作家たちの短編邦訳があり、末尾に各時代状況の「解説」がある。

2. 東独にとっての第10回世界青年学生祭典

前節で触れたように第10回世界青年学生祭典(図2、図3)がこの時代の雰囲気象徴であった。その特徴は(詳細は青木2019)：

- ・1973年7月28日・8月5日、東ベルリン。ホーネッカーの政権奪取の2年後。別名「赤いウッドストック」。

- ・当局は、東独の国家としての「承認の波」に対応して「weltoffen」(世界に開かれた)国家をアピール

- ・参加した東独青年は公称も諸文献も「800万人」。これは1973年東独人口1698万人の半分に当たるが、延べ人数であり、実数50数万人²²。外国代表約2.5万人。

1542の政治、文化、スポーツの催し、95の野外舞台、広場・通りでダンスの供宴。「そこではまた、至る所に愛し合うペアがいて、公然といちゃつき、夜の草地が占拠された」。

バナナなど南方果物を含む食料が豊富に供給された。

- ・世界における共産圏の前進と「帝国主義勢力」の後退という国際情勢判断(北ベトナムの対米勝利、選挙でのチリ社会主義政権成立、プラハの春鎮圧後の「社会主義国家共同体」(ブレジネフ・ドクトリン体制)確立など)と、第三世界との連携重視(祭典スローガン「反帝国主義連帯と平和、友好のために」、アラファトやアンジェラ・デービスを招待)、東独主導のドイツ統一を展望。

- ・東独青年を取り込むための土着ロック・ビート活用(クラウス・レンフト・コンボなど)。その成功に味を占め、その後も「平和のためのロック」を毎年開催。

- ・祭典成功のためにシュタジと人民警察が事前に大がかりな予防措置を取った。期間中のシュタジはいつもの粗暴な私服シュタジではなく隠密作戦で監視、警察は親切をモットーに友だち作戦であった。

- ・西側への関心が強い東独青年は西独代表(与野党問わず、また宗教、労組、農村など、広範な青年が参加)との

交流と議論に満足した。

図2 若者天国(野外食堂)



(注) Karl-Liebknecht-Straße. (出所) Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0801-403 / Junge, Peter Heinz / CC-BY-SA 3.0

図3 FDJ(東独青年団)の大デモンストレーション



(出所) Wikimedia Commons: Bundesarchiv, Bild 183-M0804-0739 / CC-BY-SA 3.0

- ・社会主義意識の強い東独青年は様々な「左翼抗議文化」と民族解放運動に感化、刺激され、「我々は民主的な社会主義、人間的な社会主義を望んだ」(レンフトの証言)。

- ・ビートとダンス三昧、「性的放蕩」。前年3月に12週までの妊娠中絶合法化、ピル無償配布になっていた。

- ・いまでは多様な評価がされるが、演出されたショー、その場限り、ショーウィンドー、幻想などの論評が圧倒。

- ・しかし、参加した東独青年50数万人の実体験であり、その体験は各地、職場、学校に伝播した。大部分が10代後半から20代であった彼らは16年後=1989年には30-40代として社会の行動的な中核を形成した。

3. シュタジの文学(者)対策の多様化

シュタジ研究書 Walther(1996:73,81)によれば：

「DY30/vorl.SED/18052」の数字を補足したい：国内からは「選抜手続きで選ばれた33万人の“組織された参加者”と「3000人のFDJから成るDDR公式代表団」、「それに無数の非公式参加者」であり、「外国からは25646人」、「うち19136人が1700以上の国別組織・国際組織からの祭典代表」、代表の構成は「6250人が社会主義国、6500人が資本主義国、1400人がラテンアメリカ、4800人がアジア・アフリカ・オーストラリアからであった」(C. Schröder 2003)。ほかに東ベルリン青年4万人の組織動員があった。

が]、「ホーネッカーの後継者と見なされ、“よりリベラルな”政策の擁護者であった」。FDJ(官製青年組織)幹部やFDJの世界民主青年連盟執行委員会(ブダペスト)常駐代表などを経て1963年SED中央委員候補になり、以来一貫してアジプロ部門を担当した。1966年から中央委アジテーション部長、1967年から書記局長兼務、1971年から政治局員、1978年3月6日リビア出張中にヘリコプター事故で急逝。「ホーネッカーの委託で」ウルブリヒトからの奪権の際の対ソ調整に参画した(Müller-Enbergs 2010: 759)。
²² 「50数万人」の根拠は青木(2019:補注1)参照。SED文書

壁建設(1961年)によって SED 指導部やシュタジにとっては治安確保が容易になるという希望が、同時に「芸術分野の知識人の一部」にも壁による国内治安確保が「文学と芸術のより大きな自由の余地」を生むという希望が生じた。

「実際に 1963/64 年には文化政策の限定的な高気圧の峰が存在した。しかし両者〔指導部と文化人〕の希望は長期的には失望になった」。

1964 年のシュタジ改組によって生まれた第 XX 局が「その後国内向けの全面的な監視センターに発展した」〔脚注 5 参照〕。

〔1971 年に権力を掌握したホーネッカーは〕政権の「最初の強化段階において、国内向けに正当性を、国外向けに名声を高める努力をした」。

そのためシュタジも「緊張緩和段階の開始(1972 年両独基本条約、1974 年〔正しくは 1973 年〕国連加盟、1975 年〔CSCE〕ヘルシンキ宣言署名)」に依じて、「1950 年代のような示威的打撃の代わりに、洗練された手段による作戦」がふさわしいかどうかを「熟考」した。

壁建設以後の 1960 年代について同様の見方として最近も、「文化社会学者エングラウ (Wolfgang Engler) の見方によれば 1961 年の壁建設は実際に文化政策の自由化を生じさせた」、但し「住民の大多数はそれを全く違って見ている」(N. Schröder 2015)。逃げられなくなり窒息状態の住民への代償としての限定的自由とも言える。特に「青年コミュニケ」が脱教条主義をリードした(青木 2020:2 節)。

1965 年秋のビート弾圧と同 12 月皆伐総会により抑圧が強まったが、1960 年代末から再び始まった緩和をホーネッカー政権成立と「緊張緩和」が促進した(青木 2020 参照)。

そこで、1972 年 7 月 13 日のシュタジ職務協議会において大臣ミールケ (Erich Mielke) が以下を強調した (Walther 1996:83f.) (以下ミールケの新方針と呼ぶ)：

作家や芸術家について、「もちろん私は、そうした人物たちの作戦的処理が非常に複雑だということを知っている。[...] 彼らの態度や行動を特徴付ける多くのことが、我々を政治的に挑発し、事実上敵にその行動のための弾薬を供給することをもくろんでいる。これらの人物は部分的には直接に、一種の政治的殉教者の役を果たすことを目指している。

だから作家や芸術家等々の作戦的処理は、例えばスパイあるいはエージェントの処理とは異なる取り組みにされねばならない。スパイ等の場合には主に、刑法上の責任を負わせ、そのために必要な証拠を得ることが重要である。敵対的・否定的な文化創造者の場合には、もちろん我々はここでそうした措置のための証拠を得なければならないにもかかわらず、刑法措置の安易な適用は適切ではない。

そうした人物やグループの事案処理、作戦的処理は最初からより強く、彼らからその有効性を取り去り、敵の政治的・イデオロギー的拠点としての彼らの役割を引き受けることを不可能にするために、分解させるこ

と、彼らを信用できなくし孤立させること、不信を作り出すことという目的設定に合わせられねばならない。

指摘されたこの方向での事案処理の成果は逮捕や有罪判決よりも政治的により有効である」。

そのためには「すべての文化施設における IM/GMS〔ともにシュタジへの密告・秘密工作者〕による活動の一層の質的向上」が必要であり、彼らは「高い教育水準によって際立っていなければならない」。

要するに、文化人の事案処理(つまり OV 処理)では、逮捕・有罪判決よりも「政治的に有効」な分解作戦を重視することであり、アンソロジー対策のための作戦重点「自主出版」はこうした新方針の見事な成功例であった。

分解作戦の主な担い手は、党文化部とシュタジ(とりわけ IM と指導将校)、文化省や作家同盟の幹部、作家同盟内党組織であり、制服の人民警察や粗暴な私服シュタジの出勤も、逮捕や裁判もなかった。シュタジ内で作戦を担当した「ライン XX/7」(第 XX/7 局と県支部 XX/7 部)の IM 利用はこの時期に急増した(表 2)²³。

表 2 シュタジ「ライン XX/7」所属 IM

	ライン XX/7*	ライン XX**	比重
1968	—	350 IM	
1972	221 IM	—	
1975	379 IM (+ 20 GMS)	—	
1989	350 IM	1300 IM	27%

(注)原文は*第 7 部、**第 XX 局だが、Walther (1996a:225) を参考に各々本部の局と県支部の部を含む「ライン…」に変えた。(出所) Walther (1996:161)。

Walther (1996:83f.) は新方針を、「1950 年代・1960 年代の〔文化〕抑圧のより粗野な形態から 1970 年代・1980 年代における文化シーン監視の繊細で、DDR の外交的評判によりふさわしい修正への移行」、「逮捕や有罪判決」だけを成果とするのではなく、「危険の根源を早期に知ることと、できる限り声を出さない除去」、「より静かで隠蔽された抑圧」の重視への移行であったと言う。

しかしアンソロジー事件でも別件拘留の意図もあり(14 節)、また直後のピアマン追放と関連逮捕は、従来型の示威的処理であった。従ってミールケの新方針は「粗野な」形態からの移行ではなく多様化であり、1971 年 12 月以後のいわゆる「タブーなし」時代へのシュタジの対応であった。

現に、1980 年代半ばにもシュタジ内では、「地下文学雑誌」(8 節)について、第 IX・XX 局の「法的訴追」のための「断固とした」行動の主張と、第 XX/9 局の「より繊細かつ特に静かな方法」の主張が、「権限争い」も絡んで、ぶつかった (Walther 1996:121f.)。

「1974/75 年に知識人・芸術家の分野の状況が尖鋭化した」ので、第 XX 局は作戦グループ (HA XX/OG) を作って、まず「国内の主要な敵 (ピアマン、ハーバマン (Robert Havemann)、ハイム)」に、OV (作戦事案)「叙情詩人」(Lyriker)²⁴〔対ピアマン〕、OV「ライツ」(Leitz)〔対ハーバマン〕、OV「妨害工作者」(Diversant)〔対ハイム〕を展開し、

²³ 文化分野のうち通信社 ADN やテレビ、ラジオにはシュタジのいわゆる「特別投入将校」(OibE)もわずかながら配置されたが、「作家」関係にはいなかった (Walther 1996:161)。

²⁴ ZOV (中央作戦事案)であった (Walther 1996:163 ほか)。似

た名称 OV「叙情詩」(Lyrik)の 1968-77 年の対象はピアマン追放抗議声明署名のクンツェ (Reiner Kunze) であり (クンツェ 1992:10)、1978-82 年にはやはり同声明署名の R. キルシュ (Rainer Kirsch) であった (Müller-Enbergs 2010:657)。

さらに多数の作家を標的²⁵にした(Walther 1996:84)。

著名なハーベマンはフンボルト大学(旧ベルリン大学)における1963年10月から翌年1月の「ドグマなき弁証法?」の講義とセミナー(Havemann 1964)のあと、大学解職、SED除名となった(Müller-Enbergs 2010:498)。

ハイム(1913-2001)は、ユダヤ系、米国へ亡命、ハイネ研究でシカゴ大修士、皿洗い等のあとジャーナリスト・作家で成功、対独戦で米軍従軍(=反ナチ英雄)、「マッカーシー旋風」回避と朝鮮戦争抗議のため離米、1952年東独移住、1950年代には各種受賞の活躍をしたが、1956年の作家会議ではウルブリヒトと対立し、1965年「皆伐総会」が彼の「6月の5日間」(5 Tage im Juni)の原稿を攻撃した(Müller-Enbergs 2010:548)。この原稿の表題は「Xデー」であり、1953年のいわゆるベルリン暴動を記録した。

またクリスタ・ヴォルフ夫妻(Christa u. Gerhard Wolf)にはOV「二枚舌」(Doppelzüngler)、ヤンカ(Walter Jan-ka)にはOV「いかさま師」(Falschspieler)が開始された(Walther 1996:84f.)。シュタジは多忙であった。

アンソロジー企画具体化のすこしあと、1974年4月9日に、IMアンドレが「1973年11月の第7回DDR作家会議後の若干の作家たちの行動の作戦上注意されるべき若干の傾向の情報」をシュタジに通報した(Walther 1996:86f.)。そこには、「作家シュレジンガーやプレントドルフ、ヴァルター、シュタデ」が、党の「リベラルな文化政策[の実際の成り行き]への失望」を感じており、このグループから「党の文化政策に対する妨害行動が生じ得る」とあった。

そこでシュタジはシュレジンガー夫妻にOV「へぼ作家」(Schreiberling)、ヴァルターにOV「出版者」(Verleger)、シュタデにOV「道化師」(Narr)を開始した(Walther 同前)。作戦名「道化師」はシュタデの小説「王様とその道化師」(Der König und sein Narr, 1975)に由来するだろう。

WaltherはそこにプレントドルフへのOV「劇作家」(Dramatiker)も加えたが、それはアンソロジー事件終了後の導入である。

但しこの段階でのシュタジのアンソロジー対策は作戦事案(OV)のファイルを設けて監視を強めるだけであった。

1970・1980年代の東独作家へのシュタジの作戦リストは補注3、そのうちOVの容疑想定は補注4参照。

4. アンソロジー「ベルリン物語」企画(1974-76年)

アンソロジー企画は、作家が個人としてではなく集団として検閲という基本的支配手段に挑戦したのだから、当局にとっては重大案件であった。その企画の概要は以下のものであった。

プレントドルフとシュレジンガー、シュタデが、「ベルリン物語」と題するアンソロジーの出版企画についての「招待状」を、「とっさに思い浮かんだ名簿を作り、ハイムやヴォルフのような年輩の、実証された作家と並んで、より若い、まだ知られていない作家にも」送った。その送付先は記されていない

い(Plenzdorf 1995:8f.)。「招待状」は1974年1月20日付けの手紙(同前 215f.)のことである。手紙によれば:

「我々はあなたをアンソロジーに招待したい。その作業タイトルは“ベルリン物語”である」。

物語の対象を東ベルリンの戦後から現在まで、「自伝的またはフィクション的」いずれも可能で、「15~20人」の執筆による「250~350 ページ」の本を予定し、執筆期限は1974年末。

「編集者は全参加者」、全参加者が他の寄稿に「異議申し立て」可能、議論のあとで寄稿を撤回することもできる。全参加者が合意した原稿が「いずれかの出版社に持ち込まれる」。「資金リスク」は全員負担、「利益は量的尺度に応じて分配」、「決定は多数決による」。

「1975年1月か2月」の会合でテキストを決定し、出版社等への代表者2~3人を選出する。それまでは手紙差出人3人が調整する。

組織者3人とデ・ブルイン、ヘルムリン(Stephan Hermlin)、ハイム、クリスタ・ヴォルフの7人が「これまでに関心を表明した」。

次の7人を招待予定: フリース(Fritz Rudolf Fries)、Irmtraud Morgner、フューマン(Franz Fühmann)、Helga Schütz、シュナイダー(Rolf Schneider)、ヤコプス(Karl-Heinz Jakobs)、U.カント²⁶。

あなたが参加させたい「まだ若い有能で、出版が少ないか無い作家」を知っているなら、知らせて欲しい。

組織者とカタカナ表記の作家が本稿登場作家であり、そのうち下線が第1次寄稿者である。但しU.カントはのちに寄稿を取り下げた(表1参照)。

寄稿者全員による編集をPlenzdorf(1995:10)は「草の根民主主義」と呼んだ。手紙には「自主出版」を明示する言葉はないが、共著者全員による編集が出版社の編集関与(検閲)の否定を示唆しようとしたのかもしれない。

検閲挑戦は、751110情報(7節)によれば、1975年9月10日の寄稿者会合では明示される。

手紙には「1人」を例外として、「控え目な感動」を示す賛同回答があった。例外は「友好的ながら断固として拒否した」フューマンであった。理由は、ベルリンとの関係がないことと、集団的な「調整・決定・議論」は文学になじまないという信念であった(Plenzdorf 1995:9)。しかしアンソロジー企画の検閲打破という政治的目的には集団形成が必要だった。

実は、フューマンだけではなく、751110情報(7節)によれば、関心表明のヘルムリンも「すぐに参加を拒否した」。但しヘルムリンはすでに1972年に激しい検閲批判文をホーネッカーに送っていた(青木 2020:5節)。

関心表明のクリスタ・ヴォルフは第2次でも招待され、寄稿を催促されたが、「適時に寄稿を完成させ得ないという理由で回避した」(Plenzdorf 同前)。

関心表明・招待以外の募集は手紙の時点では最大6人

²⁵ 「Jurek Becker, Thomas Brasch, Siegmund Faust, Jürgen Fuchs, Reiner Kunze, Wolf Deinert, Brigitte Martin, Volker Braun, Klaus Schlesinger, Dieter Schubert, Gerald K. Zschorsch, Rosemarie Zepelin, 加えて Rudolf Bahro, Eva-Maria u. Nina Hagen, Guntolf Herzberg, die Renft-Combo,

Manfred Krug, Ekkehard Maaß, Bettina Wegner, Adolf Dresen」。個人以外にビートバンド(下線)が含まれた。ほかに西の作家グラス(Günter Grass)ほか5人と第II局による西の東ベルリン特派員4人も対象であった。

²⁶ 関心表明者と異なり姓アルファベット順ではない。

(=20-7-7)であった。しかし 1975 年春までの実際の寄稿は、関心表明 7 人のうち 5 人、招待 7 人のうち 3 人、これら以外の応募 10 人であった。これら 18 人(表 1 の Walther 以外)が第 1 次原稿 200 ページを構成し、不足を補うために同年 9 月に第 2 次募集をすることになった。

ところが情報をつかんだシュタジが、作家の中の IM を動員した作戦重点「自主出版」と、作家同盟、出版を管轄する文化省の協力によりアンソロジー企画を破綻させた。

破綻の経過は Plenzdorf 1995:6ff.)の「事件」と題する「説明のためのまえがき」(同前:裏表紙)(以下「まえがき」と呼ぶ)によれば(一部 1 節と重複、途中コメント挿入):

「74 年、73 年、72 年、それは、DDR という国が根本的に変化したと我々には思われた時代だった。1965 年 12 月の悪名高い第 11 回総会 [=皆伐総会(青木 2020: 3 節参照)]に続く重苦しい 6 年間のあと、目覚めのようなことを感じる事ができた。」

そうした「新しい方向のシグナルを発した」のは、ウルブリヒト(Walter Ulbricht)からホーネッカーへの交代²⁷、SED 第 8 回党大会[1971 年 6 月]、東独の「国際法上の承認の波[1972 年秋から]とそれに伴う大使館や特派員事務所設置であった。

「文学では新しい世代が公の場に登場し、[ホーネッカーの]「社会主義の立場に基づくなら、文学にはタブーが存在してはならない」という発言によって守られた。我々はこのうちの「文学にはタブーが存在してはならない」という部分を「心に留めた」。

[この発言は 1971 年 12 月の SED 第 4 回中央委結語にあり、実際には「存在してはならない」ではなく「存在し得ない」であった(青木 2020:4 節)。]

「68 年が我々を形成した」。すなわち「西欧学生の反権威主義の反乱」とチェコスロバキアの「社会主義民主化の試み」である。

両者は「異なる根源」を持つとしても「それらの方向」には「解放(Emanzipation)という概念」が共通であり、「我々は諸しきたり(Konventionen)の強制から抜け出したかった」。

[「プラハの春」は検閲などの「しきたり」からの「解放」であった(8 節)。]

「当時 [=「74 年、73 年、72 年」]、DDR は世界の他のどこよりも自由だと感じる事ができたと、[東独作

家の]かなりの者が 1970 年代後半の議論の中で主張したことを我々は思い出す」。但しそれは、作家が「その素材、登場人物」を選ぶ自由であり、移住の自由はなかった。

[この頃から作家など著名人には移住のための出国許可が多くなったが、当時は出国申請書式がなく、一般市民が提出した自作の申請書を内務係が罵倒しつつ破り捨てるほどの移住禁止であった。1975 年の CSCE ヘルシンキ宣言後もすぐには改善されず、ようやく同マドリード会議以後少しずつ改善される(青木 2009 参照)。]

我々は「社会批判的な作家」を自認したが、[反体制ではなく]体制内であろうとしたし、それ[社会批判]が体制側からも、「切望されるものではないとしても」、体制によかれと期待されていることを期待していた。

実際に「現状の不十分さ」を強調する新聞記事が出たのみではなく、例えばベッティナーナ(Bettina Wegner)が月 1 回開催した「アイントップ」(Eintopp)[1973-75 年]では、「超満員」の観客の前で率直なトークがなされた。その率直さは、そこに同席した「西のジャーナリストたちの、強制国家 DDR についてのすべてのイメージを粉砕するに違いない」ものであった。

「この時期に、この雰囲気の中で、アンソロジーのためのテキストを集めるというアイデアが生まれた」。

[アイントップは東ベルリン地下鉄駅「クロスター通り」近くの主要文化施設、FDJ 中央クラブ「若いタレント館」(Haus der jungen Talente、現 Podewil)で開催された²⁸。]

[以上に続いて「まえがき」は、「集団的編集者として我々の出版社の 1 つに対して登場する」という「アイデア」であったと記した。しかし手紙には、原稿が「いずれかの出版社に(einem Verlag)持ち込まれる」とあった。

手紙の表現には検閲排除の臭わせはないが、「いずれかの出版社」には、組織者の「元来の目的」であった独自の「作家たちの出版社」設立(9・10・13 節)も含み得た。

他方「まえがき」では、「我々の出版社」つまり東独既存出版社の利用に限られ、「作家たちの出版社」構想が含まれないが、出版社に「集団的編集者として」対峙するとは、いわゆる「著者編集」による検閲排除という意味である。換言すれば「[検閲による]訂正無しに公表するために DDR のいずれかの出版社に持ち込む意図」だった(同書冒頭にある本書の説明文)ということである。

²⁷ SED 中央委第 16 回会議(1971 年 5 月 3 日)のコミュニケによれば、ウルブリヒトが年齢を理由に「より若い人にこの職務を与えるために」、自分の第 1 書記解任を願い出て、「全員一致」でそれが承認され、やはり「全員一致」でホーネッカーを後任第 1 書記に選び、またウルブリヒトを「全員一致」で SED 議長に選出するとともに東独国家評議会議長の職の継承を決めた(Dokumentation 1971:546)。実際にはホーネッカー・グループによる奪権であった。

²⁸ 「Eintopp」はドイツの煮込み料理アイントプフ Eintopf をもじったかもしれない。当時シンガー・ソングライターとして活躍していたベッティナーナは 1975-76 年には東ベルリン・ヴァイセンゼーのラングハウス通り青年クラブで「雑貨店」(Kramladen)も開催した。1975-76 年に SED とシュタジの妨害の末、完全に禁止された。

アンソロジー組織者シュレジンガーも、当時妻であった彼女の企画に協力した(結婚期間は 1970-82 年)。

彼女は 1968 年チェコスロバキア侵攻や 1976 年ビアマン追放に抗議行動をした。捜査手続き導入など当局の圧力により 1983

年西ベルリンへ移住した。壁開放直後 12 月 2 日に「若いタレント館」で、追放された他のソングライターとともに公演した(Müller-Enbergs 2010:1390f.; Walther 1996:284; Wensierski 2015)。当時の彼女は Menge (1982)に詳しい。

彼女の手書きチラシ「プラハから手を引け」「赤いプラハ万歳」、公演禁止後の自宅での「小さなコンサート」などの写真は:
<https://www.jugendopposition.de/themen/145381/>。

Walther(同前)は、1975 年 1 月に OV「アイントップ」(のちに「へぼ作家」に改称)を導入、参加した青年たちは OV「一枚岩」(Monolith)や OV「アトリエ」(Atelier)で「処理された」と言うが、Walther(1996:366)では OV「へぼ作家」は 1974-1983 年実施である。あるシュタジ文書には VAO「へぼ作家」が 1975 年以来とある(11 節)。しかし同 OV 文書に 1974 年 11 月 13 日ベルリン作家同盟会員集会記録がある(8 節)ので、それが後日挿入でない限り、本 OV は 1974 年からである。補注 3 掲載の OV の中では OV「へぼ作家」の刑法容疑が最多であった。

「まえがき」などのこうした説明は、「元来の目的」を断念した1975年秋以後に固まった方針であって、手紙に即したもので、アンソロジーの「元来の目的」でもない。

1975年春までに200ページ分の原稿〔=18人の第1次寄稿〕が集まったあと、1975年9月10日に寄稿者会合を持ったが、招待者18人のうち出席は10人のみであり、「不安の雰囲気小さな会議を覆った」。

「不安」は〔当局の圧力ではなく〕、編集方針にある「草の根民主主義」の経験不足〔ゆえの欠席多数〕によるものであった。結局、編集の議論は延期され、また更に他の作家にも寄稿を呼びかけることになった。その結果原稿は350ページ分まで増えた。

ここで「まえがき」紹介を中断し、上記の9月10日寄稿者会合の決定を記した1975年9月25日付けの「回状」(Plenzdorf 1995:221f.)を紹介する(番号は原文)：

出席10人²⁹、欠席届け5人。

1. 〔春までに集まった〕手元にある原稿(第1次寄稿18本)はどの出版社にも提供しない。

2. 各「寄稿をめぐる議論〔=編集〕は延期」。

3. 「さらに以下の作家を招待：…〔21人の作家³⁰〕」。

4. その原稿提出期限は1975年12月31日。

5. 同意した新参加者に第1次寄稿を閲覧させる。

6. 全寄稿者の次回会合は1976年3月5日。

7. 新聞声明(テキスト同封)を作成し、会合欠席者の同意を前提に、その公表を作家同盟の「同盟通知」に依頼する。その可否または保留を知らせて欲しい。

8. 当日決めた組織者変更は候補の同意が得られなかったため、従来の3人が継続する。

9. 上記5項に利用するので各自に送付した第1次寄稿全部のコピーはシュレジンガー宛てに返送のこと。

10. これまでのコストは1250マルクゆえに各寄稿者が70マルク〔=1250/18〕をシュレジンガーの郵便口座に振り込むように。

「まえがき」紹介に戻る：

しかし「党とシュタジ、作家同盟がすでに我々のプロジェクトの終わりを告げ始めた。1975年秋に政治的な雰囲気が決定的に変化した。新しい活動をもって世に問おうとした者は至るところで困難にぶつかった」。

「見え透いた理由」での朗読会中止や西への旅行の延期ないし不許可が生じ、アイントップへの国家干渉も増えた。ハイムは、従来発禁だった3冊の本をSED第8回党大会後に出版することができたが、新しい小説が発禁になった。

「なおも我々は逆行の動きの原因を〔党〕機構の惰性や改革努力に心を開く能力欠如と見なした」。

ベルリン作家同盟において「ハイムが文化官僚の専門知識の無い介入に対抗する手段として一種の作家たちの出版社を要求した」。同じ場所でシュレジンガーは、朗読会・書評・インタビューにおいてプレント

ルフが受けた「困難」を話し、すぐにヘルマン・カント(Hermann Kant)〔U.カントの兄、以下H.カント〕が引き取ったが、回答はなかった。

〔この記述ではハイムらの発言が「1975年秋」に受け取られそうだが、1974年11月13日であり、彼らは「検閲廃止」の声高な要求をした(7節)。「作家たちの出版社」設立はすでに1975年春に延期に、同年秋から冬にかけて「長期目標」に棚上げされた(8・10・20節)。H.カントはIMマーティン(Martin)、当時作家同盟副会長であった。〕

他方、「党中央委員会の建物からひそかにホーネッカーが政治局の保守的部分に手を焼いているが、同志〔=SED 党員〕や仲間〔=非 SED 党員〕の作家や芸術家が彼らの活動によって新たに獲得された可能性を疑問視すべきではないと我々に知らされた」。

〔誰がいつ知らせたのか。政治局員ランバーツ以外には思い当たらない。「政治局の保守的部分」の背後では「クレラのみわりの人々」(1節)が突き上げたのだろう。〕

「まえがき」は次いで「プラットフォーム」(組織基盤)作りや西独出版社との契約、内紛などの偽情報流布や切り崩し、組織者たちの抗議活動(19節)などに触れたあと：〕

1976年3月19日の作家同盟幹部5人(ゲールリッヒ(Günter Görlich)〔=IM ヘルマン(Herrmann)〕など4人と遅れて参加のH.カント)と、プレントルフ、シュレジンガーの面談〔19節〕後、「長く経ってから、我々はあるDDRの出版社〔モルゲン〕を得た」。

「我々が計画したやり方に反して、しかし我々の同僚たちの理解を期待して」、その出版社に連絡すると、「若干のテキストを切り離す場合にのみ出版できる」という口頭回答であった。

〔組織者に引導を渡したのは出版社モルゲンではなく、H.カントであり、彼がそれを同社長にも指示した(20節)。〕

そこで「1976年春のいつだったかに」作業をやめてテキストを各著者に返却した。かくて「第8回党大会の文化政策原則がどれだけ本気で言われたのかを知らうとした者は、いまそれを知ることができた」。(紹介完)

「1975年秋に政治的な雰囲気が決定的に変化」という記述の直前には「我々の企画の終わりを告げ始めた」とある。しかしそこで挙げられた「政治的な雰囲気」変化の例は、朗読会中止、旅行妨害とハイム発禁であり、アンソロジー阻止作戦の開始を示すものではない。アンソロジー対策はなお同年11月半ばまで監視作戦に留まった。

現に、同年9月にはシュレジンガーが情報漏れに疑念を持ち組織者の間で「相互不信」と「悲観主義」が生じる出来事があったが、10月にはいずれも解消した(6節)。

1975年9月10日の寄稿者会合の情報がシュタジに漏れたことが当局のアンソロジー阻止作戦開始のきっかけの1つであったが、その作戦発動は会合の2ヵ月後であった。

実際に企画の「終わりを告げ」る「決定的変化」は秋の終わりに生じた。作戦重点「自主出版」発動によって初めて作戦が従来の監視から企画阻止に変わったからである。その

²⁹ 組織者3人のほかエルプ、ヘートル夫妻、クリングラー(Hans Ulrich Klingler)、グラチク、クナート、レスキーン。

³⁰ 「F. Berger, V. Braun, T. Brasch, G. Branstner, H. Czechowski, Michael Franz, K. H. Jakobs, S. u. R. Kirsch, W.

Kirsten, W. Kohlhaase, E. Krumboltz, K. Mickel, Heiner Müller, Doris Paschilla, J. Renner, G. Rücker, J. Sevppel, W. Trampe, J. Walther, Chr. u. G. Wolf」。下線が招待に応じた作家(脚注15)。

発動日は1975年11月10-12日の間と推定される(9節)。

だから、シュレジンガーらが、アンソロジーの「自主出版」企画に「党が感づいた」ための切り崩し工作を感じたのは、1975年12月である(9節のIMアンドレ通報)。冬に入ってからであった(詳細は7・9・9a節)。

5. 対策主役:IM アンドレ(作家ラウドン Hasso Laudon)、IM ヘルマン(作家ゲールリッヒ Günter Görlich)、IM マーティン(作家ヘルマン・カント Hermann Kant)、作家同盟第1書記G.ヘニガー(Gerhard Henniger)

作戦重点「自主出版」はミールケの新方針に基づいており、その成否の鍵はIMの質にあるとされた(3節)。

アンソロジー対策において中心的役割を果たしたIMは、ラウドン(Hasso Laudon)、ゲールリッヒ(Günter Görlich)、H.カント(Hermann Kant)という3人の作家であった(すでに1・4節に登場)。3人とも「政治的・イデオロギー的確信」から「長期かつ積極的」にシュタジに協力した作家とされる(補注2)。しかしラウドンは他の2人と相違点がある。

ハッソ・ラウドン(IM アンドレ)は1961-1983年にIMで、その種類はIMFかつIMS(それぞれ略語欄参照)、指導将校はシュタジ・ベルリン県支部第XX部少佐ヴィルト(Wild)であった(Walther 1996:86,192,326,647)。

本稿に頻出するアンドレ通報から分かるように、非常に勤勉なIMであった。彼はMüller-Enbergs(2010)にもBaumgartner(1996)にも登場しない。ネット上にも断片的な情報と写真しか見つけられなかった。

彼は「長期かつ積極的」IMではあったが、東独からの「逃亡」歴がある彼のIM協力はいわば実務的であり、「政治的・イデオロギー的確信」については疑問である。その点が当時党ベルリン県指導部員(のちに中央委員)でもあった他の2人とは異なる。

Walther(1996:506f.)は彼を、シュタジによるIMへの「物的・個人的関心」に基づく勧誘の例として取り上げた。

しかし実際には、シュタジ・エアフルト県支部第II部の勧誘員は「彼の文学計画のサポート」の約束(物的関心の充足)だけではなく、「彼の陰謀活動への関心並びに“償い感覚”を利用した」(Walther 同前、以下同様)。

「償い感覚」とは、勧誘員が彼の「共和国逃亡」[未遂]による逮捕の前歴を持ち出して、脅したということである。だからシュタジは彼を「大げさな説得術なしに」IMに雇うことができた。彼は東ベルリンに住居を用意され、シュタジの管轄も上記のようにベルリン県支部に移った。

彼は「勤勉かつ有効なIMFに成長し」、東西両独に投入され、多数の東独作家および西ベルリンの文学誌と東独作家の関係について通報し[シュタデ、シュレジンガー、ヴァルター、デ・ブルイン、ブラウンなど13人の名前]、西独ではKGBとも協力した。その活躍に1969年「国家人民軍功労賞」銅賞(200マルク付き)で表彰された。

1984年「健康事情により投入不可能ゆえに」容赦なくお払い箱にされた。その際の[彼からの領収書の]「破棄説明」(6月13日付け)によると、彼が20年以上に受け取った合計額は30566.50東独マルク(以下M)であった。そこには報奨金や功績金、国家記念日・誕生日祝いなどもあるが、立替経費の支払いも含んでいる。

ヴァルターの注記によると、「のちに」[いつかは記載無

し]ラウドンは出版者モルゲンの原稿審査係となりヴァルターや同係主任H.ヘニガー(Heinfried Henniger)の「友人」になった。しかし実はVAO(作戦予備文書)「原稿審査係」(対ヴァルター)やOV「出版者」(対ヴァルターとH.ヘニガー)にはラウドンの密告が重要な役割を果たした。しかしヴァルターはシュタジ文書を見たあとラウドンについて、「彼はIM活動によって私の人生よりも多く彼自身の人生を傷つけた」のだから、「怒りよりも多く同情を感じた」と言う。(以上Walther 1996:506f.)

ヴァルターのこの感情は、彼のゲールリッヒやG.ヘニガーに対するものとは大きく異なる。

なお、アンドレの受領額は経費の回収を含めて年平均千数百M、月平均100M少々にすぎない。工業労働者平均月収は1963年613M、次第に上昇し1975年895M、1983年1099Mであった(東独統計年鑑1989版)。

ギュンター・ゲールリッヒ(IM ヘルマン)のIM種類はIMSで、シュタジ指導将校は作家同盟との連絡将校でもあったシュタジ本部第XX/7局大尉ペニツヒ(Rolf Pönig)であった(Walther 1996:277,693,818)。

ゲールリッヒは「多数の社会主義リアリズム小説やテレビドラマ、児童書の著者」であり、1969-1989年ベルリン作家同盟議長、1973年から作家同盟幹部会員。IM期間は1961-76年、暗号名は最初「学生」(Student)、1962年から「ヴェゲナー」(Wegener)、1968年から指導将校ペニツヒのもと「ヘルマン」(Hermann)であった。1958-61年にライプツヒ文学研究所に在学。1964年に東ベルリンに転居。作家同盟書記を経て、1964-67年FDJ中央評議会委員兼SED中央委[政治局]青年委員会委員、1976年SED中央委候補[それゆえIM終了]、1981-89年同中央委委員であった(Walther 1996:647; Müller-Enbergs 2010:409)。彼は1964年青年法の制定やビート音楽の振興とビート抑圧の双方に関わったことになる。

彼は1974-89年にSEDベルリン県指導部メンバーでもあった(Baumgartner 1996:234)。アンソロジー事件当時IMマーティンも同メンバーであった(下記参照)。

Walther(1996:647ff.)は、「政治的・イデオロギー的確信」に基づき、シュタジの長期かつ積極的「非公式協力者」(IM)であった東独作家をリストアップした(補注2)。そのうちの3事例を詳論し、そのトップにゲールリッヒを取り上げた。その内容の一部は:

IM(当時の暗号名はGI「学生」としての彼の初仕事は1961年、[ライプツヒ文学研究所の]学友二人の「作戦的処理」であった。そのIMへの勧誘面接(同年7月)の際に、彼は「時間厳守で落ち合い、関心ある問題についてオープンかつ詳細に報告した。彼は陰謀に反対ではなかった」と面接官が記した。

「ベルリン転居(1964年)以来、彼はもっぱら作家同盟内の状況の評価と作家グループの人物評価のために投入された」。SED中央委[政治局]青年委員会委員となり、「同志ウルプリヒが自らこのIMをその断固とした政治的態度ゆえに貴重だと評価した」。

1975-76年にはアンソロジー対策に投入された。

彼のIM終了の際に指導将校ペニツヒが記した「終了評価」(1976年7月12日)によると、シュタジとの非公式協力において、「このIMは社会的課題遂行のための彼の高い投入用意によって傑出し」、「委託され

た課題の遂行において秘密厳守、信頼性、活発さを示し、「明確な政治的・イデオロギー的評価能力を持っていることが明らかに」になった。「だからこの IM は、作戦対象となった作家たちについての価値の高い情報を入手することが可能であった。特に〔アンソロジー企画阻止のための〕作戦重点“自主出版”に関連する彼の良好な非公式活動が強調されるべきである」。

彼は国家人民軍功労メダル銀賞(1974年2月8日)と報奨金 300 マルク(1976年2月8日)を受けた。

彼はヴァルターにとって仇敵の1人であり、彼を「SED ベルリン県トップ〔第1書記〕・政治局員ナウマン(Konrad Naumann)〔1985年失脚〕の悪代官(Satrap)であった」とこき下ろした(Walther 1996:649)。

ヘルマン・カント(IM マーティン)も IMS で、所属・指導将校ともゲールリッヒと同じであった。H.カントは1945-49年にソ連やポーランドで捕虜収容され、後者の収容所で反ファシズム委員会を共同創設、帰国後 SED 入党。彼の IM 期間は1963年3月5日-1976年4月9日。アンナ・ゼーガース(Anna Seghers)の後継として1978-1990年に作家同盟会長。〔アンソロジー事件当時は〕SED ベルリン県指導部メンバー(1974-79年)でもあった。彼の IM 引退も SED 中央委員候補就任による(Müller-Enbergs 2010:630f.; Walther 1996:212, 300,693)。

Müller-Enbergs(同前)には1969-78年東独芸術アカデミー副会長とあるが、間違いだろう。彼は1969年以来東独芸術アカデミー会員でもあったが、アンソロジー事件当時を含む1969-78年に作家同盟副会長であった(Baumgartner 1996:375)。その後会長職を引き継いだ。

作家同盟会長就任直後の H.カントの大仕事は9人の作家同盟除名(1979年6月7日)であった³¹。これには「前例のない統制」として、シュレジンガーほか³²がホーネッカー宛て書簡で抗議し、国家機関がますます頻繁に批判的作家たちを中傷し犯罪視していることへの懸念を表明した(MDR 2009、書簡も収録)。

Walther(1996:456)は、この除名決定に関連して、少し前にハーガーが H.カントや G.ヘニガーら作家同盟幹部3人に会って「党の方針を命じたことが興味深い」と指摘した。

G.ヘニガーは IM ではないが、作家同盟についてのシュタジの「公式情報源」ないし「接触パートナー」(Walther 1996:628f.)として重要な役割を果たした。彼は1966-90年と長く作家同盟第1書記であり、SED 中央委文化部や文化省出版・書籍販売本部、シュタジとの間で「枢要な役割を果たし、作家とその国際的結び付きについて広範囲の報告をし」、「シュタジから種々の表彰」を受けた(Müller-Enbergs 2010:524)。

彼はアンソロジーについてのデマ流布の一翼も担った(Plenzdorf 1995:13)。

6. フォルカー・ブラウン(Volker Braun)「未完の物語」

4節のように、アンソロジー組織者たちは1975年12月に当局がアンソロジー企画への圧力をかけ始めたと感じた。但し1975年春にも圧力を感じ、「作家たちの出版社」という独自出版社構想の実施を延期した(8節)。

1975年秋には彼らを悲観主義と再活性化の両方が襲った。その様子が、シュタジ大ベルリン支部³³第 XX/7 部の「中間報告:政治的・作戦的重点“自主出版”の処理について従来導入された諸措置の結果」(1975年11月28日、Plenzdorf 1995:242ff.、以下「中間報告」と呼ぶ)にある:

従来の措置は「本質的にはシュレジンガーと HD:シューベルト³⁴に集中した」。前者は OV「へぼ作家」で、後者は「IM 候補」(IM-Vorlauf)で処理された。〔「IM 候補」は IM として獲得する候補、IM-V とも言う。〕

シュレジンガーと彼の妻ベッティーナに近い友人知人グループの中に「何人かの IM が潜り込むことができた。その際特に IM ビュヒナー(Büchner)〔本名は原稿審査係 Sonja Schnitzler(Walther 1996:595)〕と同カール(Karl)〔本名不明〕、同アンドレ(5節参照)が個人的かつイデオロギー的な点でシュレジンガーとの信頼基盤を作ることができた」。

これらの IM によって「以下の作戦上興味深い情報が入手された:」

「9月半ば」の「非公式」〔=IM〕情報によれば、シュレジンガーは、「SED ベルリン県指導部書記・同志バウアー(Roland Bauer)とベルリン作家同盟幹部会員の間の話し合い」があり、そこでアンソロジーについても話されたことを知った。〔ここに言う幹部会員は中間報告の別の部分によれば3人である。〕

それを知ったシュレジンガーはバウアーらの話し合いの際の情報源が気になり、彼は「この時点以来新たな接触に対して特に疑い深くなり、彼とプレントドルフ、シュタデの間の雰囲気さえ口には出さない相互不信」が生まれた。しかしシュレジンガーら3人は「10月初めに」話し合って「再度互いに絶対的な信頼を保証し」、元に戻った。「にもかかわらず彼らの企画の成功に関する悲観主義のようなもの」は続いた。

ところが「10月の雑誌“意味と形式”(Sinn und Form)5号の発行」によって悲観主義は吹き飛んだ。そこに掲載された「ブラウンの“未完の物語”」³⁵が組織者たちにとって「新たな活動への強い刺激となった」。

³¹ Kurt Bartsch, Adolf Endler, ハイム、ヤコブス、Klaus Poche, シュレジンガー、シュナイダー、D.シューベルト、ザイペル(カタカナは本稿登場作家)。Endler とザイペル以外はビアマン追放抗議声明の署名者である。

³² ほかに Bartsch、ベッカー、Endler、Loest、Poche、D.シューベルト、シュタデが参加(カタカナは本稿登場作家)。

³³ 東独の州制度から県制度への移行により1952年にシュタジ地方組織のうち4つの州支部(Länderverwaltung für Staatssicherheit = LVfS)は14県支部(Bezirksverwaltung = BV)となった。しかし東ベルリンは「大ベルリン支部」(Verwaltung für Staatssicherheit Groß-Berlin)のままであった。ほかにウラン鉱

山のある Wismut が「Objektverwaltung »W«として県支部同等となったが、1982年にカールマルクスシュタツト県支部に所属した(Engelmann 2016: 61)。東ベルリンは1970年代にベルリン県支部となった*。おそらく両独基本条約発効(1973年6月)に伴う改称。(* http://www.ddr-wissen.de/wiki/ddr.pl?Bezirksverwaltung_des_MfS)。

³⁴ 第1次寄稿者 Dieter Schubert。名はシュタジ文書では Hansdieter。彼は1979年作家同盟除名となった(脚注31)。ビアマン追放抗議声明連帯署名者でもあった。

³⁵ 「シェークスピアのロミオとジュリエットの DDR 版」と言われ、「本としては当初連邦共和国〔西独〕でのみ刊行され DDR では1988年に刊行された」(Wolle 2013:333)。邦訳は道家(1980)所収。

シュレジンガーらのグループでは、「未完の物語」が「DDR における“効果の大きい体制批判文学”のための“シグナル”かつ“尺度”として受け止められた」。

シュレジンガーはこの物語を、「これまで DDR で出版された“体制批判文学の中では最も効果の大きいもの”であり、「この物語は短いにもかかわらず、ハイムの“体制批判の全著作”をはるかに凌駕する」と評し、「ハイム自身が妬みなしにそのことを承認するだろうし、ブラウンの“勇氣”にすっかり感動する」と語った。

原稿審査係ヴァルターも「ブラウンが“許可の限界を 1/100mm まで厳密に測定し”、“彼ら”にとっていまや可能な尺度を設定した」と評した。

かくてアンソロジー企画は東の間ながら、息を吹き返した。中間報告は、「MfS [=シュタジ]と人民警察、税関の調査結果」として、シュレジンガーの西ベルリンでの旧友や西独出版社との接触、およびスイスやミュンヘンの出版社との国内での接触を記載した上で、次のように指摘した：

ハイムが編集したアンソロジー「情報」(Auskunft - Neue Prosa aus der DDR)がミュンヘンの出版社ベルテルスマン(Bertelsmann-Verlag)から 1974 年秋に出版され、そこにシュレジンガーの寄稿も含まれた。その経験からシュレジンガーは「作家たちの出版社」に到達した。

しかしベルテルスマンは「作家たちの出版社」ではないから、その経験からシュレジンガーが「到達した」とすれば、「著者編集」(出版社原稿審査係の内容介入を排除)のアイディアだろう。「作家たちの(独自)出版社」は彼らの「元来の目的」であり、ハイムが公言したことがある(8 節)。

7. ZAIG(中央評価情報グループ)の 751110 情報

アンソロジー寄稿者会合(4 節)の 2 ヶ月後、1975 年 11 月 10 日(月)に「何人かの DDR 作家による出版社原稿審査係排除のもとでの物語アンソロジーの準備についての情報」(Nr. 788/75)が配布された(以下 751110 情報と呼ぶ)。

751110 情報は、アンソロジー企画について、シュタジの ZAIG(中央評価情報グループ)による諸情報分析結果と対策提案を「国家保安省」(=MfS、シュタジ)として党最高指導部に報告する文書であった。

IM 通報であれば、それを報告する指導将校名や通報者の暗号名、通報日が必ず記される。この文書にはそれがないのだから、明らかに IM 通報ではない。

751110 情報には、「MfS の手元にはアンソロジー“ベルリン物語”の原稿があり、必要な場合に閲覧可能である」とある。IM がこれを書くことはあり得ない。この記述も MfS(シュタジ)から外部宛ての文書であることを示している

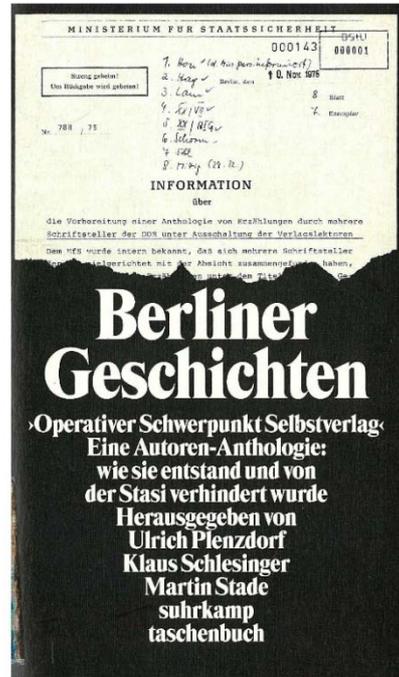
実は Plenzdorf(1995)はその本文全体を載せた(S.222 ff.)だけではなく、この文書の第 1 ページの上半分(ヘッダーと配布先、本文冒頭)の写真を表紙に掲載した(図 4)。このことは著者がこの情報を特に重視したことを示すし、またこの写真が**独特の書式**を明示している。

図 4 の先頭行にある、上下にライン付きの「MINISTERIUM FÜR STAATSSICHERHEIT」(国家保安省)とい

う大文字は、国家保安省が外部へ発信する ZAIG 作成の「情報」シリーズに固有の書式(ヘッダー)であり、そもそも宛先をヘッダーのように書くことはない。

この文書は第 1 ページに、ヘッダーと、その左下の四角枠の中の「極秘！要返却」という印字、右下の枚数・部数欄、本文の表題の先頭部分「INFORMATION über」(についての情報)が予め印刷された用紙を用いた。こうした用紙はこの「情報」シリーズのみである。

図 4 『ベルリン物語：「作戦重点自主出版」』表紙



(出所) Plenzdorf(1995:表紙) (注) 上部(白地)は 751110 情報の 1 枚目のほぼ上半分である。

省内文書ではこれらの位置に作成・発信部局や日付、省内の宛先が記された(ZAIG 自身が発信者の場合も同様)。これはそうではなく、ヘッダーが発信者を国家保安省と示すのだから、主な宛先は当然省外である。

この書式は ZAIG がまとめた重要情報を、シュタジから党中央などに通知する「情報」シリーズに固有であった。宛先には省内の関係部局も含まれた。国家保安省として発信する文書だから、そのどこにも ZAIG の名は出てこない(ZAIG とその「情報」書式の詳細については補注 5 参照)。

751110 情報は書式と宛先、内容を見れば ZAIG の「情報」シリーズだと分かるが、Walther(1996:277f.)が、それは BStU(シュタジ文書保管庁)分類番号「ZAIG 2469」のうちの「Bl.3-8」(第 3-8 枚目)であると記した。

但し「Bl. 3-8」は間違いである。図 4 右上隅の BStU スタンプ「000001」は Bl.1(1 枚目)を示し、その下に「8 Blatt」(8 枚)とある。だから正しくは「Bl.1-8」(第 1-8 枚目)である。

上記(1 節)のように、宛先はホーネッカー、ハーガー、ランバーツおよびシュタジ内の部局と幹部である。それを示すのが図 4 の中の手書き部分である。「1. Hon」とあるのが宛先トップのホーネッカーを指し、その横に「大臣が自ら通報」(「d. Min. pers. informiert」)³⁶と付記され、751110 情

³⁶ これを Walther(1996:277)はミールケがホーネッカーに「口頭で(mündlich)報告したことを意味する」と解釈したが、手書きに

は「pers.」つまり persönlich(自ら、個人的に)とある。口頭にとどめて「情報」文書を渡さなかったということとはあり得ない。

報が最重要かつ緊急の扱いであることが示された。

「2. Hag」はハーガー、「3. Lam」はランバーツであり(各肩書きなどは1節参照)、以下「4. XX/VII」(シュタジ第XX/7局)、「5. XX/AIG」(第XX局評価情報グループ)、以下3人であった(図4; Walther 1996:277,341)。主たる宛先は1から3.までで、残りはシュタジ内の伝達である。

写真には「7部」作成とあるのに、宛先は8つである。8番目のミッティヒ(Mittig)〔シュタジ大臣代理〕には「12月29日」という付記がある(渡す日付か?)。

751110情報は、状況説明(上記寄稿者会合(1975年9月10日)の内容と、第1次寄稿の氏名・表題・内容評価)と、提案(阻止作戦に切り換え)から成っていた。その目的はホーネッカーら文化・メディア政策の最高指導者3人から状況説明の結論としての提案の承認を得ることであった。

この文書はアンソロジー事件のみならず、党指導部とシュタジの当時の文化政策上の認識を知る上でも重要である。

751110情報には非常に奇妙な部分がある。それを明らかにするために文面を順に5項目(下記)に分類し、各項目の行数比重を紹介したい。行数はPlenzdorf(1995)掲載の同情報によることとし、分母は最初のヘッダー等や末尾の取扱注意を除く本文(合計201行)とすると:

- (1) アンソロジーの概要(35%)、
- (2) 各寄稿の「専門家による最初の評価」(46%)、
- (3) 「若い作家たち」の検閲批判と1974年11月13日ベルリン作家同盟会員集会(13%)、
- (4) レスキーンがアンソロジー準備を知らせた(2%)、
- (5) 提案(4%)。

(1)~(3)の状況説明が94%を占め、提案(5)は末尾に4%と、ごく簡潔である。その間に短く(2%)入る(4)は、レスキーンの情報提供(以下レスキー情報)に触れただけで、情報の中身がなく、唐突で奇妙である。その意味をこの情報の内容詳細から推測したい。以下が751110情報の内容である(番号は青木、途中コメント挿入):

(1) (1a) 「DDRの何人かの作家が“ベルリン物語”というタイトルの…アンソロジーをまとめ、それを無訂正で公表するためにDDRのいずれかの出版社に持ち込む意図を目的として集まったことが、内部情報[=IM通報]としてMfSに知られた。

出席者の意見では、すぐ印刷可能な原稿が作られ、DDRの〔既存〕出版社一どれかはまだ未定—には最後通告的に、ただ単に印刷技術上の制作と配本のためにのみそれをゆだねるべきである」。

〔「集まった」のは1975年9月10日のアンソロジー寄稿者会合を指す。予定された第2回は実行されなかった。

「DDRの〔既存〕出版社に限るという「出席者の意見」はレスキーンとクヌートが表明したもので、出席者の一致した意見ではなかった。この意見は「無訂正」出版=検閲排除を否定しなかったが、下記(1b)が含み得る作家たちの出版社設立という選択肢の否定を意味し、寄稿者会合後に組織者が二人の意見への合意を回答した。その回答を他の寄稿者会合出席者は知らず、知っていたのは、レスキーンが情報

提供した作家同盟(下記(4))と、それを通報されたシュタジだけであった。従って(1a)はレスキーン情報に基づくと断言し得る(下記(4)関連記述および10節も参照)。

その上、下記(1d)のように、すでに利用可能な出版社の候補も通報されていた。これもレスキーン情報だろう。

751110情報の表題(本節冒頭)にある「出版社原稿審査係排除のもとで」は、ここにある「出席者の意見」を反映した。それは既存出版社利用を意味するからである。このこともこの情報のシュタジにとっての重要性を示している。]

(1b) 「出席した作家たちは一致して、〔文化省〕出版・書籍販売本部³⁷の印刷許可手続きによるにせよ、または印刷を委託した出版社によるにせよ、物語の内容の変更と訂正を拒否し、受け入れないということである。それによって彼らは出版社の原稿審査係の機能を“検閲として”排除することをくろんでいる」〔検閲排除合意〕。「若干の作家たち」は国内出版不可の場合には西独での出版も「決して否定されるべきではない」と述べた。

〔これもレスキーン情報だろう。ここにある出席者の一致した意見は、出版・書籍販売本部と「印刷を委託した出版社」両方の検閲(補注1参照)の拒否であった。そのための選択肢の1つが作家たちの出版社設立であり、たぶん会合ではその可能性も出たのだろう。だからこそ(1a)後半のようにその選択枝否定(=既存出版社利用限定)の意見が出た。検閲排除での「一致」は(1c)にも記されている。]

(1c) 「発起人かつ組織者」は作家シュレジンガーとプレントドルフ、シュタデである。彼らは1974年からこの企画に尽力している。

「“検閲官”排除」という条件を了承してアンソロジーに参加した作家は以下のとおりである:…」〔第1次寄稿者全18人の氏名(のちに取り下げたU.カントを含む)と寄稿表題を列挙。表1のWalther以外に同じ〕。

〔2ヵ月後のZAIG文書には、U.カントら5人は「企画の目的」(検閲官排除)を知らされなかったとある(10節)。]

ヘルムリンとフューマンが寄稿を拒否し、クリスタ・ヴォルフは未完成を理由に「回避した」。

「内々に知られたところによると」、約200ページの寄稿全部〔のコピー〕が「参加した全作家」による相互評価のために全寄稿者に供された。

(1d) 「すぐ印刷可能な原稿が持ち込まれることが可能な出版社として発起人たちはこれまで出版社モルゲン、ヒンストーフ出版社(Hinstorff Verlag)³⁸、アウフバウ出版社(Aufbau Verlag)を挙げ、最近出版社モルゲンが有望とされた」。

(2) 「専門家による最初の評価では」18寄稿のうち「色々な寄稿」に「敵対的」で社会主義を中傷する叙述があり、「反社会主義的表現にまで到る、紛れもなく批判的な基本主旨が優勢」であり、「選別なしにDDRにおいて印刷することは決して可能ではない」。

「政治的・イデオロギー的、批判的・否定的な発言

³⁷ 「出版および書籍の卸売・小売りの統一的な政治的・イデオロギー的かつ経済的な国家管理の樹立のために」文化省内に1963年設置(BMib 1985:248)。詳しくは補注1参照。

³⁸ 1831年ロシュトックに開業、所有者・経営者が変遷したあと、

1959年に国に売却され、VEB(人民所有企業)になった。1990年有限会社、翌年信託公社がハイゼ・メディア・グループに売却した(Links 2016:147ff.)。

の中心」はハイムである。各寄稿は「偶然まとめられたのではない」。「疑いなく企画の構想の協議と管理があった」のであり、企画の「組織者たち」は、「社会主義リアリズムの本来の本質に批判的なものを集める、ないしは、そもそも社会主義内部に“批判的リアリズム”を築くこと」を目指している。

[ここに言う「専門家」は原稿審査係ではなくシュタジが依頼した専門家(文学関係 IM)である。シュタジは必要に応じて独自に専門家に依頼して評価した。IME ハイブリット(作家ケーラー)(脚注 17 とその本文)や GMS ヨハネス(14 節)がその例である。ともにシュタジ支部の IM であった。]

751110 情報に評価を提供した文学 IM は、私見では、この時点までの推移と後述の理由(シュタジとの関係)から IM アンドレが最有力である。IM マーティンにはは 751110 情報後に作戦の必要が説明された(16 節)。

「企画の構想の協議と管理」の存在は当局が最も嫌う組織形成を意味し、刑法上の訴追も可能である。]

「個々の寄稿の中では、専門家の評価によれば、特に以下のテーゼが[7 人によって]主張されている:」
[<>内は ZAIG の付記。]

・ハイム:「DDR の国家と国家機構(司法、保安機関)」の特徴は「教条的かつ無情な視野の狭さ」であり、国境出入りの自由こそが「社会主義への忠実さが本当か、それとも強要されたものかの最善の試金石である」[壁による国境閉鎖を批判]。<「この物語はすでに、出版社モルゲンが出版準備中の彼の本から、文化省出版・書籍販売本部によって削除された」>

・G.ヘートル(Gert Härtl):「DDR の社会主義社会体制」は個人にとって透明性がなく、彼らは疎外され操作され、その結果彼らは「具象的ではない」。「テロルが存在し」、それを「挑発」する「殉教者」が必要だが、成功の見込みはない。<著者は「知的傲慢」であり、ハイムがアンソロジーの「物語的中心を提供し」、ヘートルはその「本来の理論的根拠付け」をしている。>

[彼の妻ハイデ(Heide)の寄稿は問題視されなかった。このことが夫妻分解作戦に利用される(14 節)。]

・デ・ブルイン:「DDR の社会主義は特権を特徴としている」。住民は成果に殆ど与らず、責任者や幹部は欺瞞的である。<著者は、ベルリンの現状(「特権的、近代的、よそ者的」)に対して、自分を「本来の、プロレタリア的なベルリンの擁護者」と見なしている。>

・クリングラー:「第 10 回世界」祭典期間のための一種の“自由の展示会”が存在したが、「現実には抑圧的な狭い見、恣意、強制である」。<彼の寄稿は特に警察に対して「悪意のある攻撃的な語調が優勢」であり、「亡くなった幹部」[ウルブリヒト]に対して「攻撃的かつ畏敬の念の欠如」を示した。>

・プレントドルフ:「公式プロパガンダによる言葉の上だけの美化と、例えば特権のない青年たちが現実に見て体験するものとの間には、大きな矛盾が存在している」

・シュレジンガー:「1961 年の国境確保」[壁建設]が「一般的な意味でも主体的・個人的にも」、DDR 社会の「典型的なプロセス」である。

・シュタデ:「幹部は必然的に現実感覚を失う恐れが

ある」。

11 人の寄稿[以上の 7 人以外]は「容認可能」ないし「全く明らかに否定的」というところはない。

但し、「個々の寄稿、例えばシュタデの寄稿」は、このアンソロジーの文脈においては「客観的には否定的な相対的評価となるが」、「他の肯定的な文脈では十分その場所を持ち得る」。

「MfS の手元にはアンソロジー“ベルリン物語”の原稿があり、必要な場合に閲覧可能である」。

[組織者の 1 人にもかかわらずシュタデが例外として特筆して「相対的に肯定されたことは、評価者が IM アンドレである可能性を強める(両者の親しさは 8・11 節参照)。]

(3) 「内部情報」によれば、特に若手参加者がアンソロジー参加によって「世間に認められることを望んでいる」。その中の若干の者はアンソロジーに基づいて「文化政策論争を計算に入れ、その結果として印刷許可制度と“検閲”が撤廃されるべきだと考えている」。

これには「1974 年 11 月 13 日のベルリン作家同盟会員集会」が関連している。「そこでは特に作家ハイムとシュレジンガー、ザイペル(Joachim Seyppel)が社会主義に敵対的な議論と“DDR における検閲廃止”の声高な要求」をした。集会ではアンソロジー参加の別の 2 人が、アンソロジーの「企画が“対立と怒りの危険”を含んでいることは確実」であり、「これがねらい」、つまりアンソロジーは「観測気球」であって、「タブーが実際に撤廃されるかどうかの“試金石”だ」と主張した。

[ここに言う「タブー撤廃」はむしろホーネッカーの「タブーなし」発言を指している。]

また若手アンソロジー参加者の「若干は内部で、DDR の現実を…DDR の幅広い読者に説明することを義務と見なすと発言した」。その実行は「国家機関」との対立になり得るが、アンソロジー参加者の「構成」が被害を「わずか」にする「保証」となるとも述べた。

[ここまでがアンソロジー企画の状況説明である。]

(4) 「作家レスキーンが 1975 年 10 月初めに会話の中で作家同盟書記・同志ビュットナー(Erika Büttner)にアンソロジー“ベルリン物語”の準備を知らせたことが MfS [=シュタジ]に知らされた」。

(5) 「MfS によって、アンソロジーの発起人たちと著者たちの今後の行動をコントロール下に置くためにふさわしい諸措置が導入された」。

差別化された諸措置によってこの企画全体を阻止することが MfS によって提案される。[あわせて]否定的・敵対的勢力を孤立させるために、[対抗策として]ふさわしい寄稿を DDR の他の出版機関において公刊することが検討されるべきである」。

[その結果公刊された本が Vorstand(1976)(以下『物語る』と呼ぶ)である。補注 6 参照。]

「この情報は情報源の危険ゆえに[配布された]本人の閲覧に限られる」.[紹介完]

このように(1)~(3)からの結論(5)が、寄稿者の「コントロール」(監視)を一層強化しつつ、差別化措置によってアンソロジー企画を阻止し、加えて「ふさわしい寄稿」(上記 7 人以外)の別途出版という対抗策を取るという提案であった。

情報(1~3)のうちこの提案を決断させた理由を要約すると、(a)寄稿者会合に「出席した作家たちは一致して」検閲排除に合意したこと、つまり支配への集団的、組織的な挑戦であること、(b)検閲排除のもとに出版されようとしている作品 18本のうち7本もが「敵対的」ないし「反社会主義的」と判明したこと、(c)企画に「構想の協議と管理」、つまり組織性(いわゆるプラットフォーム形成)があることであった。

いずれもシュタジには衝撃の事実であり、党と国家の守護神シュタジのチェキスト的超法規手段の出番になった。

情報源については、上記のように(1a)は明らかにレスキーンであり、(1b)~(1d)はその関連情報である。従って(1)全体の主な情報源は、(4)にあるレスキーンである。それをシュタジに通報したのは IM マーティン(H.カント)と IM ヘルマン(ゲールリッヒ)であり、二人は自らレスキーンやクヌートからの聞き取りもした(詳細は 10 節)。

(1)では「内部情報」と「内々」情報、(3)では、ベルリン作家同盟会員集會を別にして、「内部情報」と「内部で」の情報が引用された。これらは情報源の違いによるだろうから、レスキーン情報以外の情報源もあったはずである。

シュタジ・ライプツヒヒ県支部第 VIII 部が寄稿者会合を「観察」させその意図をつかんだという記録がある(10 節(2))。「観察」者が誰かについては 14 節(2)で検討するが、「観察」者を確定することができなかった。

(2)に必須の寄稿入手方法は後述する(9・14(2)節)。

(1b)にある「一致」には同席した寄稿者グラチク(IM ペーター)も含まれることになる。彼自身が「検閲官との紛争」の経験者でもあり、また2年半後に IM を拒否するので、同意は表向きではなく、本心であった可能性もある(15 節参照)。

さて、奇妙な(4)について考えたい。(4)には第1次寄稿者レスキーンがアンソロジーの準備を知らせたとあるだけである。詳しい状況説明が終わったあと、今後の作戦提案の直前に、なぜ間接的情報提供者の名前を挙げたのか。全く唐突にレスキーンが登場する。

(4)により存在が知られた情報、つまりレスキーン情報の内容は、751110 情報では明示されていない。それは、(1)の殆ど(上記のコメント参照)と、作家同盟第1書記 G.ヘニガーの「メモ」の(2)および IM ヘルマンと IM マーティンによるレスキーン発言紹介だと考えられる(10 節参照)。詳細は両 IM の通報文書にあると思うが、私は未入手である。

シュタジに両 IM が伝えたレスキーン情報が(1)に「内部情報」等として書かれたのなら、なぜわざわざ(4)に情報提供の事実と提供者の実名を記したのが疑問になる。他意がなければ、(1)の中のどこかがふさわしい。

Walther(1996:341)によれば、「第 XX/7 局将校ペニヒとエーデルが引き抜きための、U.カントと並ぶもう1人の候補」として注目したのがレスキーンであった。いつ注目したかは書かれていないが、注目理由として、彼は10月初めに作家同盟に情報提供したこと(上記の(4))、またゲールリッヒと H.カントに「党が正しいと思うなら」寄稿を取り下げると約束したことが挙げられた(Walther 同前)。

ペニヒらは当然 751110 情報作成に関与したはずで、その時点では引き抜き作戦(11 節参照)にレスキーンが最適と考えられただろう。U.カントの引き抜きは 8 月にも考え

られたが、具体化は 751110 情報後である(16 節)。

それゆえ(4)は、(5)にある阻止作戦の説明のためであり、ミールケが口頭で「こういう人物を差別化・阻止作戦に利用することができる」と説明したのではないかと推測される。

(5)の提案が承認、具体化された分解・阻止作戦が、**作戦重点「自主出版」**であった。この作戦名「自主出版」は、10 月初めのレスキーン情報に初めて登場した言葉である(10 節)。それが作戦名に採用されたと考えられることも、上記の推測を強める。

シュタジの作戦名は、「自主出版」のように案件の特徴や「銀行員」のように対象の職業、「邪魔者」(Störenfried)のようにシュタジの思いなどを採用した(作家向けは**補注 3**)³⁹。アンソロジーの特徴を示す「検閲」は当局用語になかった。

なお、ZAIG 情報 49/76(1976年1月17日)にも「U.カントとレスキーンが引き抜きのための一対の手がかりであった」とあるし、その後も作家同盟のレスキーン説得が続いたが、結局彼の引き抜きは成功しなかった(詳しくは 10 節)。

作戦重点「自主出版」の**終了日**は明確である(21 節のように 1976年9月2日)が、開始日を示す記述や資料は Plenzdorf(1995)にも Walther(1996)にもない。

開始日は 9 節において特定するが、明らかに **751110 情報後**である。その理由は：

- (a) 開始が 751110 情報以前であれば、同情報は同作戦の進行状況を説明するはずだが、そうではないのみならず同作戦の名前さえ登場しない、
- (b) 同作戦の目的であるアンソロジー出版阻止は 751110 情報が初めて提案した。それ以前は監視強化とせいぜい引き抜き勘案に留まっていた、
- (c) 同作戦の阻止戦術は 751110 情報の提案と同じである(差別化による分解・阻止)、
- (d) Plenzdorf(1995:資料編)における「自主出版」という言葉の初出は 1975年11月20日の作家同盟第1書記 G.ヘニガーのメモにあるレスキーンの[10月初めの]言葉である(10 節)、
- (e) シュレジンガーらがアンソロジー参加者の切り崩しのための「協議が色々なやり方で「仕込まれ」ている」ことを察知したのは 1975年12月である(9 節)、など。

751110 情報までシュタジは監視強化に留まり、1975年春に「作家たちの出版社」設立企画が発覚したあともそうであった(8 節)。それはなぜか。設立企画の証拠がシュタデと IM アンドレの個人的会話のみである上に設立がすぐにたち消えたので、「この時期」の「この雰囲気」に対するミールケの新方針(3 節)にそぐわなかったからだろう。

差別化による分解・阻止作戦が必要かつ可能になったのは、その後に組織実態やその意図、寄稿の内容など、アンソロジー企画の全容の情報を得たからであった。情報を完全なものにしたのはレスキーン情報と寄稿全部の入手であり、9月10日の寄稿者会合以後であった。

他方、アンソロジー組織者たちの検閲打破の方法は、「元来」は独自の「作家たちの出版社」による出版であったが、それは 1975年4月に「延期」され、その後「長期目標」に棚上げされ、「短期目標」は既存出版社を原稿審査係排除のもとで利用するという「著者編集」方式になった(8・9・

から見た特徴か。大量の暗号名にシュタジも苦労しただろう。

³⁹ シュレジンガーとその妻に対する OV「へぼ作家」は職業かつシュタジの腹立ちか、クリスタ・ヴォルフ夫妻の「二枚舌」はシュタジ

10・13 節)。いずれについても、妨害・障害にどう立ち向かうかという方針が不明で、わずかにヴァルターがやきもきしただけであった。

8. 注意報: プラハの春の想起、ピアマン誕生会、IM アンドレの「作家たちの出版社」通報

751110 情報にあるように、検閲挑戦はすでに 1974 年 11 月 13 日、「文学と現実」というテーマの ベルリン作家同盟会員集会 で公然と主張された。その様子をシュレジンガー夫妻に対する OV「へぼ作家」が記録した (Walther 1996:85ff.) :

ベッカー (Jurek Becker) が、「文学は騒ぎを起こさねばならない、何が文学にふさわしいかは作家だけに委ねられたままでなければならない、検閲の結果は“社会主義的な園亭文学”であり、そこでは質ではなく意図が評価される」と報告した。

「ハイムがそれに同意し検閲廃止を支持した。シュベルト (Dieter Schubert)、ユスト (Gustav Just)、シュレジンガー、プレントドルフほかがそれに同意した。「積極的に反対」したのは「H.カント、ヴェルナー (Ruth Werner)、コールハーゼ (Wolfgang Kohlhase) と、レヴェレンツ (Walter Lewerenz、新生活出版社原稿審査係) だけ」であった。その場の「多数は受け身の態度を取った」。

同席した多くの「信頼できる IM たち」がその指導将校にこの集会についての驚きの報告をした。

加えて、同席した「文化相代理で文化省出版・書籍販売本部長の同志ヘプケ (Klaus Höpcke)⁴⁰」が、シュタジの彼の固定接触パートナーに次のように通報した:「ヘプケは「集会の経過について非常に気がり」であり、「彼が知る限りでは、その種のグループで、かつそのように激しい形でわが国家の文化政策への攻撃が生じたのは初めてである」と述べた。

さらに「ハイム、シュレジンガー、プレントドルフが DDR の中堅幹部に反対して激しい形で発言し、検閲の廃止を要求した。ハイムからは、作家たちの独自出版社 要求さえ出された。同志ヘプケは、ハイムやベッカー、シュレジンガー、プレントドルフの要求は チェコスロバキアの反革命的発展 [=プラハの春] の始まりを想起させるという論拠に耳を閉ざすことはできない」と言い、だから「対策を講じなければならないという見解である」。「同志ヘプケ」は文化相や中央委の当該専門部 [=文化部] にも通報し、「相応の措置を提案」するつもりである。

Plenzdorf (1995) の「まえがき」自体が認めるように組織者は「68 年」のチェコスロバキアに学んだ (4 節)。当時このことを指摘したのはヘプケ以外にもいた。

シュタジ第 XX 局の「作家および文化創造者の現在の反応と意見表明についての情報」(1976 年 3 月 31 日) によると、「無党派の作家ハックス (Peter Hacks)⁴¹」が、「内部で

知られたある会談」で、「君らの党 [SED] がすぐに介入しなければ、党は 1968 年に似た状況を経験するだろう」、「プレントドルフやシュレジンガーとその一味に注目するなら、説明は不要だ」と言った (Walther 1996:87)。

つまりアンソロジー企画はプラハの春の際の作家たちと同様に検閲打破を狙っているのに、党はいつまで放置するのかということであった。

従ってアンソロジー企画の検閲打破の意図は作家たちのかなり広い範囲に知られていたことになる。

1968 年 4 月のチェコスロバキア共産党行動綱領には「事前検閲を排除することができるかを…これまで以上に明確に定める必要があると考える」(みすず書房編集部 1968:207) とあり、ドブチェクは翌月「現在新聞法の準備がなされており、それには表現の自由と検閲制度の廃止がもりこまれるはずである」と語った (同前:263)。もっともすでに、「検閲は、はじめは非公式ではあったが、二月に中止になっていた。プラハの新聞社には検閲官がまだやってきたが、新聞を調べることはなかった」(同前:92)。ワルシャワ条約機構軍 75 万の侵攻後すぐに「以前の検閲制度が復活し確立された」(同前:93)。こうした経過は東独作家には周知であったに違いない。

上記会員集会の翌々日 (1974 年 11 月 15 日) にピアマンのアパートで彼の誕生会 (14 時～翌 3 時) があり、シュタジ文書 (AOP 11806/85, Bd.18, Bl.115-7) によると:

シュタジが確認した出席者 42 人にはハーベマン夫妻やハイム夫妻、シュレジンガーとベッティナー [二人は夫婦]、ベッカーという「すでに長年政治的・否定的として知られた人物と並んで」、クナート、その他の作家や俳優、諸芸術賞受賞者といった「有名文化人」、さらに何人かの外交官も含まれた。

また学籍除籍されたザルマン (Michael [Salli] Sallmann) が「ピアマンのたつての希望で」ライブチックから出席し、ピアマンの「友人として」紹介された。ザルマンはこの場で「DDR の社会的諸関係に極端に反対する内容の幾つかの自作の歌を歌った」。その 1 つは、スウェーデンに住む恋人のところへ行こうとして国境で射殺されたある妊婦についての歌であった。ピアマンは「ザルマンをこの歌によって特に高く評価した」。「歌手ベッティナーはザルマンの登場にととても感激し、彼に「彼女の次の催し [たぶんアイントップ] の 1 つにおいて彼女と共同で公然と出演するという提案をした」。

「同席した諸情報源」 [=複数の IM] によると、「ゲストの誰も…ザルマンやピアマン、その他のゲストの敵対的・否定的な侮辱や発言に対して抗議しなかった」。

推測するに、前々日の作家集会での検閲挑戦の話題も出ただろう。

「いわゆる作家たちの出版社」についての IM アンドレの生々しい通報が、1975 年 3 月 29 日のシュタジ大ベルリン支部第 XX/7 部の「情報: 作家グループ シュレジンガー・プレントドルフ・シュタデ」(Plenzdorf 1995:216f.) にある。

Walther (1996b) に 1987 年メーデー行進中の彼の写真がある。

⁴¹ ハックスはベルリーナーアンサンブルに所属したことのある劇作家でもあり、ミュンヘン大学で学び 1951 年に博士、1955 年東独に移住。1972 年から芸術アカデミー会員、西独フランクフルトの文学アカデミー会員でもあった (Müller-Enbergs 2010:468)。

⁴⁰ 1933 年生まれの前ヘプケはライブチックのカールマルクス大学でジャーナリズムを学び、同大学助手、SED や FDJ の地方幹部などを経て 1964-73 年に ND 紙の文化・芸術・文学担当編集委員となり、1973 年にハイド (Bruno Haid) から文化相代理と出版・書籍販売本部長を引き継いだ (Müller-Enbergs 2010:577f.)。

ここではアンドレは「IMF」(略語欄参照)とされ、25日に次のように通報した(以下750325アンドレ通報と呼ぶ)：

1975年3月15日に[アンソロジー組織者の1人]シュタデ(以下St)がIMアンドレ(以下An)宅に来て「2-3時間」話した。その中でStは「いわゆる作家たちの出版社を作る企画を語った」。

企画は次のとおり：作家たちの出版社は「国家と党によって公式に許可される企業には決してなるべきではない」。「重要なこと」は、SEDの文化政策に反対であるために「出版の際の困難を持つ作家たちを何らかの方法で組織的に結集すること」であり、それによって「相互に物質的に助け合いつつ、[検閲に引っかかる]その文学作品を原始的な(primitiv)方法で印刷し大衆に届けること」だけである。

Stが言うにはそのヒントは、ピアマンが公演禁止になった時に、「多くの若い人たちがピアマンの作品を西の印刷物から書き写し」て広めたことにある。彼らのこうした「自然発生的反応」を「組織された形態に変換」するのだ。「その組織形態がこのいわゆる作家たちの出版社である」。「シュレジンガーの住居で近々この企画について幾つかの話し合いが行なわれるだろう」。

Anによると、「この考えの発案者はとりわけベルリンの作家シュレジンガーとプレントルフであり、Stが言うように、このアイデアの背後にはさらに首都の若干の有名な作家たちもいる」。

StはAnにこの企画に参加するかどうか尋ねた。Anは「すぐには了解せず」、この企画は「ある種の反体制派形成」であり、そのため「国家措置により絶対的な文学的孤立に追い込まれる危険を冒すこと」を覚悟する必要があり、「考える時間」が欲しいと答えた。

それに対してStは、確かに危険はあるが、「少なくともある程度の期間“党による検閲”を回避するためには他の打開策は考えられない」と答えた。

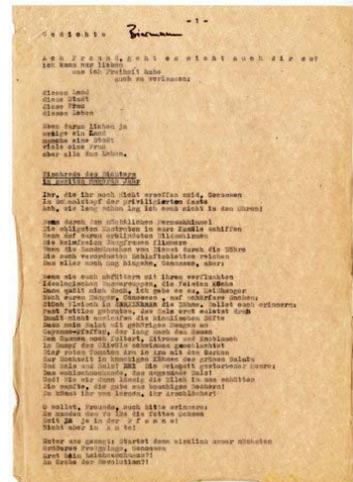
上記の「多くの若い人たち」によるピアマン作品の書き写しは薄いタイプ用紙(Durchschlagpapier)を使ってタイプライターで一度に何枚かカーボンコピーした(一例は図5)。

既存出版社に原稿を修正させないという方法には、出版社の説得に加え文化省の印刷許可という難問が存在した。「公式に許可され」ない「作家たちの出版社」(「作家たちの)独自出版社」とも言う)を実現するには、当局の印刷許可なしに印刷機と印刷用紙を調達し、どこかで印刷・製本・配本するという難問が存在した。

バーロ(Rudolf Bahro)が使った方法もある。彼はBahro(1977)(邦訳『社会主義の新たな展望』)を非合法に「フンボルト大学の生物学図書館の地下室で70部コピーしDDRで初めて刊行した」⁴²。それには複写機を設置した公的機関の職員の協力が必要であり、協力者は露見すれば

罰せられた。複写も厳重に統制されていたから体制転換後すぐに多くの「コピー屋」が出現した。

図5 カーボンコピーで流布したピアマンの詩



(注)詩は「Ach Freund, geht es nicht auch Dir so?」(友よ、きみも同じだろう)(ピアマン 1972:76-77)と、「Tischrede des Dichters im zweiten mageren Jahr」(痩せ細る第二年の詩人のテーブル・スピーチ)である(同前78-81)。

(出所) <https://www.jugendopposition.de/themen/145415/>

図6 騰写版輪転機



(注)東ベルリン・シオン教会環境図書館でシュタジが押収。下が外見、上が中身。原資料BStU AU 245/90; AU 245790。(出所) <https://www.jugendopposition.de/themen/145394/mfs-aktion-gegen-die-uh>

東独では印刷機や複写機は厳重な管理下にあったので、まともな印刷機を非公式に設置することは難題であった。

シュタデらの「原始的な方法」はまさかカーボンコピーで

⁴² その複写に協力した女性ベネケ(Ursula Beneke)とその子たちはその後「こせこせかつ下劣な困難」な目に遭わされたと言う。

Bahro(1977)の原稿の国境越えは東独音楽研究のスイス人、西独の労組系出版社 Bund-Verlag への持ち込みはかつて「修正主義者」とされたベーレンス(Fritz Behrens)であった(Bahro 1990:545f.)。これを故佐藤経明教授に話すと、ベーレンスに会われたことがあるようで、「プロイセン将校ふう」と良い印象ではなかった様子だった。ウルプリヒトの「新経済制度」立案に関わったと

言われるベーレンスもすでに年金生活者として出入国可能であった。フンボルト大のコピー機の種類は分からないが、1980年代初めのベルリン経済大学図書館のコピー機はリコピーのような湿式のため経年劣化し、しかも職員に依頼する方式だった。私が同図書館から借り出すことができた輸出禁止の『計画化規則』の複写は湿式では困るし複写拒否の恐れもあり、西ベルリンへ持ち出しコピー屋で複写して西ベルリンから日本へ送り、知り合いの西ベルリンの研究者にも提供し、彼が持つ同種の反対給付も受けた。

はない。西から印刷機か複写機の無許可持ち込みに成功しても、IM によってシュタジに露見するのは時間の問題であった。シオン教会牧師館地下の環境図書館(東ベルリン)が持っていた謄写版輪転機(図 6)のようなものを考えたかもしれない。この場合も「印刷許可」が問題になる。

環境図書館の印刷物は「教会内情報のためのみ」として許可されていた。だからそこで「環境新聞」などの教会内限定印刷物を印刷することは合法であった(補注 1 参照)。同じ印刷機で印刷された「国境崩壊」(Grenzfall)は許可を得ない非合法印刷であり、1987 年末にシュタジが手入れに入り逮捕したが、実物を見つけれなかった。環境図書館事件として多数の市民が連日抗議集會を持ち、1989 年の国境崩壊にいたる 1 つのきっかけとなった。

シュタデが言うように「公式に許可される企業」にならないとすれば、どの方法にせよ地下出版になり、アンドレは「ある種の反体制派形成」としての「危険」を危惧した。しかしシュタデは「他の打開策は考えられない」という決意であった。

アンソロジー組織者たちは東独検閲制度を熟知しているはずにもかかわらず、実行策は曖昧なまま上記のような決意をした。だから 3 週間後、1975 年 4 月 16 日の IM アンドレ通報(Plenzdorf 1995:217f.、文書は 19 日付け)には次のようにある(750416 アンドレ通報と呼ぶ)：

St によると、アンソロジー発起人 3 人の相談の結果、作家たちの出版社設立の「組織的活動を実行しない」ことになった。というのは、「党と国家機構が目下のところあまりに強く彼らに“狙い”を定め」、シュタジも IM を「彼らの周りに配置している」、「この状況で“公然たる対決”(eine »offene Konfrontation«)に賭けるのは賢明ではない」からである。

しかしこれは出版社企画の「破棄」ではなく「延期」であり、プレントドルフの米国旅行⁴³の間に「更なる同調者」の獲得工作をすとも St は言う。

St は An にも再度、An は作家である上に「豊富な原稿審査係経験」があるので、是非この出版社企画に協力してほしいと言った。An は断り切れず、「この企画の形式的な法的状態が非合法の非難を許さない」状態であるなら、「協力する用意がある」と返事した。この回答に St は満足した。

「この状況」としてこの 3 週間に何があったかは明らかではない。

このアンドレ通報が正確なら、シュタデ発言は、彼らが「この状況」を同調者拡大で打開し、その上で作家たちの出版社設立のためには「公然たる対決」も辞さないという考えだったことを意味する。そのためにシュタデは IM アンドレに寄稿のみならず出版社企画への支援も要請した。

「更なる同調者」獲得(第 2 次募集)後の経過、例えばヴァルターの「広い世論」に訴える案も採用されなかったこと(17 節)を見ると、結局は組織者たちに「公然たる対決」に踏み出す決意がなかった。

しかしながら、他方で、アンドレの「非合法でないなら」協力するという回答にシュタデが満足したということは、彼は、検閲を排した作家たちの出版社設立を合法的に、「公然たる対決」なしに可能だと考えていたことになる。これは、シュ

タデの 3 週間前の「公式に許可される企業にはならない」という発言(上記の 750325 アンドレ通報)と矛盾する。おそらく設立構想自体があいまいだったのだろう。

当局にとっての検閲制度の死活的な重要性を熟知した作家たちが状況判断も構想も曖昧なまま設立に進もうとしたのは一体なぜだったのか。それは理解しづらいが、結局のところ、組織者たちが感じていた「この時期」の「この雰囲気」(1 節)ゆえなのかもしれない。そうだとすれば、アンソロジー企画は、その関係者たちが「この時期」に実際に感じ取っていた高い自由度を示すことになる。だが、「タブーなし」は融通無碍な「社会主義の確固たる立場」を前提し、権力の都合次第でもあった。

なお 1980 年代になると、「地下文学雑誌」(literarische Untergrundzeitschriften)、つまり「許可なく“自主出版”」される「印刷・複写物」が登場した。「ほぼ 1982 年以来」東ベルリン、ライプツヒヒ、ドレスデン、カールマルクスシュタットで 6 種類確認された(各 15~100 部)。内容は東独を「公然と攻撃する」ことはないが、「大部分が社会主義に無縁で、悲観的ないし実存主義的」であった。関与する作家として 28 人の名前が挙げられた。殆どがアンソロジーに関与しなかった作家だが、Neumann(ヘートル(夫))や関心を表明したクリスタの夫(Gerhard Wolf)の名がある(Walther 1996:120f.)。これらはアンソロジー企画と異なり、公然と「自主出版」しようとしたのではなく「地下」出版であった。

9. 警報と作戦重点「自主出版」の開始、最初の成果

751110 情報と作戦重点「自主出版」に到る経緯についてヴァルターの見方は私見(7 節)と異なるので、詳論したい。シュピーゲル誌の Walther(1996b:265f.)によれば(一続きの原文を青木が番号を付け区分、途中コメント挿入)：

(1) シュタジ本部が 750325 アンドレ通報(8 節)を「最高度の警報」と受け止め、「急いで」追加調査した。その結果、「3 人の作家たちの企画」、すなわち「ベルリン物語」を仮題とするアンソロジー企画が「大幅に進捗」し、当初は既存出版社を利用しつつも検閲による「ごくわずかな変更もなしに印刷・販売」させるつもりであったが、今や「作家たちの出版社」を作って「検閲を回避する」つもりだと判明した。

[ここには組織者の方針が既存出版社利用から作家たちの出版社へ変更したとあるが、実際には逆で、「元来の目的」は作家たちの出版社で、のちに既存出版社利用に変更した(下記のシュタデ発言や 10 節、13 節参照)。]

(2) そこでシュタジ本部は「この知らせに、改革志向の作家たちの文学的企画に対してかつて仕組まれた最大の秘密警察作戦[=作戦重点「自主出版」]によって反応した。1975 年 11 月にアンソロジーの出版を“無条件に防止すること”をシュタジトップのミールケが部下たちに命令し、“全要員の投入”を命じた。

[このミールケ命令の典拠が記されていないが、内容から、1975 年 11 月 21 日のアンソロジー対策第 2 回協議会での第 XX 局長の説明に拠ると見られる(9a 節参照)。]

(3) 「今では省内でそう称されるところの“作戦重点自主出版”の指揮は、悪名高い第 XX 局長・少将キーン

⁴³ シュタデによると、プレントドルフの米国出張は東独作家同盟とニューヨーク大学ドイツ研究所の間の協定によるもので、相手が

1975 年来訪に「断固として固執した」(Plenzdorf 1995:218)。

バーク(Paul Kienberg)に委ねられた」。

(4)[具体的には]「作家たちの企画の“抹殺”が今や“第9回党大会の名誉のための党の指示”と見なされたので、シュタジの担当将校たちはただちに関与する文学者たちの殆どを24時間監視させた。IMたちや文化幹部たちは、様々な“協議”の中で作家たちにその寄稿を撤回させようと試みた。「加えて」、組織者3人は「本当は政権に敵対的な地下グループを設立するつもりだ」というわさを広めた」。

(5)「10ヵ月にわたる“分解工作”のあと、勤勉なシュタジ集団は党のトップに誇らしげに成果を報告した:5人の作家がその寄稿の返却を要求し、若干の者がSEDの前ではっきりとこの企画から距離を取った、と」。

(6)同作戦は「国家指導部の知識人に対する深い不信の特に印象深い例を示した」だけではない。同時に、「ミールケがアンソロジー捜査の状況についてSED書記長ホーネッカーに“自ら”報告した」ほどに、「DDR権力者が検閲制度を回避しようとするいかなる試みにもいかにまさに激しく反応するかを示した」。

(5)には「分解工作」つまり作戦重点「自主出版」が10ヵ月とある。その終了宣言は1976年9月2日である(Plenzdorf 1995:307)から、開始は10ヵ月前=1975年11月となる。「5人」の取り下げとあるが、明白なのはU.カントとラントグラフ、可能性があるのはレンツであり、ほかは不明である。

(6)にある「ミールケが…“自ら”報告」は、「アンソロジー捜査の状況」の報告ではなく、阻止作戦への変更の承認をホーネッカーら求めた751110情報である。

以上のヴァルター説によれば、750325 アンドレ通報が「最高度の警報」となって、同年11月に「最大の秘密警察作戦」、すなわち作戦重点「自主出版」が発動された。

これでは「最高度の警報」への対策が8ヵ月経ってから発動されたことになり、追加調査は「急いで」ではなく、のんびりなされたことになる。それではシュタジの失態として厳しい批判を免れなかったはずだが、そうではない。

その上(2)は751110情報の(1a)、従ってまた作戦重点「自主出版」と矛盾している。(2)にある「この知らせ」は「作家たちの出版社」企画を指す。しかし751110情報は、組織者が「作家たちの出版社」を取り下げ検閲抜き既存出版社利用に限定したことを知った上で作成された(7・10節)。

Walther(同前)はなぜか言及しなかったが、750325 アンドレ通報のたった3週間後に組織者は「作家たちの出版社」設立の延期を決め、それがシュタジに通報された(750416 アンドレ通報)(8節)。だからヴァルターの言う「最高度の警報」へのシュタジの対応はすぐ終了し、その後もシュタジは監視に留め、特段の措置を取らなかった。

750416 アンドレ通報から7ヵ月経った1975年11月10日(月)に751110情報が党最高指導部に届けられた。それが従来の監視作戦から阻止作戦への変更を提案し、承認されて作戦重点「自主出版」が発動された(7節)。

だから、その7ヵ月の間に転機となる**本当の「最高度の警報」**があったはずである。それは当然751110情報にある作戦変更理由が示されている。理由は次の3点の新情報の取得にあった:①9月10日の寄稿者会合出席者が「一致して」検閲排除に合意し(但し会合後に既存出版社利用に限定)、②アンソロジー第1次寄稿18本のうち7本が印

刷・出版不可と判明し、③各寄稿に「構想の協議と管理」(組織性)があることが分かった。

当局は従来、組織者やハイムらの検閲排除の意図を把握していたが、①・②・③は新たな判明であった。要するに、**集団**を成して反体制作品を検閲抜きに出版しようとしているという三重の違法行為が判明したから、シュタジは、ミールケの新方針(3節)によるその阻止を決断した。

これらの新情報のうち①を主にもたらしたのは、10月初めの**レスキーン情報**であった(7・10節)。だからレスキーン情報が**本当の最高度の警報の1つ**である。だからこそレスキーンという言葉(10節)が「自主出版」という作戦名になった。

もう1つの本当の最高度の警報は、第1次寄稿についての「専門家による最初の評価」(7節)であり、それが②と③をシュタジに知らせた。「評価」のためにはシュタジが第1次寄稿全部を入手しなければならなかった。

シュタジはいつ、いかに**第1次寄稿全部を入手したか**。そのコピーは寄稿者全員に1975年5月までに送られた(Plenzdorf 1995:10)ので、シュタジはそのうちの誰かから入手したことになる。それには幾つか可能性があるが、751110情報が利用し得たのはどれかが問題である。

寄稿の内容がシュタジ文書に出るのは751110情報が初めてであるから、入手時期は同情報の少し前である。他の事例では原稿の専門家評価に1ヵ月程度を要し、加えて評価結果をシュタジとして検討する期間も必要となる。すると、入手時期は遅くとも9月ないし10月初めになる。

ケーラーに第1次寄稿の評価を依頼したシュタジ・コトブス支部は彼から全寄稿を提供された可能性が高い。しかし彼が寄稿を勧められたのは「1975年11月半ば」であり(1節)、彼に第1次寄稿コピーが送られたのはその後であるから、751110情報作成には役立たなかった。

第1に、**レスキーン**が考えられる。彼の10月初めの情報提供の際に彼の手元の第1次寄稿全部を作家同盟に見せ、それがコピーされた可能性である。ところがビュットナーのレスキーンとの1976年1月29日の協議記録の第1項(10節)からは、レスキーンの手元に全寄稿があることを彼女が知ったのはこの協議の時だと推測される。従っておそらくこれらの可能性は消える。またレスキーンは協議の場で彼の手元の寄稿コピーを翌日に彼女に手渡すと約束した。

寄稿者会合の合意では寄稿コピーをシュレジンガーに返送することになったにもかかわらず、レスキーンはその後返送しなかったことになる。グラチクも同様である。

第2に、**グラチク**である。OPK(作戦的人物コントロール)文書には彼が「原稿を用立てた」とある(Walther 1996:677)。それがいつかは記されていないが、作戦重点「自主出版」の文書にある記述だから、たぶん同作戦発動後、従って751110情報後と思われる。但し、もし彼がシュタジの指示を受けた寄稿者会合の「観察」者であれば(14節(2)・15節参照)、「観察」通報(日付不明)の際に用立てたかもしれない。

第3に、**シュタジ自身**である。ヘートル夫妻が寄稿者会合のため東ベルリンへ行っている留守宅の「陰謀的家宅捜索」をシュタジ・ライプチヒ県支部が実施し大量の文書を photocopy した(1975年9月10日)。これに第1次寄稿全部も含まれたことはほぼ確実である(14節(3))。その複製が当然ただちにシュタジ本部に送られただろう。

751110 情報が利用した第 1 次寄稿全部は、確実さでも時間的にもヘートル宅で令状なしに、不法に取得したものの可能性が最も高い。グラチクの「用立て」がヘートル宅からの入手より早い可能性はない。

本当の最高度の警報に応じて 751110 情報が対策を提案し、それに基づいて発動された**作戦重点「自主出版」の開始日**はいつか。

同作戦の開始は 751110 情報以前ではない(その根拠は 7 節)。その開始日は 1975 年 11 月 10 日から同 22 日の間である。というのは Plenzdorf(1995:資料編)における「作戦重点“自主出版”」の初出は 1975 年 11 月 22 日付けの大ベルリン支部第 XX/7 部の「措置計画:…」(S.230ff.) (11 節)だからである。この期間をさらに絞ってみよう。

11 月 12 日にシュタジ第 XX 局長代理シュタンゲがアンソロジーの「処理」に関するミールケの指示のもと寄稿者ヘートル夫妻の処理をライプツヒ県支部職員に命じた(詳細は 9a 節(1))。これは明らかに作戦重点「自主出版」がすでに発動されたことを示している。

従って同作戦開始日は、11 月 10 日(751110 情報提出日)から同 12 日のいずれかになる。従ってまた、シュタジ本部は予め同作戦を立案した上で、その承認を求めするために 751110 情報を最高指導部に伝達し、その承認を得て即座に、早ければ 10 日、遅くとも 12 日には同作戦を発動したに違いない。751110 情報は作戦重点「自主出版」発動のための文書であった。

11 月 21 日にはシュタジ第 XX 局が作戦重点「自主出版」に関係する県支部を集めた「更なる[中央]協議会」(Beratung)を、12 月 16 日には同じく「第 3 回中央協議会」を開催した。前者が第 2 回に当たる(9a 節(2)(3))。

第 1 回はいつか。上記のシュタンゲ命令は同作戦の一部に過ぎず、シュタジ本部はそれと同日または前日に関係県支部を集めて同作戦全体を周知したはずである(751110 情報提出当日は無理)。

だから第 1 回は 11 日か同 12 日である。そこでミールケが 9a 節(1)・(2)に引用された「あらゆる手段と(方法、)可能性」によるアンソロジー壊滅という訓示をした違いない。

作戦重点「自主出版」の最初の成果をすでに 1975 年 12 月 22 日に IM アンドレが通報した。それが 1975 年 12 月 30 日のシュタジ大ベルリン支部第 XX/7 部の「作戦情報」である(Plenzdorf 1995:252f.) (“内は IM による引用)：

「1.アンソロジー企画“ベルリン物語”について」

シュレジンガーとシュタデはアンソロジーの「編集を 12 月末には終了させるつもり」であるが、プレントルフとハイムは内容充実のため締切り延期を考えている。

シュレジンガーとシュタデはアンソロジー参加者内に「彼らを追い落とす」し別人を「この企画のトップ」に据える試みがあると感じ、シュタデは「デ・ブルインとクリングラーという名前を挙げた」。後者は「すでに度々出版社モルゲンに現れた」[ヴァルター情報だろう]。

「シュタデとシュレジンガーは目下彼らの若干の同僚たちに“不機嫌”である」。「彼らがいま“逃げようとし

ている”からである」。シュタデによると、アンソロジー企画が「“作家たちの出版社”への第一歩」に踏み出すつもりであることに党が“感づいた”ので、「“イデオロギー的に再び真っ直ぐにする”ために作家同盟幹部会メンバーや出版社社長・原稿審査係主任たち」によるアンソロジー参加者との「協議」が色々なやり方で“仕組まれ”ている」[=差別化による分解作戦]。その結果、「若干の者はすでに変節した」。

「まもなく“全砲火”がシュタデとシュレジンガーに向けられる。シュレジンガーはすでに“ヒンストーフ[出版社]社長によっても横からうるさく話しかけ”られた。まさにこの社長はそもそも最初から事情を知っていたにもかかわらずである」。

ヴァルターの提案により協力を依頼した「ブラウンは断固断った」ので、ヴァルターは「非常に落胆した」。同じく彼が依頼したブランストナー([Gerhard] Branstner)は「なお熟慮するつもりである」⁴⁴。

しかしシュレジンガーはブラウンの拒否を「非常に良い」と評した。さもないと、彼がいま浴びている“党による非難”を「“我々全員に向けさせる”ことになる」、と

「2. シュタデについて」

シュタデは「憂鬱な気分」にある。理由は色々だが、「第 1」には、「彼は以前同様に、“精神的不自由の表現としての検閲に反対して何か”をしなければならぬ」と考えているが、アンソロジーが「もはや元来の意図[=作家たちの出版社]通りに実現され得るとは信じていない」からである。

上記にある「“作家たちの出版社”への第一歩」はいわゆる著者編集の実現を指す(13 節末尾参照)。

9a. 作戦重点「自主出版」とは

(1)1975 年 11 月 12 日(751110 情報の 2 日後)

シュタジ・ライプツヒ県支部の「作戦職員ケラー(Keller) [第 XX/7 部少尉]とクラウス(Claus)」は、1975 年 11 月 12 日に、シュタジ本部第 XX/7 局に出張した。彼らに、第 XX/7 局長代理・大佐シュタンゲ([Rudolf] Stange)が：

「このアンソロジーは 1967-68 年におけるチェコスロバキアの作家たちの反革命実行のための準備に似ていると評価されるべきである”。それに参加している作家たちの処理は直接に大臣ミールケの監督のもとになされ、この企画は“あらゆる手段と可能性によって”壊滅されねばならない」と訓示し、「特にヘートル夫妻に対して、彼らは敵として評価されるべきだから、狙い定めた措置が取られねばならない」と命令した(Walther 1996:404)。

これは明らかに作戦重点「自主出版」の説明とその個別命令であった。具体的にはヘートル夫妻対策しかないが、それは、原資料(ヘートル夫妻対策の保存文書)のせいである。肝心のベルリン県支部などを抜きにライプツヒ県支部のみに指示したとは考えられず、実際には他の関係する県支部も招集された第 1 回中央協議会が、9 節で推定したように、同日または前日にあったはずである。

⁴⁴ ブランストナーは IM フリードリッヒ(Friedrich)で(Walther 1996:621)、作戦重点「自主出版」に従事(18 節)。フランス軍捕虜から帰還後フンボルト大学で哲学を学び、1956 年から出版社

Das Neue Berlin/ Eulenspiegel の原稿審査係主任、作家活動も開始。1968 年から作家として独立(Baumgartner 1996:79)。

但し 751110 情報は夫妻のうち夫はアンソロジー企画の「本来の理論的根拠付け」をしていると見たが、妻の寄稿は問題にしなかった(7 節)。しかしここでシュタジは夫妻を敵とした。この勇み足は現場で修正される(14 節(4))。

Plenzdorf(1995)自身が「68 年が我々を形成した」と言い、「西欧学生の…反乱」とチェコスロバキアにおける「社会主義民主化の試み」を挙げた(4 節)。プラハの春の象徴の 1 つは検閲打破であった(8 節)。だからシュタジには、アンソロジーがプラハの春のような「反革命実行のための準備」と映った。これはすでに 1 年前に文化省出版・書籍販売本部長へプケが関係方面に警告したことであった(8 節)。

(2)1975 年 11 月 21 日(751110 情報の 11 日後)

1975 年 11 月 21 日には「作戦重点“自主出版”について〔第 XX 局長〕少将キーンバークのもとで更なる協議会が開催された」。下記(3)のように 12 月 16 日に「第 3 回協議会」があったので、これが第 2 回である。

第 2 回協議会にはアンソロジー企画に関係する「ドレスデン、ロシュトック、ライプツヒ、ゲラ、フランクフルト(オーデル)、ポツダム、ベルリン各シュタジ県支部の代表者が招集された」。その際のキーンバークの説明記録によれば(Walther 1996:404f.) (途中コメント挿入)：

「同志大臣〔ミールケ〕は同志将軍キーンバークに、この政治的・作戦的重点“自主出版”の解決は第 9 回党大会の準備と実施の確保のためのライン XX の最も重要な寄与であると述べた。全要員の投入と MfS が使用できるあらゆる手段と方法、可能性によって、けれども常に最も厳密な陰謀の確保のもとに、この企画と関係するすべての人物たちの作戦的処理と全面的な作戦的コントロールが保証されるべきである。

アンソロジーの出版を無条件に防止することと、党〔SED〕を公然たる対決と対立に引き込むという、これらの人物の意図を打ち砕くことという課題が党によって設定されている。

〔「公然たる対決」は 750416 アンドレ通報にあったシュタジの言葉である(8 節)。〕

そのために MfS [=シュタジ]はそれ特有の手段によって寄与しなければならないけれども、それについての部外者にも知られてはならない。SED 県指導部にも情報を与えるべきではない。というのは、同志大臣が直接情報を党指導部(同志ホーネッカー、中央委)に伝え、そこで今後の行動についてのすべての決定がなされるからである。[…]

〔作戦重点「自主出版」の発動について「同志大臣」ミールケがホーネッカー直々の承認と指示を受けたことが示されている。但し「すべての決定」を逐一そうすると言うのは重要性強調のための誇張表現だろう。〕

締めくくり同志・将軍キーンバークは再度、政治的・作戦的重点“自主出版”の解決と〔アンソロジー〕抹殺は最上位の重要性を持つ党の課題であり、そのために我々に全権が委任されていることを強調した。

我々はそれを第 9 回党大会の名誉のための我々の党課題と見なすべきである。

(3)1975 年 12 月 16 日(751110 情報の 46 日後)

「1975 年 12 月 16 日に第 XX 局では作戦重点“自主出版”についての第 3 回中央協議会が開催された」。そこでキーンバークは、「分解過程の次の局面は、〔アンソロジーの〕性格を変えるために、このグループの中への進歩的で党の側の作家たちを入り込ませることである」と命じた(Walther 1996:405)。

その現れがアンソロジー第 2 次募集にラウドン(IM アンドレ)やケーラー(IME ハイブリッヒ)が応じたことだろう。第 1 次寄稿者の中で「トロイの木馬」を引き受けたのは U.カントだけである(詳細は 16 節)。だが彼らが活躍すべき第 2 回寄稿者会合はなくなった。代わって H.カントやゲールリッヒが IM としてでなく作家同盟幹部として奮闘した(19・20 節)

(4)ソルジェニーツィン追放との関連

デマ流布も作戦重点「自主出版」の戦術であった。1976 年 1 月に第 XX/7 局がライプツヒ県支部に伝達した以下のデマは組織者の抗議(19 節)にない：

アンソロジー「企画の出発点は 1974 年であり、ソ連のソルジェニーツィンの国外追放との関連がある」。ソルジェニーツィン追放を非難し、それと「DDR の状況との類似性を見る連中が当時会合し」、「なにか初めてのケースを作り出し、DDR でも異論の文学が抑圧されていることを証明しようという結論に達した」。この連中とは「とりわけハイム、プレントドルフ、シュタデ、シュレジンガー、ヴァルター(出版社モルゲンの原稿審査係)、〔H.〕ヘニガー(Henniger)(同出版社の原稿審査係主任)⁴⁵、その他」である。

「このグループが…アンソロジー“ベルリン物語”の出版⁴⁶を決定した。このグループは個人的および文学創造において最も緊密に同盟している」。

アンソロジー企画誕生とソルジェニーツィン国外追放は無縁であり、シュタジ得意の「作り話」であった。

彼は、1973 年パリでの『収容所群島』出版など、「ソ連に対する有害な行動」(タス発表)により 1974 年 2 月 12 日逮捕され翌日エアフロート機で西独へ送られた(朝日新聞同年 2 月 14 日朝・夕刊;ソルジェニーツィン 1974: 訳者あとがき)。他方、アンソロジーへの招待の手紙は彼の国外追放前、1974 年 1 月 20 日であり、全く関連しない。しかも『収容所群島』の西側出版と異なり、アンソロジーは西側出版を意図せず(ごく一部の逸脱可能性はあったが)、また東独作家にとって西側での出版には合法的な可能性があった。

シュタジが言うように、アンソロジーが自らを抑圧させることによって異論抑圧を証明しようとするなら、企画の公然化が必須であった。この企画はそうしなかったから、その出版禁止は「証明」としての成功でなく、挫折であった。しかも東独での「異論の文学」の発禁はすでに多々有り、周知であるから、今更わざわざ先例を「作り出す」必要もなかった。

伝達はさらに続いた：

「第 XX/3 局による作戦的処理」の対象である「〔H.〕ヘニガーはハイムの専任原稿審査係と見なされており」、「大ベルリン支部第 XX/7 部の作戦的処理」の対象であるヴァルターは「またも」シュタジの原稿審査係

⁴⁵ H.ヘニガーの名は Walther(1996:271 他)では Heinfried、Prenzdorf(1996:312)では Heiner である。

⁴⁶ 原語 Herausgabe には編集や出版の訳語がある。ここでは自主出版というシュタジのアンソロジー企画理解から出版とした。

を担当している。(Walther 1996:405)

H.ヘニガーとヴァルターはともに 1975-89 年に OV「出版者」(Verleger)の対象であった。ヴァルターはほかの作戦対象でもあった(補注 3・4、脚注 14)。

10. 作家レスキーン(Jürgen Leskien)の対応

1975年11月20日付けで作家同盟第1書記G.ヘニガーが SED 中央委文化部ヘルト([Peter] Heldt)あてに、「企画“ベルリン物語”についてのメモ」を送った(Plenzdorf 1995:228ff.)。ヘルトは1973-76年に同文化部長であった。

その内容は(番号は原文、途中コメント挿入)：

(1) 10月1日付けでアンソロジー組織者3人が「一連の作家に送った手紙」[アンソロジー第2次募集]を添付する。これは受取人の1人である「作家コールハーゼが1975年11月13日にベルリン作家同盟党指導部に提示した」ものである。

(2) 「同志レスキーンが説明したように、編集者[組織者]たちによって元来(ursprünglich)アンソロジーを自主出版(Selbstverlag)で準備し出版することが意図されていた」。しかし1975年9月10日の寄稿者会合において彼と「同志クナート」は、次の2つの要求の実現にアンソロジーへの「彼らの参加を依存させた」。

要求とは、①「アンソロジーがいずれかの[既存]出版社と結びつけられていること」と、②誰でも参加できるように「ベルリン作家同盟を通じて全作家に企画が知らされること」であった。「要求①については明らかに妥協」になり、「第2次募集を含む」完成後に出版社を探すことになった。「要求②」への回答はない。

[レスキーン以上の「説明」は、751110 情報と照らし合わせると、同情報(4)にある彼とビュットナーの「10月初めの会話」の内容に当たる。下記のように IM の通報では内容に追加がある。751110 情報の内容(1)のうちの多くに加えてこれらもレスキーン情報に含むことにする。

レスキーンらは「自主出版」という組織者の「元来の意図」に既存出版社利用を対置した。従って彼らの言う「自主出版」は作家たちの出版社を指した。だから誰かがそれを寄稿者会合で語ったことになる。それへのこだわりが強かったシュタデに違いない(9・13 節)。しかし作戦重点「自主出版」の実際における「自主出版」は作家たちの出版社設立も検閲排除のもとでの既存出版社利用も含む意味に使われた。

要求②には回答がなかったにもかかわらず二人とも寄稿を撤回しなかった。]

(3) 11月13日のベルリン作家同盟党指導部会議では以下の発言があった：

a) 「同志コールハーゼ」[第2次招待者]がアンソロジー不参加を言明。

b) 「同志ヴェルナー」(Ruth Werner)はアンソロジー企画に反対し、背後のハイムが作家同盟や出版社と無関係に「特定の作家グループの定期的な会合のための口実」にそれを利用できると批判した。

c) 「同志G.ヘニガー」は、このアンソロジーの「形態」は西独の「著者編集」方式を志向しており、出版社は「イエスカノーカを言う」ことしかできないと指摘した。

d) 「同志ヤコプス」は、1年前に参加要請の手紙を

受け取り寄稿するつもりだったが、指定の提出期限(1974年末日)に間に合わなかった。だからこの件はとつと終わってしまったと思っていたので、今回「更なる作家たちが招待されたことに驚いている」し、このやり方では「もっと長引く」だろうと言った。しかし彼は、「アンソロジーの編集者が協力のために獲得したい人たちと集まることは通例のことだから、そうした企画は、作家同盟の枠外であっても、正当だ」と主張した。但し出版社との関係については当時[1年前]G.ヘニガー同様の心配をしたと言う。

e) 「同志ツヴォイドラク(Cwojdrak)は何も言わなかった」。

f) 「同志キュヒラー」([Marianne] Küchler) [ベルリン作家同盟党書記]が「最後に、この問題をよく考え、次回会議でさらに検討することを提案した」。(以上)

(3)においては論点として、出版における著者権限(その裏返しとして出版社原稿審査係の権限)に加えて、作家の組織化の自由も浮かび上がった。

最も注目すべきは(2)である。というのは 751110 情報がこのレスキーン情報に触れたからである(7 節)。

この「メモ」によると、レスキーンらの要求①は既存出版社利用のみであり、検閲排除に彼らを含む全員が「一致」したこと(751110 情報(1b))への異論はなかった。だから既存出版社利用でも検閲(=原稿審査係)排除となり得るので、組織者全体にとっては要求①は妥協可能であった。但し作家たちの出版社という「元来の意図」が消えることはシュタデには不満であった(9・13 節参照)。

アンソロジー企画の「センター」(シュレジンガー、プレントドルフ、ヴァルター、ハイム)が「元来の目的」たる作家たちの出版社を「長期目標」に棚上げし、著者編集による既存出版社利用に変更し、それを「短期目標」とした(1976年1月)。その理由は「現在の諸条件」の考慮であった(9・10・13 節)。レスキーンらにはもっと早くその旨伝えたのだろう。だが結局は、作家同盟副会長 H.カント(IM マーティン)の恫喝に屈し、アンソロジー企画を断念することになる(20 節)

Walther(1996:341)によれば、10月初めのレスキーンの知らせ(7 節の 751110 情報(4))をシュタジに通報したのは、IM マーティンと同ヘルマンの二人であった。その上、「彼ら[=両 IM]にレスキーンは会話の中で“党がそれを正しいと思うなら、彼はいつでもこの企画から引き上げ”、組織者たちから“距離を置くことを約束した”」。

ここに言う「約束」を両 IM はレスキーンとビュットナーの「会話」に同席して聞いたのか、別席かが記されていない。同席であれば 751110 情報(4)がビュットナーの名だけを挙げることはないから、別席だろう。この件で H.カントは、レスキーンと協調したクナートとも話している(16 節)から、ビュットナーの報告を受けて両名に聞き取りをしたのだろう。

以上を記述したシュタジ文書を紹介した上で、Walther(1996:342)は、「1976年に本名レスキーンと暗号名「Tobias」を書き留めたある IM 文書が作成されたのは偶然ではない」と書き足し、レスキーン=IMトビアスを示唆した。但し確たる証拠はなく、疑念要因もある(16 節(1))。

また Walther(1996:341f.)によると、IM マーティンらを担当したシュタジ第 XX/7 局指導将校ペニツヒとエーデル(Lutz Edel)は、後述の U.カントに加えて、レスキーンを引き抜き作戦のもう1人の対象候補と考え、その成果を記した

ZAIG 情報 49/76(1976年1月17日)によれば:

「U.カントとレスキーンが引き抜きのための一対の手がかりであった」。2人のアンソロジー寄稿には「否定的側面はなく、クナート、グラチク、フリースと同様に、組織者たちから企画の目的を打ち明けられなかった」。2人は「個人的諸面談において、ただちに企画から身を引く用意があると表明した」。

この引用に続きシュタジは「実際に企画を“自滅させる”ことに成功した。アンソロジーは成功しなかった」とある(“”内はZAIGの言葉、Walther 1996:342)。

この評価のうちレスキーンについては両IMの上記通報(「党がそれを正しいと思うなら…距離を置く」)をZAIGもヴァルターも真に受けたのだろう。実際にはレスキーンは下記のようにビュットナーに、アンソロジーに「参加し続ける」と答え、最後まで寄稿を取り下げなかった。

そこにはレスキーンの気持ちの揺れもあったかもしれない。作家の生殺与奪の力を持つ当時の作家同盟幹部の圧力だったからである。しかし彼は結局寄稿を貰った。下記の第4項にも彼の気持ちが表れている。

作家同盟幹部ほかによるアンソロジー寄稿者への個別工作が展開された(次節)。そのうちのレスキーンとの協議(1976年1月29日)についてのビュットナーの報告(Plenzdorf 1995:266)によれば:

「1. レスキーンは[第1次の]全原稿を持っており、それを1月30日に私に手渡す」[おそらく協議方法の指示(11節)により彼女が要求]。彼によればそこにはハイムの寄稿のような「若干のひどい物語」もある。

「2. レスキーンは現在まで、アンソロジーに引き続き参加するという意見である」。それは「反対意見として同席するためである」と言う。「私の説得」:「今は、アンソロジー企画にどういう態度を取るかについてより徹底的に考えねばならない時代」…。

「[説得]の最後に」アンソロジー参加の「作家グループの中でなされた諸決定が守られていないことも指摘した(レスキーン自身が先の作家たちの会合[=1975年9月10日寄稿者会合]でクナートとともにこの決定を引き起こした)。「3. …」。

「4. レスキーンは例えばテレビが“ビュリダン”という作品⁴⁷を中止したことを正しいと考えていない」[検閲批判]。その原作者で脚本も了解していたデ・ブルインと彼は「良好な関係」にあり、[脚本を作成した]プレントドルフも彼には重要であった。

2.の末尾に、「諸決定」が守られていないとあるが、守られていないのはレスキーンらが「引き起こした」ところの「この決定」(単数)ともある。レスキーンらが「引き起こした決定」とは、上記の「要求①」の実現(組織者側の「妥協」)であり、それは会合での決定ではなく、会合後の出来事であり、それは、上記の「短期目標」が示すように、守られていた。

U.カントは1976年2月6日に、当時の作家同盟党書記シェーラー(Ria Scheerer)に、「相応の指示を受け取れば即座にアンソロジーへの彼の寄稿を取り下げる」し、それまでのアンソロジー組織者たちの活動を通報すると言明し

た(Walther 1996:340)。この原資料は作家同盟文書ではなくシュタジ文書であるから、この会話も誰かがシュタジに通報したことになる。

従ってU.カントの取り下げは2月6日よりあとである。当初彼は第2回寄稿者会合(3月5日予定)でハイムの寄稿を糾弾しつつ、取り下げるつもりであった(16節)。しかし第2回会合はなくなった。

11. 作戦:差別化・分解・引き抜き・個別協議

シュタジが敵対的・否定的グループの解体やその行動の阻止に用いる作戦的措置つまり陰謀措置には、「監視」(Observieren)、「差別化」(Differenzierung)、「引き抜き」(Herausbrechen)、「分解」(Zersetzung)、すくい取り(Abschöpfen)などがあった。Walther(1996:321ff.)にはこれらの詳しい「事例」がある。作戦重点「自主出版」が重視した措置は、差別化と引き抜きによる分解であった。

作戦実施にはシュタジの単独行動もあるが、党(SED)主導のもとにシュタジが、他の国家機関(アンソロジーの場合は文化省)、社会団体(同じく作家同盟)、企業(同じく出版社)と連携して実施する場合もある。

差別化は、シュタジの資源や協力者の効率的投入のために、OV(作戦事案)などの対象となる人物を「危険度」に応じて「中立、敵対的・否定的、その他」に分類して対処することである(Engelmann 2016:72)。従って、差別化は監視とともにどの作戦でも前提とされる。作戦重点「自主出版」では7節のように発禁(寄稿7本)と懐柔出版(寄稿11本)、引き抜きや分解の対象、さらに下記のように個人別などに対策が立てられ、各寄稿者との個別協議も重視された。

引き抜きは一般的には、「作戦事案(OV)の中の敵対グループの作戦的処理[=陰謀による処理]において適用されるIM獲得の作戦的方法」であり、「引き抜かれるべき人物」は当該グループメンバーかつ国家犯罪容疑があるなどの条件に見合う人物で、引き抜き目的は「敵対グループの陰謀に入り込み計画・準備・試み・実行がされる敵対的な行動並びにその行動の手段と方法についての情報と証拠を手に入れ、敵対的行動を無効にしないしは制限するための、ないしは敵対的グループの解体のための糸口を形成すること」であった(Suckut 1996:164)。

但し作戦重点「自主出版」での引き抜き対象はグループの「国家犯罪」に反対ないし尻込みしそうな人物であった。その成功例はU.カントとラントグラフである(16・17節)。後者は単なる引き抜きであった。前者は内部攪乱も担ったので「トロイの木馬」とも言われるが、本来のトロイの木馬と異なり新たに送り込むわけではなく、引き抜き木馬であった。引き抜き失敗もあった(レスキーン、デ・ブルインなど)。

分解は、強い打撃を与えるための措置であり、シュタジが「“敵対的・否定的”と見なす人物や人物グループの秘密裏の撲滅方法」であり、対象を「粉碎し、麻痺させ、組織を解体し、相互におよび周りから孤立させること」であった(Engelmann 2016:390)。そのために離婚や自殺に追い込まれた例もある(青木 2009:141、2014:18)。

作戦重点「自主出版」ではグループの分解とともに、アン

⁴⁷ デ・ブルインの小説「ビュリダンのロバ」(Buridans Esel, 1963)を1975年にプレントドルフが脚色した番組を指す。この小説はデ・ブルインの「賞の授与」(Preisverleihung, 1972)とともに

「DDRの日常における適応の用意と自己主張の勇気の関係を批判的に描いた」と評される(Müller-Enbergs 2010:185)。

ソロジーの「理論家」(751110 情報)ヘートル(夫)を標的に夫妻の分解が図られた。それが「VAO アンソロジー」である(14 節)。Plenzdorf(1995)所収資料では、1976 年 1 月 31 日付けの「分析」に初めて「分解措置」が出てくる(18 節)。

すくい取りは「情報提供者からそうと気付かれることなく作戦的に重要な諸情報を収集すること」である(Engelmann 2016:21)。

「既存の作戦計画を補完」するため、751110 情報直後の 1975 年 11 月 22 日にシュタジ大ベルリン支部が、「措置計画:政治的・作戦的重点“自主出版”の事案的处理」を決定した。事案的处理(vorgangsmäßige Bearbeitung)は OV や OPK による処理であり、OV は容疑がある場合の秘密(陰謀的)処理である。対象によって差別化されたこの措置計画によれば(Plenzdorf 1995:230ff.):

「1. シュレジンガーについて」(以下 Sch)

1.1 作戦重点「自主出版」による追及継続。1975 年初め以来の VAO「へぼ作家」も継続(そのため「1975 年 8 月に承認された作戦計画が完全に該当」)。(VAO は 1976 年廃止され OV に統合された(14 節に説明)。「へぼ作家」開始時期は脚注 28 参照。)

1.2 「重点“自主出版”についての最新の認識に基づき」、IMV ビュヒナー、IMF アンドレ、IMS カールが、Sch の「従来以上」の信頼獲得のために個人的接触を強化する。各 IM の任務は:

ビュヒナーは、原稿審査係という職と Sch の妻ベッティナーとの友人関係を活用して、「自主出版」における Sch とプレントドルフ、ハイムについての「作戦上重要な更なる情報」を入手する。

アンドレはまずシュタデと接触し、それを通じて「Sch との信頼関係強化に努力する」。その際「原稿審査係および作家としての、また部分的には出版社鑑定人としての彼の経験とコネ」を売り込んで Sch の関心を買う。

カールは Sch 夫妻との家族ぐるみの接触を強化して「党、国家機関、作家同盟、「わが機関」(=シュタジ)の措置への反応」を探る。

1.3 IME ヴェラ(Vera) [ロック音楽のエキスパート(Walther 1996)]と IMV シュタインホッフ(Steinhopf) [不明]はベッティナーとの「個人的および職業上の関係」を活用する。

[1.4~1.7 には、シュレジンガー夫妻の手書き・タイプ文収集、シュタジ第 26 部[電話・テレックス監視]による措置実施の促進、「ベルリン物語のための資料収集」のための西ベルリン出張の再調査(許可した作家同盟や文化省の幹部を「政治的蒙昧と信じやすさ」と批判)、組織者 3 人が取得した「週末地所」[シュライバー菜園]の目的 IM による調査(シュタジ・ゼーロウ郡支所が支援)が挙げられた。]

2. HD.シュューベルトについて

2.1 処理は「既存の IM 候補文書の枠内」でなされる。[2.2 に IME 猟師(Jäger)ほかの投入、2.3 に第 26 部による電話盗聴(A-Auftrag)がある。A-Auftrag は本来小包検査だが、ここでは第 26 部の措置だから電話盗聴(Auftrag A または A-Maßnahme)を意味する。下記 5.2 も同様。]

3. エルプ(Elke Erb)について

3.1 OPK(作戦的人物コントロール)処理 [=監視]を開始する。その目的は、彼女が「シュレジンガーの影響のもとにすでにイデオロギー的に否定的な硬化した態度を取っているか、イデオロギー的に動揺しているか、あるいは[体制に]忠実と評価され得るか」の解明である。[彼女への別の圧力例は補注 1。]

[3.2~3.4 に 3.1 のための方策と担当者。]

4. He.シュューベルト(Helga Schubert)について

[エルプに類似。]

5. IMS ロマン(Roman) [=デ・ブルイン]という人物について

5.1 “自主出版”企画に対する彼のイデオロギー的無知蒙昧を明らかにし、彼をこの企画の鼓舞者たちの政治的目的に対する拒否の立場に立たせるという「教育目標」を達成し、IM として「VAO へぼ作家と作戦重点“自主出版”の攻撃的処理に組み込む」。

5.2 信頼度再調査のための電話盗聴。

第 5 項は IMS ロマンを IM 活動に復帰させるための措置である。IMS は「社会的な分野または対象」の IM である。IM ロマンはアンソロジー寄稿者デ・ブルインである。この措置計画は失敗に終わった(12 節参照)。

差別化工作のために「近いうちに」寄稿者となされるべき個別協議の計画(手順と目的と役割分担)が立案された。それが第 XX/7 局の「アンソロジー“ベルリン物語”企画の阻止についての情報」(1976 年 1 月 21 日)にある(Plenzdorf 1995:256f.)。計画策定は、担当者の顔ぶれから高いレベルによると考えられ、「協議」についての諸情報から策定日はこの情報の日付けよりもかなり前と推測される。

この情報の前段には個別の「面談」(Gespräch)、後段には「協議」(Aussprache)、例外的に「議論」(Auseinandersetzungen)とある。以下では引用時以外は協議とする。

協議の目的は、寄稿者に「この企画から距離を置き、寄稿を取り下げ」させるか、「寄稿が内容上可能な場合には」別途出版という「相応の支援」を確約することであった。これは差別化によるグループ分解作戦である。

協議担当者は自ら担当寄稿者に「原稿」(=アンソロジー寄稿)を提出させて「短期間に評価した上で…更なる面談」を持って目的を達成せよとある。だからシュタジが第 1 次寄稿全部の入手と評価を終えたこと(7 節)は秘密であった。

表 3 が協議の分担である。ビュットナーとレスキーンとの協議は 10 節で紹介したが、その際レスキーンは自分の寄稿だけではなく全寄稿の提出を約束した

表 3 個別協議分担

寄稿者	協議担当幹部
プレントドルフ	SED 中央委文化部長代理ラグ ヴィッツと文化省同志ホフマン
U.カント	作家同盟副会長 H.カント
クナート、シュナイダー	作家同盟第 1 書記 G.ヘニガー
HD.シュューベルト	作家同盟理事ホルツ=バウマート
シュレジンガー	ベルリン作家同盟党指導部員 コールハーゼ
レスキーン、He.シュュー ベルト、クリングラー	作家同盟書記ビュットナー

グラッチヒ [= グラチク]	作家同盟理事 Kerndl
グリュニンク	ベルリン作家同盟書記 Krumery
フリース	作家同盟幹部会員 Plavius
エルプ	「新ドイツ文学」誌職員 Löser
デ・ブルイン	「新ドイツ文学」誌編集者 Liersch
ラントグラフ	作家同盟後継者部ヒュプシュマン
ヘートル夫妻	未定

(注) 寄稿者フルネームは表 1。カタカナ表記が本稿登場者。
(出所) Plenzdorf (1995:256f.)。

担当者は殆ど作家同盟やその雑誌「新ドイツ文学」(Neue Deutsche Literatur)の関係者であるが、プレントドルフのみ「SED 中央委文化部長代理・同志ラグヴィッツ」([Ursula] Ragwitz)と「文化省同志ホフマン」が担当した。

「文化省同志ホフマン」は、プレントドルフの報告(18節)のように、文化相ホフマン(Hans-Joachim Hoffmann, 1973-89 年在任)である。彼に文化相の肩書きを付けず、ラグヴィッツが大臣より先に書かれたのも党内序列を示している。彼女は 1976 年に文化部長に昇進し 1989 年 11 月まで在任した(Müller-Enbergs 2010:1038)。

表 3 以外にもケーラーとの協議(脚注 16)やいわば締めくくりとして組織者 3 人を対象にした協議(19 節)があった。

分担リストの末尾には「ハイム、シュタデ、シュレジンガーとの議論は上掲の諸協議の結果が出た時に実施」とあり、うち前 2 者は担当者の記載もない。シュレジンガーは協議と議論両方の、プレントドルフは協議のみの、ハイムとシュタデは議論のみの対象に区分された。

脱落工作の対象であるラントグラフとの協議の内容が、本人からヴァルターに知らされ、その厳しさに組織者たちが緊張した(17 節)。

12. 作家デ・ブルイン(Günter de Bruyn) (IM ロマン)のシュタジ離反とシュタジの「作り話」作戦

シュタジ大ベルリン支部の「措置計画」(1975 年 11 月 22 日)は、「IMS ロマン(Roman)」に対する「教育目標」を設定した(11 節)。これはデ・ブルイン(寄稿者)がシュタジへの協力を回避し始めたことへの対策であった。事の詳細が 1976 年 2 月 11 日付けのシュタジ文書「IMS ロマンの事案処理についての作戦計画 I」にある(Walther 1996:393)：

IM ロマンはアンソロジー・グループに属していることを隠し、「具体的な問題には逃げ口上」を使い「MfS との協力を避けようとしている」。「同時に」彼は西独の文化施設や出版社との接触拡大に努力している。

そこで彼に IM アンドレが西ベルリンの編集者を紹介して反応を試し、ジャーナリストの IM「ロバート・シュルツ」(Robert Schulz) [本名不詳]がインタビュー名目で「長い接触」をして探り、原稿審査係である IMV ビュヒナー[6 節に本名]は「長い接触」を実現するために、アンソロジー計画『隠れ蓑』(Tarnkappe)に彼を誘う(手書きメモ:「すでに実現。…」)。

[東独ハレの]中部ドイツ出版社(Mitteldeutscher Verlag)のデ・ブルイン担当原稿審査係の中の IM の活用、西独とのおよび国内の「接触パートナー」調査のため「M コントロール」[=郵便物検査]の「週末地所

[シュライバー菜園]への拡大と「A 措置」[電話盗聴]の導入を、シュタジ・ハレ支部を通じて実施する。

「今後の目標」[=彼の IM としての今後の任務]:アンソロジー・グループの「今後の目的と企図についての具体的情報」の通報と、「作戦資料“自主出版”」対象人物に「狙い定めた偽情報」[の吹聴]。

[しかし目下のところ彼が IM 協力を忌避しているので、当面の目標は:]「導入された作戦措置 [=シュタジのアンソロジー対策]への IMS ロマンの態度の調査。この IM の政治的・作戦的教育と信頼関係の形成」。

しかしシュタジはデ・ブルインへの「教育」に失敗したので、彼との「信頼関係」の再構築を「新しい作り話によって再度試みる」ことになった(Walther 1996:393)。それでもデ・ブルインが寄稿を撤回することはなかった。

では「作り話」(Legende)とは何か。「“作り話のもとでの勧誘”は、[シュタジが]目を付けた候補者について、信念による即座の同意が期待され得ない場合のシュタジの得意技であった」。作り話は、あなたに西独側(諸組織ないし情報機関)が目を付けているから、協力してくれるならシュタジがあなたを守るというような「捏造物語」であった。デ・ブルインの場合は、「“反動的”と評価される自由ドイツ作家同盟(FDA)がデ・ブルインに関心を持っていることが口実にされた」(Walther 1996:392)。まるで振り込め詐欺ような作戦だが、「得意技」(Spezialität)と言うから、何人も引っかかったのだろう。

他方、シュタジによる IM への誘いに「信念による即座の同意」をした作家も少なくなかった(補注 2)。ヘルマン・カントもその 1 人であり、本稿に度々登場するように、IM マーティンとして「全人格を賭けて」アンソロジー潰しに奮闘した。

ではデ・ブルインはなぜシュタジから離反したのか。当時の東独で一旦 IM を引き受けたあと、それを撤回することは大きな危険が想定され、重大な決断であった。理由は色々あるかもしれないが、その 1 つを示す文書が「アンソロジー“ベルリン物語”への作家デ・ブルインの参加」と題する 1975 年 12 月 30 日付けのシュタジ大ベルリン支部第 XX/7 部の作戦情報 13/76 である(Plenzdorf 1995:250f.)。

それは 12 月 19 日に「IMS ロマン」が同支部指導将校・少佐ヴィルト(Wild)に報告した内容である。「IMS ロマン」はデ・ブルインなのだから、実際はデ・ブルイン自身が述べたことをヴィルトがまとめた⁴⁸。上記の「逃げ口上」に当たるとも言えるその内容は(以下デ・ブルイン=Br)：

Br は 1974 年 10 月か 11 月にアンソロジーへの協力を呼びかけられ、その際プレントドルフが「その企図はベルリン作家同盟幹部会や若干の出版社責任者と調整して、次の種類の実験を行なうことにあると説明した:[...]」。

[...]とあるように、実験内容は省略されているが、Br にとって重要なことは作家同盟や出版社と「調整して」ということであった。後述には「受け入れられていた」ともある。にもかかわらず今になってとやかく言うのは納得できないという言い分が以下に続く：

寄稿要請直後に Br が、「ベルリン作家同盟議長ゲールリッヒ[=IM ヘルマン]、また DDR 作家同盟(副)会長 H.カント[=IM マーティン]にこの企画の正当性

⁴⁸ この文書は酒井(2002a: 66-7; 2018:249)にも紹介されたが、

IMS ロマン=デ・ブルインに気付かれなかったようである。

について問い合わせた」ところ⁴⁹、二人は企画を知っていたが、「二人から疑念は表明されなかった」。

「それゆえデ・ブルインは、文書での要請後に協力に同意し、彼の未刊行の物語“監禁”（Freiheitsberaubung）を…シュレジンガーに渡した」。未出版のこの物語を寄稿したのは、「それが実際にベルリンで1945年以後に起こったベルリンの物語だからである」。

彼によれば、今のところアンソロジーは、寄稿が少なく、しかもその一部は「文学的に成熟していない」ので、「まだ初期段階にある」。彼自身の企画への関与は寄稿と他の参加者の寄稿の批評のみである。

「1975年11月末か12月初めに」、「彼の諸著作の第1出版権」を持つ中部ドイツ出版社社長から彼にアンソロジー寄稿取り下げ圧力が加わった。このことから彼は、近ごろ文化省・作家同盟・アンソロジーの間に「誤解」が存在することを察知した。

「[作家]同盟の指導的な幹部たちは最初からアンソロジーの作家たちの企画について一貫して知らされていたし、企画を“実験”として受け入れていた」にもかかわらず、「今になって同盟を害する振る舞い」だとアンソロジーを非難しているのは「了解できない」。

だから彼は寄稿をまだ取り下げず、「誤解」を解くために若干の[作家同盟]幹部会メンバーと協議したい」と考えている。アンソロジー共著者の中に「[作家]同盟あるいはDDRを害するつもりがある者がたった一人たりともいるとは想像し得ない」からである。

作家同盟理事会が「逆のこと」[=アンソロジー参加者の中に「DDRを害するつもり」の者がいること]を彼に納得させるなら、彼は寄稿を取り下げらるう⁵⁰。

以上は、指導将校たるヴィルトが結局は、デ・ブルインを納得させ得なかったという報告書でもある。だから作り話の再構築しか手立てを見いだせないことになった。

彼はアンソロジー寄稿の取り下げに応じず、己を貫いた。1978年には東独芸術アカデミー会員になり、1986年には西ベルリン芸術アカデミーの会員にもなった（Müller-Enbergs 2010:185）。

13. 「作家たちの出版社」から「著者編集」へ：ヴァルター（Joachim Walther）の対抗策(1)「静かさ」

アンソロジー阻止作戦が始まると、ワルシャワから戻っヴァルターが活躍する。彼は検閲事情に詳しい。

その一例は1976年1月11日のシュレジンガー（以下Sch）宅でのヴァルター（以下Wa）とシュタデ（以下St）の会合であり、同席したIMアンドレが同月22日に通報した。その通報を載せた翌23日のシュタジ大ベルリン支部第XX/7部作戦情報88/76（Plenzdorf 1995:257ff.、18節の「分析」にも反映）によると：

会話はSt個人のある物語集の問題から始まった。Waによると、文化省出版・書籍販売本部は、当初その物語集のうちの1つの物語「共和国宮殿建設」の「内容変更」を求めたが、「今では」出版許可の条件と

して、その物語と、物語「ある学生の早期退学」の2つの削除をWaの上司である原稿審査係主任[G.]ヘニガーに指示してきた。

すぐにStが主任に電話で抗議しようとしたが、Schが「電話はきっと盗聴されている」と言って制止した。

SchとWaは「シュタデに、「彼らの共同の件」[=アンソロジー企画]の利益のために出版・書籍販売本部の言う条件をのむように助言した」。しかしStは納得せず、出版条件取り消しを「断固要求する」と主張した。そこでWaが次のように説得を試みた：

「アンソロジーの戦略的目的の利益のために」いまはアンソロジー参加者個人の要求は、「たとえそれが正当であっても、控えねばならない」。というのは、当局はその要求を「政治的に解釈」し、当該作家と「時間がかかり神経をすり減らす会話を行なうきっかけ」として利用するからである。そうするとアンソロジーのための「今後の活動の妨害になる」。

アンソロジーの「企画完成が間近のいまは、対決ではなく静かさ（Ruhe）を必要としている」。

加えて、アンソロジー参加者には、「直接間接に」寄稿取り下げ圧力が加えられている。そういう状況の中での「個人的要求の強調」には、「アンソロジー作家共同体を“爆破する”ことに“乱用”される危険が存在している」。「目下は連帯を個人的利益の上に置くことが必要である」。「”はIMによる引用符。」

「いまは、対決ではなく静かさを必要」、これがこの時点でのヴァルターの対抗策であった。文化省がこの時期にシュタデの本の一部削除を求めたのは、アンソロジー組織者への挑発だと考えたのだろう。しかししばらくすると、さらに強まった圧力ゆえにヴァルターの考えが変わる

この会合の最後に寄稿者全体の「大きなグループではまだ議論され得ない熟慮」、すなわちアンソロジー企画の「“センター”、つまりシュレジンガーとプレントルフ、ヴァルター、ハイム」の「熟慮」が紹介された。それは「作家たちの出版社」から「著者編集」への方針変更であった：

「独立の作家たちの出版社を形成するという元来の目的」（das ursprüngliche Ziel）[9・10節も参照]は、「現在の諸条件のもとではさしあたり達成し得ない」。それは「“長期目標”として視野に留め、そのためにより有利な状況を待つ」ことにし、「今は達成可能な“短期目標”として「著者編集」[=出版社による原稿変更の排除]の形成」を目指す。

「著者編集」では出版自体は既存出版社を利用する。「他の社会主義諸国、例えばポーランドやハンガリー、そしてソ連」には「類似の企画」が存在するので、その実現には「“静かな海”（ruhige See）を必要とするが、“イデオロギー的な突撃”は必要としない」。

これはアンドレには初耳だったようだが、レスキーンらの要求①への回答（10節）と同じ趣旨であり、細部はともかくこの方向性は前年「10月初め」までに決まっていた。

会合では同時にヴァルターがシュタデに、「彼らの」企画と関心事について過去には「すでにあまりにも多くおしゃべ

⁴⁹ H.カントが作家同盟会長になるのは1978年であり、この時は副会長であった。ヴィルトの誤記だろう。

⁵⁰ 彼は当時作家同盟の理事ではないが、幹部会員であった

（Müller-Enbergs 2010:185）。IM期間は1976-78年、その後監視対象となったと言う（同前）が、上記のように遅くとも1975年にはIMであった。

りがされた」、[だから当局に露見したので]「著者編集」のアイデアについて誰とも話さないという約束をさせた。

シュタデが「あまりにも多く」話したのは「作家たちの出版社」企画のことであり、それをアンドレに話した(8節)以外に、寄稿者会合やほかの機会でも話したのだろう(10節参照)。

このアンドレ通報によると思われる記載が1976年1月31日付けのシュタジの「分析」(18節)にある：

「ますますイニシアチブを發揮しているヴァルター」が、「一種の著者編集」(»Autoren-Edition«)によって「たぶん党を押し倒し(überrollen)、「作家たちの出版社」を組織するという課題のためにより有利な時点を探ることができる」と語った(Plenzdorf 1995: 272f.)。

従って著者編集は組織者にとってシュタデの言う「作家たちの出版社」への第一歩」(9節)という位置づけであった。

14. 作家ヘートル夫妻(Gert u. Heide Härtl)対策

(1) ヘートル夫妻に対するVAOアンソロジー

作家ヘートル夫妻はともにアンソロジー第1次寄稿者で、ライプツヒ在住であった(以下夫ないし妻と略称)。1975年11月12日にシュタジ本部第XX局長代理シュタンゲが、ヘートル夫妻を「敵として評価」して「政治的・作戦的処理」をするよう指示した(9a節)。

シュタジ文書によれば、夫は文学についての「挑発的な見解」ゆえに1969年にライプツヒ文学研究所を除籍、SED除名になった。彼は「文学研究所の学生たちの反体制的グループおよび作家ファウスト⁵¹のまわりの友人グループの中での相互の否定的影響の結果、ますます反社会主義的見解を主張」した(Walther 1996:403)。

「挑発的な見解」は「プラハの春」支持とその鎮圧への抗議絡みだろう。当時夫妻もファウストも20代後半であった。

シュタンゲの上記の指示を受け翌11月13日にVAO「アンソロジー」の開始報告が作成された。その対象はヘートル夫妻であり、容疑は刑法106条(国家敵対的扇動、1-10年)、107条(憲法敵対集合、2-8年)であった(Walther 1996:403)。

VAO(Vorlaufakte Operativ、作戦予備文書)は、容疑が確認されないと中止になるOPK(作戦的人物コントロール)〔監視〕と、強い容疑に対するOV(作戦事案)の中間段階として存在した。Walther(1996:403ff.)がVAOの3事例の1つとしてVAOアンソロジーを紹介した⁵²。

VAOは、「作戦事案(OV)の発展と処理についての方針1/76」(AGM 198, Bl.307-367)の1976年1月1日発効

に伴い廃止された。この新方針は従来規定の「近代化」「精密」化のためとされた。その発効は、「偶然ではな」くアンソロジー事件対策であった(Walther 1996: 87,397)。

(2) 「陰謀的家宅搜索」と寄稿者会合の「観察」

VAO「アンソロジー」にはVAO開始2ヵ月前の驚きの出来事も記録された(Walther 1996:404)：

1975年9月10日、夫妻は東「ベルリンのヌシュケ通り(Otto-Nuschke-Str.[本誌表紙裏地図参照、現Jägerstraße])2-3の文化創造者クラブ」〔別名ベッヒャー・クラブ〕におけるアンソロジー第1次寄稿者会合に出席し、ライプツヒの自宅を留守にした。

その間に、[シュタジ・ライプツヒ県支部の]「わが第VIII部」が、[IMによる]寄稿者会合の観察と、夫妻宅の「陰謀的家宅搜索」を実施した⁵³。

会合の観察によって、彼らは「広範な読者にDDRの現実を分かりやすく説明することを芸術的義務」と考え、「第9回党大会前に文化政策上の対立を引き起こす意図」を持っていることが「非公式に知られた」。

「陰謀的家宅搜索」においては「大量の文書資料が記録され得た」。それらの「まだ不完全ながらこれまでの資料評価では、次のことに基本的な情報がもたらされた」、すなわち「ヘートル夫妻の政治的・否定的な基本態度、一連の作戦上重要な結び付きの性格、党に敵対する企画「ベルリン物語」」である。

「陰謀的家宅搜索」は、留守中に家宅に侵入して令状なしの家宅搜索をするというシュタジのチェキストらしい常套手段であった。「大量の文書資料が記録され得た」とは、1975年10月14日付け搜索報告書の言う「672のフォトコピーが作られた」ことを指す(Walther 同前)。

「作戦上重要な結び付き」とは、作戦VAOアンソロジーに重要なアンソロジー企画関連の夫妻とアンソロジー組織者・寄稿者との結び付きを指す。

「作戦上重要な結び付き」とは別に、「企画「ベルリン物語」」の「基本的情報」が挙げられた。それは後述の(3)にある「陰謀的に入手された諸原稿」、すなわちアンソロジー第1次寄稿全部に違いない。

上記のように第1次寄稿者全員に18寄稿全部のコピーが1975年5月までに送られ、夫妻の自宅にもあったはずである。その全部をコピーしたからこそ、他の書類も含めて672枚もの大量になったと考えられる。

こうしてシュタジは自分の手で初めてアンソロジー第1次寄稿全部を入手した。シュタジ・ライプツヒ県支部はその写しをただちに本部に送付して手柄にしただろう。

⁵¹ 1944年生まれ作家Siegmar Faust。ファウストもライプツヒ文学研究所に学び、1968年に「政治的理由」で除籍となった(Müller-Enbergs 2010:309)。1942・43年生まれ(Plenzdorf 1995:311)のヘートル夫妻と同世代、かつ友人であった。ファウストは、1971-72年に11ヵ月未決勾留後、1974年に「国家敵対的扇動」罪で4年半の自由刑になったが、刑務所内でも抵抗を続け、1年以上も地下独房という過酷な弾圧に遭った。著名反体制派ハーベマンがナチ時代の「獄友」ホーネッカーに彼の釈放を訴え、西独常駐代表(大使相当)やアムネスティ・インターナショナルも動き、1976年3月に「条件付き釈放」、同9月に西独に自由買いされた。その後もシュタジは彼の監視を続けた。彼の暗号名は「メフィスト」(Mephisto)であった(青木 2009:142-4)。

⁵² 原資料は主にASt Leipzig, AOP 1231/76, IMペーターの関与についてASt Dresden, AIM 2736/81。

もう1つの事例は、やはりアンソロジー第1次寄稿者の抒情詩人・エッセイストのグリュニンク(Uwe Grüning)に対するシュタジ・ゲラ県支部イェーナ支所のVAO「イカルス」(Ikarus)であった(Walther 1996:400ff.)。彼に対して「MfSのほぼすべての手段が尽くされた：陰謀的家宅搜索、彼の文書・日記・住所録のコピー、郵便検閲、盗聴器設置、文学的および心理学的な鑑定申請、すべての文通の分析、IM投入、すべての友人・知人の記録調査」(同前:403)。

⁵³ シュタジ県支部第VIII部は本部の第VIII局と合わせてラインVIIIと言い、観察、捜査、搜索、逮捕を担当。

アンソロジー寄稿を入手したシュタジ本部はすぐ専門家にその評価を依頼した。その結果 1/3 余りの寄稿が出版不可であった(751110 情報)。それらを検閲なしに出版しようとしていることも分かり(レスキーン情報)、とんでもない重大事態だと気付き、アンソロジー「自主出版」の絶対阻止の必要を党首脳に上申した(751110 情報)(7・10 節)。

VAO の記録には、ヘートル夫妻が住む建物が古くて「床板が非常に大きな音」を立てるので、盗聴器設置や「陰謀的家宅捜索」が「より困難」だったとあるが、後者さえ成功しており、前者も実行されただろう。

上記にはライプツヒ県支部第 VIII 部が東ベルリンでのアンソロジー寄稿者会合を「観察」したとあるが、誰が観察を引き受けたのかは確定できない。

IM ロマン(デ・ブルイン)は寄稿者会合に出席したが、シュタジ・大ベルリン支部管轄の IM であり、アンソロジーを密告する可能性もなかった(12 節)。残る IM 判明出席者は IMV ペーター(Peter)つまり作家グラチクのみである。

だがペーターはドレスデン県支部の IM であった。彼は 1967-68 年にライプツヒ県支部の IM であったという縁がある。その際の指導将校はティンネバークであり(15 節)、彼はこの当時ライプツヒ県支部第 XX/7 部(アンソロジー担当部門)の部長に出世していた(本節(4))。しかしこの時にティンネバークあるいは第 VIII 部がペーターを観察者としてドレスデン県支部から借り出したとは考えにくい。

というのは IM の「貸し出し」例はあるが、この場合にはドレスデン県支部自身が実施するか、貸し出すなら寄稿者会合場所のある大ベルリン支部あてのはずだからである。ペーターの作戦重点「自主出版」への投入は、シュタジ第 XX/7 局がドレスデン県支部に指示した。しかもようやく 1975 年 12 月 16 日からである(15 節)。作戦重点「自主出版」投入以前にも監視作戦へのペーター投入の可能性はあるが、その実施もやはりドレスデン県支部だろう。

Walther (1996:406) にはヘートル夫妻に関連してグラチクが「IMV ペーターとして情報を提供した」とある。内容も提供事情も記されていないが、原資料がシュタジ・ドレスデン県支部文書⁵⁴だから、同県支部の指揮であり、作戦重点「自主出版」への投入後だろう。

ヴァルターはレスキーンにも IM 疑惑に向けた(10 節)。彼は東独空軍除隊後すでに作家デビューしながら、当時ライプツヒの演劇大学(Theaterhochschule)の学生でもあった⁵⁵。しかし彼には IM の確認も「観察」した証拠もないし、シュタジの観察依頼に応じたとすれば、会合情報をシュタジではなく作家同盟に知らせたことが不可解になる。

上記引用のように「寄稿者会合観察によって…非公式に知られた」のだから、会合情報の通報があったことは確かであり、それもライプツヒ県支部から本部に伝達されただろうが、しかしその通報者も通報の日付も確定できない。

751110 情報には内部情報と「内々」情報、「内部で」の情報がある。その多くがレスキーン情報に基づく IM マーティン・ヘルマン通報であると判断される(7・10 節)が、残りに会合の観察結果が含まれるかもしれない。

(3) 「陰謀的に入手された諸原稿」の鑑定

Walther (1996:406) によれば、GMS(社会的保安協力者)「ヨハネス」(Johannes)が、「陰謀的に入手された諸原稿」[=アンソロジー第 1 次寄稿]の「広範囲の鑑定」の結果を 1976 年 1 月 14 日にシュタジに提出した。Walther(同前)はそのうちヘートル夫妻の寄稿の鑑定結果(下記)を紹介した。ヨハネスはライプツヒ文学研究所の専門家とあるが、本名不詳である(GMS と IM の異同は略語説明参照)。

Walther(同前)の記述の原資料はシュタジ・ライプツヒ県支部文書⁵⁶であるから、ヨハネスにアンソロジー寄稿の鑑定を依頼したのは同県支部である。従って「陰謀的に入手された諸原稿」は上記の陰謀的家宅捜索の際のコピーを指すに違いない。

ヨハネス鑑定は 751110 情報にある専門家のアンソロジー評価とは別である。鑑定時期も評価内容も異なる。同鑑定は夫の寄稿を妻の寄稿と誤解しつつ、「無政府主義的な意味での主観主義的立場」と評した。同県支部は夫の寄稿鑑定を IM「小石」(Grit)にも依頼し、「ハッタリ屋が仕事をしている」という結果であった(Walther 1996:406)。これも 751110 情報とは異なる評価である。

同県支部は、751110 情報を配布されず、従ってその中の専門家評価を知らず、独自に鑑定を依頼したのだろう。

(4) ヘートル夫妻分解作戦

ヘートル夫妻には作戦重点「自主出版」による夫婦分解の危機が生じた。以下は Walther 1996:405ff.による⁵⁷。

「1975 年 11 月 20 日に[ライプツヒ県支部の]「第 XX/7 部長・大尉ティンネバーク(Tinneberg)」が、「特別にヘートル夫妻に合わせた作戦計画」を作成した。

この作戦計画の「目的」は、「容疑者たち[=夫妻]について、党に敵対する企画[=アンソロジー企画]の壊滅のために容疑者たちの肯定的な影響行使が可能であるか、それとも硬化した敵対的態度ゆえに作家としての影響可能性が阻止されねばならないかが、[シュタジ本部]第 XX 局と調整しつつ決定され得るような解明状況が短期間に達成されること」であった。

[シュタジらしい長く分かりにくいセンテンスだが、夫妻は利用可能か、敵対的かの「解明」が目的であった。これは、夫妻を「敵」としたシュタンゲ(9a 節(1))と異なるが、夫と妻の寄稿を区別した 751110 情報の評価に沿っていた。]

「解明」には、大変熱心な IM「ホルスト」(Horst)や元ライプツヒの出版社原稿審査係であった IM「原稿審査係」(Lektor)、GMS「醸造者」(Brauer)⁵⁸と同「講師」(Dozent)が投入され、郵便物検査等もされた。また第 XX 部長⁵⁹・中佐ヴァルナー(Wallner)が 1975 年 12 月から 7 人の常勤職員を「重点事案“アンソロジー”」に専任させた。

「1975 年 12 月に[第 XX 局長]将軍キーンバークが特にヘートル夫妻に対する作戦方針を与えた。[それはまたも夫妻もろとも「抹殺」する方針であった]:

「彼ら[夫妻]の場合は、教育的な会話や政治的・イデオロギー的感化が実りを見ることはないだろう。今後

⁵⁴ BStU, ASt Dresden, AIM 2736/81.

⁵⁵ <https://edition-digital.de/leskien/>

⁵⁶ BStU, ASt Leipzig, AOP 1231/76

⁵⁷ BStU の ASt Leipzig, AOP 1231/76 と ASt Dresden, AIM

2736/81 が原資料である。

⁵⁸ 作家ブリンクマン(Jürgen Brinkmann) (Walther 1996:751)。

⁵⁹ Walther は「第 XX 局」(HA XX)と記したが、県支部に「局」(HA)はないので、訂正した。第 XX 局長はキーンバークである。

の課題は、公式記録に基づく抹殺(Liquidierung)がなされ得る証拠(場合により犯罪行為を記録)を可能な限り形成することにある。大きな価値は、抹殺あるいは場合によって拘留が彼らの目下の企画(アンソロジー)に基づいてなされないことにある。

[この指示は作戦重点「自主出版」の性格(静かな鎮圧)を配慮しつつも、別件逮捕を辞さないのだから、ミールケの新方針はやはり移行ではなく多様化である(3節参照)。しかし実際に進んだ夫妻の「解明」の結果は、「硬化した敵対的態度」の夫に打撃を与えるために妻を利用するという分解作戦であった。]

IM ペーター(グラチク)の通報などによるシュタジ・ドレスデン支部の「状況報告」(1976年3月2日)によれば:

「容疑者たち[夫妻]は具体的な根拠なしに、彼らの接触範囲における我々の機関[=シュタジ]の存在を推測している。

捜査範囲も「より緊密な友人グループ」(作家夫妻⁶⁰やシュタデ、画家、俳優その他)に拡大された。

夫妻に対する「夫婦間の不和を作り出す工作」の結果、夫の[アンソロジー以外の]原稿の出版はヒンストーフ出版社が拒否し、他方妻のそれは出版社モルゲンが[上記の]「GMS 醸造者の働きかけによって」出版契約した。

さらに妻は「最初の報酬を受け取り」、この出版社との人的接触を強めた。「非公式情報源[=IM]の評価によればこうしたことが夫の自負心を一層掘り崩した」。

「接触範囲」内に「感じ取られ得るが、明確にし得ない[シュタジの]存在は、動揺させる計画の構成部分であった」。

1976年3月18日のIMホルスト通報には、「G.ヘートル[夫]は終わりだ。彼は“神経過敏”状態であり、「すべて監視され」「始末」されようとしているなどと言い、「彼の個人的な動揺はほとんど言い表され得ないほどである」とあった。

その後、夫は「もはや文学において生産的ではない」し、他方、妻は「ますますこれら[=アンソロジー組織者]から距離を置いた」。かくて1976年7月14日、「国家敵対的企画“自主出版”が壊滅させられ得た」ことにより「VAO アンソロジー」も終了して「保存記録」とされ、「両容疑者[=夫妻]は今後OPK(作戦的人物コントロール)[=監視]のもとに置かれる」ことになった。(以上Walther 1996:405ff.)

ここまでは分解作戦の成功例である。出国運動絡みの類例を幾つか見たことがあるが、夫婦のうちの弱い方ないし取り込みやすい方を狙った。

ところが、ライプチヒ県支部第XX/7部は1978年8月に夫に対する「OV“アンソロジーII”を刑法100・106・107条による“敵対的活動”ゆえに開始せざるを得なかった」(Walther 1996:408)。しかしWalther(1996:413)には、このOVは夫妻に対するものとあり、このOVは1988年10月まで続いた末に、妻のリスクのほうが高くなり、妻についてのOVに移行した(同前:422)⁶¹ともある。だからシュタジは夫婦分解に成功しないまま、1年後にシュタジ自体が終

焉となった。

15. IM ペーターこと劇作家グラチク(Paul Gratzik)の貢献と離反

グラチク(アンソロジー寄稿者としてはグラチツヒ、以下Gr)は、シュタジ指導将校から、IMV ペーター(Peter)として「政治的・作戦的に非常に貴重な一連の情報を入手したことが評価され」た(Walther 1996:675f.)。

Grは劇作家で、作家活動をしつつ1974年からドレスデン変圧器・レントゲン工場に勤務し、1977年に東ベルリンに転居した。彼はすでに1962年からIMペーターであり、1981年にIM協力を拒否した[正確には1978年に本人が協力拒否、シュタジが1981年にIM解消(後述)]。彼は1963年からワイマール文学研究所で学んだあと、1968年[Walther(1996:674)によると1967年9月]にライプチヒ文学研究所へ移ったが、すぐ[1968年]に除籍になった(Müller-Enbergs 2010:421)。

実際は1962年に彼はIMではなくシュタジ・ワイマール郡支所のGIペーターであり、FDJ(青年団)郡指導部幹部かつ青年クラブハウス「ヴァルター・ウルブリヒト」のセクター長でもあった。1967年にIMペーターとしてドレスデン県デッポルディスヴァルデ郡支所に登録され、大尉ヴェンツェル(Wenzel)が指導将校になった。同年9月にはライプチヒ文学研究所進学によりライプチヒ県支部第XX/1部少尉ティンネバーク[14節(4)]の指導下になったが、1968年除籍によりIMが中断する。1969年から[作家として]自由業になり、1972年にIMVとして再登録され再びヴェンツェルが担当した(Walther 1996:673f.)。

友人のシュタデも1968年に同研究所を除籍になった。

Walther(1996:675ff.)は「シュタジ離反者」の例としてGrを取り上げた。以下それによる。

Grは1972年からしばしば東ベルリンのドイツ劇場(Deutsches Theater)や人民舞台(Volksbühne)に滞在し「シュタジが関心を持つ劇場関係者や作家たち」⁶²について通報した。1973年にはドレスデンの作家同盟や教会、勤務する工場の作業班について通報した。

1974年11月8日には、指導将校ヴェンツェル(少佐に昇進)に、自分は「今や作家たちや作家同盟」について“もっと大きな課題を解決する”ことが可能な地位を得たと自負した。その上でヴェンツェルとの次回会合までにシュタデについての詳細を作成すると約束した。

Grが望んだ「もっと大きな課題」は、彼自身が寄稿した「アンソロジー企画によってかなった」。すなわち、1975年12月16日[作戦重点「自主出版」発動1ヵ月余り後]に、シュタジ本部で第XX/7局・中佐ブロシェ(Brosche)が、ドレスデン兼支部第XX部長・少佐ミーダー(Mieder)に、「IMVペーター」の「今後の投入の細部」についてデッポルディスヴァルデ郡支所長と協議するように指示した。

その結果Grは「シュタデとの彼の友人関係に基づいて、1976年1月から[アンソロジーの]発起人グループおよび

トはOV「三文文士」(Literat)の対象でもあった。

⁶² 「とりわけMaik Hamburger, Heiner Müller, Charlotte Wasser, Ernst-Georg Hering, Fritz Marquardt, Benno Besson, ビアマン」(カタカナは本稿登場人物)。

⁶⁰ テツナー夫妻(Gerti und Rainer Tetzner)。

⁶¹ この新OVでは「資料“メフィスト”についての[シュタジ本部]第XX/5/4局との進行中の調整措置が継続・整備されるべきである」とある。「メフィスト」は夫妻が若い時から交友のあった上記の作家ファウストに対するOPKの暗号名である(脚注51参照)。ファウス

作家(とりわけ G.ヘートル)の情報を提供した。

「明らかに[その功績への]反対給付として」、ヴェンツェルが 1976 年 5 月 26 日に第 XX/7 局への電報において、Gr の小説への「印刷許可」を「懇請」した。

ところが Gr は、1978 年 2 月 10 日消印の速達郵便で IM としての協力の返上を、[10 年余の]指導将校ヴェンツェルに通告した。その後の説得にも応じず、1981 年 10 月 14 日に関係書類の「保管庫移転決定」[=IM 終了]がなされた。その決定には「政治的・否定的見解の強まり」ゆえに「この IM は MfS との今後の協力を拒否した」とあった。

[Gr の IM 拒否は 1977 年の東ベルリン転居直後である。同地での 1972 年以後のピアマンを含む交流、シュタデとの付き合い、転居後ベルリーナー・アンサンブルの作家になったこと、ピアマン追放(1976 年 11 月)の衝撃などが、彼に IM 拒否に至らせたと考えられる。加えて Müller-Enbergs(同前)によれば、彼自身が「検閲官との紛争」の経験者であった。それは彼が「少年院」というタブーテーマを取り上げた時であり、彼の作品は自身の就労体験に基づく「ありのままのリアリズム」が特徴であったと言う。]

Gr の IM 停止の 3 年後、1984 年 11 月に Gr に対する OPK「仕事着」(Kutte)が導入された。「DDR の社会主義的諸関係、特に SED の指導的役割や防御・保安機関を中傷するいくつかの文学テキストをまとめた」からであった。

この OPK の記録文書によると、シュタジは Gr の過去も振り返り、すでに 1975 年の情報に「彼の政治的見解は不透明」だとか、「社会的活動」に消極的であり、職場内のよく文句を言う人物たちとの接触に努めている、「個人主義者と呼ばれている」などとあったことが想起された。同時に、「正當にも IM としての彼の功績」も列挙された。すなわち、のちに「信頼できる IM」になる IMV「レギナ・バイアー」(Regina Beyer)勧誘への寄与やドレスデン国立劇場における「グループ形成」の通報その他である。

OPK 仕事着は開始 7 ヶ月後には終了した。Gr に「刑法上の重要性を示す活動は確認されなかった」からだとして OPK 終了報告にあった。

この OPK の記録文書の中に「6 回の[指導将校による]会合報告」のコピーもファイルされていた。その中の作戦重点「自主出版」に関して、Gr は「MfS [=シュタジ]に原稿を用立て、作家たちの諸会合、特に、発起人のうちの 2 人、シュタデとプレントドルフについて通報した」とある。(以上 Walther 1996:674ff.)

以上には寄稿者会合の「観察」者(14 節(2))がグラチクであったという記録はない。引用にある「原稿を用立て」や「作家たちの諸会合、特に…」の通報は、作戦重点「自主出版」に関する記述だから、同作戦への彼の投入(1975 年 12 月)後の出来事だろう。

「原稿」(単数)が彼のアンソロジー寄稿だけか、第 1 次寄稿全体かは明白ではないが、IM としての貢献の記述だから後者の可能性がある。そうだとすれば、Gr はレスキーン同様に、寄稿者会合決定(4 節)にもかかわらず、シュレジンガーに返送しなかったか複写していたことになる。また「用立て」はコピーさせたということだろう。本人のもとにそれなくなれば、組織者から疑念を持たれるからである。

ちなみに第 1 次寄稿全体を回状は「原稿 No.I」、Plenz-

dorf(1995:10)は「第 1 稿」と単数表現した。

16. 引き抜き:作家ウーヴェ・カント(Uwe Kant)を「トロイの木馬」に

(1) IM ヘルマン(ゲールリッヒ)の工作

751110 情報直後の 11 月 25 日、IM ヘルマンは指導将校パニッツに、ベルリン作家同盟議長ゲールリッヒ(IM ヘルマン自身)が「先週初めに作家同盟党書記・同志キュヒラー(Küchler)や SED ベルリン県指導部書記・同志ミュラー(Sepp Müller)」と持った会談を通報した(Plenzdorf 1995:239f.)。「先週初め」が月曜なら 11 月 17 日である。

会談の趣旨は、アンソロジーについての「作家同盟党指導部の前での同志コールハーゼの説明について協議」することであった。[コールハーゼは上記(10 節)のように 11 月 13 日に説明した]。会談の主な内容は:

ミュラーが、「この企画に反対する行動を展開するのではなく、企画をできる限り内部から爆破するために、[参加者ごとに]非常に差別的に対処することが重要である」という方針を示した。

彼は、「大騒ぎする理由はなく、静かさを保ち、この成り行きを見守るべき」であり、「アンソロジーから距離を置く確率が高いと想定され得る人たち」と「会話」し、その中で「誰がふさわしいパートナーか」を考慮すべきだと助言した。

「この助言に基づいて IM ヘルマンは、作家 U.カントをアンソロジーから引き抜くためには[作家]パニッツ(Eberhard Panitz)⁶³が適任だと確信した」。

IM ヘルマンが「約束通り」11 月 20 日にパニッツを訪れると、ヘルマンの知らない事情で[ミュラーによるだろう]、「文化相代理・同志ヘプケ[出版・書籍販売本部長]も同じ件で同席した」。「U.カントとの良好な個人的接触」のあるパニッツは、「喜んで」依頼に応じた。

パニッツは翌々日、22 日にこの件を U.カントに話したところ、U.カントは、当初アンソロジーに「いわくありげなことは何も気付かなかった」が、[送られてきた]第 1 次原稿コピーを「読んだ際に、彼の評価では少なくとも 3-4 寄稿が否定的な記述ゆえに DDR では出版され得ない」と気付き、「初めて面食らった」し、「すでにこの企画から身を引くことを考えていた」と言った。

パニッツは「作戦のにおいがしないように」U.カントにあまり強く言わず、ゲールリッヒ(IM ヘルマン)と相談するように勧め、U.カントはそうすることを約束した。

IM ヘルマンは、アンソロジー寄稿者レスキーンが「作家同盟書記・同志ビュッナー」にアンソロジー企画について問い合わせしてきた[10 月初め(7・10 節参照)]ことを知ったので、それを理由にアンソロジーについてのレスキーンの「疑念と問題について詳しい話」をし、彼が「アンソロジーから手を引くという保証が与えられるように試みる」ことになった。

このように IM ヘルマンは U.カントに加えてレスキーン引き抜き役も引き受けた。このことはレスキーンの IM 疑惑(Walther 1996:342)(10 節)への疑念要因になり得る。

Walther(1996:648f.)はこの IM ヘルマン通報を抜粋

であった(Baumgartner 1996:625)。

⁶³ パニッツは作家同盟幹部会員かつベルリン作家同盟議長代理

紹介しつつ、この文書が「党とシュタジがどんなに緊密に絡み合っているかを証明している」と位置づけた。そのとおりだが、ゲールリッヒは IM ヘルマンとしてではなくベルリン作家同盟議長としてパニッツに工作したのだから、党とシュタジと作家同盟のトリオであり、ヘプケも介在したので文化省も含めたカルテットの演奏であった。

ミュラー発言はシュタジの作戦重点「自主出版」の主旨に合致している。そこで以下のように推測することができる：

751110 情報の提示の際に党最高指導部は作戦重点「自主出版」の主旨の説明も受け(たぶん文書も)、その承認をシュタジ本部に与えると同時に、ミュラー発言のような内容の指示を党内(中央委文化部および関係する党県指導部)にも発し、中央委文化部が文化省や作家同盟に通知した。そうしてカルテットによる対アンソロジー分解・阻止工作が行なわれた。

パニッツは上記引用にある工作の際に、彼が「第 9 回党大会称賛のために出版する予定のベルリン作家同盟の文集に参加すること」を U.カントに伝えた。

「ベルリン作家同盟の文集」とは 751110 情報が提案した対抗策の具体化、『物語る』である。同情報のたった 12 日後、11 月 22 日にはそれがすでに具体的に進展していた。これもカルテットの成果である。パニッツに U.カントは二股はかけられないと答えた。彼がまもなく下した選択は、アンソロジー寄稿を取り下げ、パニッツ同様に、また兄 H.カントとともに、『物語る』に参加することであった(表 4 参照)。

(2) IM マーティン(ヘルマン・カント)の工作

Walther(1996:339ff.)によると、「MfS はこの方法[引き抜き]を…作戦重点“自主出版”においても用いる」に当たり、寄稿者のうちの「誰をトロイの木馬として使い得るかを熟考し」、U.カントを思いついた。彼は 1957-67 年に「GI ヘーゲル」(Hegel)としてシュタジ第 XX/局と第 XX/7 局に協力していた。[GI は「秘密情報提供者」で、IM の古称。]

シュタジはすでに 1975 年 8 月⁶⁴から U.カント引き抜き役を検討し、児童書出版社(Kinderbuchverlag)社長やライプチヒ文学研究所の IM「講師」(Dozent)⁶⁵が候補になったが、結局、「理想的なパートナー」として彼の兄 H.カント(IM マーティン)を見つけ、彼が「1975 年 12 月にアンソロジー計画の対策に投入された」。

「この IM [H.カント] を作戦重点“自主出版”に投入するため」の指導将校[ペニツヒ]との「会合」において、H.カントは、アンソロジー企画の「敵対的内容を認識し、それを「粉砕することに留保なしに彼の全人格を賭けて尽力する」と言明した。また彼は、企画を「自壊によって破綻させることが我々には重要であることを説明され、U.カントが「この企画から距離を置くことを保証した」。

「このあと H.カントがどうすべきかが詳細に協議され、彼は[指導将校に]「遂行結果を 2 週間後に報告した」(以上 Walther 同前)。この遂行結果は指導将校ペニツヒ作成の「会合報告」(Plenzdorf 1995:245ff.)に掲載されている(Walther 1996:340 には抜粋のみ)。

この遂行結果報告は 1975 年 12 月 12 日になされ、文

書作成は同月 15 日であった。IM マーティンの遂行結果報告が実際に「2 週間後」になされたなら、マーティンが投入されたのは 12 月ではなく 11 月末になる。

この文書の中でペニツヒは IM マーティン[H.カント、以下 HK]に「オープンで偏見のない印象」を受けたと記した。当時 HK は「強い鎮痛剤」の服用中でもある。

HK はまず「ベルリン作家同盟の党基礎組織の選挙報告集会」[おそらく第 9 回党大会代表選挙]における「作戦対象の作家たちの態度と行動様式」を報告した。その内容は「別個の報告」にあり、「IM ヘルマンの報告と一致した」とある。次いで U.カント(以下 UK)との「個人的会話」について報告した。それによれば(途中コメント挿入)：

HK が UK に、アンソロジーの「政治的陰険さと敵対的性格を説明した」ところ、UK 自身が「すでに疑義を持つに至っていたと表明した」。理由は「個々の寄稿の内容を知ったこと」であり、特に「ハイムの寄稿をはっきりと敵対的だと思い、ハイムの寄稿の公刊のために肩入れするつもりは決してないと表明した」。

そこで HK は UK に、アンソロジーへの寄稿の取り下げとその企画・組織からの引き上げを約束させた。

さらにそれだけでは「あまりに不十分であって、ほかの者にも影響を与えることが重要であると説明した」。

UK はこれも了解し、寄稿者の「次回会合[1976 年 3 月 5 日予定]までは静かにし」、会合の場で「ハイムの寄稿の敵対性を指摘し、ハイムの寄稿をアンソロジーから外すか、それとも彼が…自分の寄稿を取り下げるかどうかだと要求することを提案した」。

「最初の会合においてクナートが表明した疑念に応じたこの行動は、一連の他の作家たちに持続的に影響するだろう」と UK は述べた。

HK は UK の今後の行動について「誤りを犯さないために」事前に「自分に相談すること」を約束させた。

HK はペニツヒに、これによって「我々の機関[シュタジ]あるいは党が必要と見なす時にはいつでも、必要に応じたほかの行動方針を UK に与えること」が可能になると説明した。

〔「最初の会合」(1975 年 9 月 10 日寄稿者会合)に UK は欠席だから、「クナートが表明した疑念」は HK が UK に伝えたのだろう。HK の情報源はレスキーン(10 節)に加えて、下記のようにクナートでもある。〕

アンソロジー寄稿者シュナイダーにも、その寄稿をクナートから聞いたとして話しかけた。すると、HK にシュナイダーは、「この企画の誠実さに深刻な疑念がわいてきた」のでクナートと意見交換したと言い、さらに、心配しなくても「彼とクナートの取り止めによってこの企画はどのみち自壊するだろうと表明した」。

最後にペニツヒが HK に、「不断にかつ適時にアンソロジー企画の状況の変化を通報できるように、U.カントやシュナイダーと引き続き接触すること」という任務を与えた。

⁶⁴ Walther は 1976 年 8 月と記載したが、誤記である。

⁶⁵ 作家ノヴォトニー(Joachim Nowotny)である。Walther(1996:734)に彼が「1978 年から IM 講師」とあるのはこの記述と矛盾している。彼は 1970-82 年にライプチヒ文学研究所講師、

1974 年から作家同盟幹部会員、1978-89 年同副会長、「1970 年代半ばから 1981 年まで IM “講師”」であった(Müller-Enbergs 2010:961)。

こうして作戦重点「自主出版」が軌道に乗り、工作の触手はさらに伸びた。但し、シュナイダーとクナートが寄稿を取り下げることはなかった。彼らの面腹腹背か、HKの報告が不正確だったのかは不明である。

17. 作家ラントグラフ(Wolfgang Landgraf)の引き抜き:ヴァルターの対抗策(2)「広い世論の中」へ

ヒュプシュマン(Gisela Hübschmann、以下 Hu)は作家同盟本部女性職員で、後継者育成を担当し(Plenzdorf 1995:312)、若手作家ラントグラフ(以下 La)も担当していた。HuはWalther(1996)の中のIMには登場しない。

HuはLaと「面談」した内容を1976年1月28日付の作家同盟の記録に残した(Plenzdorf 1995:260 ff.) (以下「面談記録」と呼ぶ)。面談日は同月26日とある。

面談記録には、すでに「1975年春の面談の中で」LaがHuにアンソロジー参加を要請されたと語ったとある。しかし当時HuはLaの寄稿を阻止しなかった。

Laのアンソロジー寄稿は1975年5月に届いたが、その時すでに第1次原稿は締め切られ、寄稿者18人へのコピー送付も終わっていた(Plenzdorf 1995:10)。そこで、寄稿者会合の第2次募集決定を受けて、ヴァルター(以下 Wa)がLaに第2次寄稿への応募を求め、Laは応募した。

しかし今度は1975年春と異なり、Huがその阻止に動いた。これも751110情報以後の作戦変更(阻止作戦採用)を示している。個別協議分担計画(表3)に基づいて、作家同盟幹部か作家同盟党指導部が、Laに寄稿を取り下げさせるための協議をするようにHuに指示したのだろう。

シュレジンガー(以下 Sch)宅でのSchとWaの相談内容を同席したIMアンドレが1976年1月27日に「重要情報」ゆえ「計画外」に通報した(以下760127アンドレ通報と呼ぶ)。それは同28日のシュタジ大ベルリン支部第XX/7部「作戦情報91/76」に載った(Plenzdorf 1995:262ff.):

Laはベルリン作家同盟の若手作家育成のための「工房」のメンバーであり、かつ出版社モルゲンと新生活出版社がLaの作品の出版に関心を持ち、前者での担当原稿審査係がWaである。

Waが「9月の協議後」[=9月10日寄稿者会合後]にLaにアンソロジー参加を要請し、Laは「ただちに了解した。ようやく最近彼はそれを完成し原稿をSchに渡した」。寄稿作成の際にはSchの仲介で、ハイムがLaの「助言者」になった。

「1976年1月26日早朝に」Laが出版社にWaを訪ね、「電報で作家同盟に呼びつけられた」ことを知らせた。Laは、その際の面談内容をWaに伝えた[後述のように、面談の際にLaはHuに、Waに相談すると予告した]。そのため、「1976年1月26日午前以来、Sch、プレントドルフ、Wa、ハイムというアンソロジー組織者グループの中ではかなり大きな興奮と不安が支配した。

但し同じ760127アンドレ通報によれば:

WaがまずSchに同日「14時少し過ぎ」に電話で、同日に「編集委員会」[=アンソロジー組織者たち]が集まらねばならない緊急の必要を説明したが、それについて「決定するために、まずSch宅で個人的に会うことを決めた」。

従って、「午前以来」不安を感じたのはWaだけであり、「組織者グループ」が「大きな興奮と不安」に支配されたのは14時以後である。

面談日はHuの面談記録では1月26日だが、760127アンドレ通報では「1月22日または23日」である。「26日早朝」に面談内容がWaに伝えられたのだから、Huが記した面談日は間違いである。Huのこの単純な間違いは記憶違いや誤記とは考えにくく、何か理由があったのかもしれない。面談記録には次のようにある:

「Laは、1975年春の面談の際に私に、有名作家が参加するアンソロジー“ベルリン物語”の共同執筆を要請されたと語った」。彼はアンソロジー参加を「非常に喜んだ」。彼自身では「最初の出版を早くとも1976年末前には考え得ないからであった」。だから「参加条件をただちに承諾した」。

彼の寄稿は「DDRの女性市民の南米への出国申請を扱った物語」であり、「文学的な着目点はDDRの担当当局の申請拒否」にあった。「彼はこの物語がアンソロジーの枠組みに適合していると信じている」。

「なぜDDRの出版社の意見を最初から排除するアンソロジーに寄稿するのかという私の問いに、そこに居合わせる事が重要だと彼は言った。彼は若い無名の作家としていかなる機会も利用せざるを得ない、と」。

[それに対するHuの反論に]Laは、DEFA[東独の映画制作会社]やラジオ局、出版社(新生活とモルゲン)の支援を「確認し」、「彼がまだいかなる困難も持たず、彼の原稿の面倒を見ている諸出版社を信頼していることを率直に認めた」。

このアンソロジーへの参加は「出版社への不信」であるだけではなく、「わが政府の文化政策への不信が表明される」ことにもなるというHuの指摘に対して、「彼は非常に狼狽し、[アンソロジー]参加によってそのような態度に彼が共同責任を負うことになるという考え方を拒絶した」。彼が言うには、「アンソロジーがDDRの出版社から出版されないなら彼の寄稿を取り下げるつもりであった」。

面談が進むにつれ「彼は非常に考え込み」、「知人たちの態度の相違に自ら思い至った」。「[知人]としてWaのほか、企画参加を否定した若手作家2人の名前を挙げた。」

「面談の最後に」Laは、「最終的に取り消す前に彼はなお彼の原稿審査係であるWaやゾマー[新生活出版社]と話し合いたい」、「彼の最終的な決定」を2月8日以後にHuに電話すると言った。

Laは「信頼しやすく、その際非常に安易に他の意見に依存する」。だから「彼を[作家]同盟内の集団的な会話に引き入れ」、また「若手作家たちが1976年に実施するソ連旅行に彼を参加させるべきである」。

面談記録によると、Huは穏やかにLaを説得したように見える。しかし760127アンドレ通報によると、面談でのHuの態度は厳しく、強圧的であった。次のようにある:

面談はLaにとって「シュタージ(Staasi)の尋問に座った」かのようであった。「東独国家保安省(MfS)の略語が現在一般的なStasi(シュタジ)ではなくStaasi(シュタージ)である。」

Wa は、「“よりによってラントグラフが注目された”という事実からも、“彼らの間に ein Ledermantel (革コート) がいるに違いない」と結論した」。

Hu は La に「有無を言わず」アンソロジーからの離脱を迫り、応じないなら作家同盟は彼への「いかなる支援もただちに取り消さざるを得ない」と脅した。

また Hu は La に「クナートや R.キルシュ、デ・ブルイン、U.カント…がアンソロジー企画への参加を取り下げた」と言った。

4人のうち実際に取り下げた U.カントもこの時点ではまだ取り下げず、クナートとデ・ブルインの取り下げは全くのデマであり、キルシュは第2次招待を受けたが、寄稿しなかったため、これもデマであった。Hu自身は直接には多くの情報に接する立場にないので、作家同盟幹部の誰かが彼女にそう吹き込んだのだろう。面談記録にはこうした発言の記載はない。760127 アンドレ通報は続く：

「La は今や良心の葛藤に陥っている」。彼は Wa の助言を得るために、Hu に「考える時間を要請した」。

Wa は La に「さしあたり寄稿を取り下げるべきではない」、「“党は党大会を前に不人気な措置を取ることはできない”」ので、「“ヒュプシュマンの脅し”にもかかわらず圧力を恐れてはならない」と助言した。

Wa の見るところ「今やどう振る舞うかの問題は La だけではなく、全員の問題になった」。

Hu のこのような厳しい態度には、1975年春に La のアンソロジー参加を放置した悔いも影響したかもしれない。上記下線部分の Wa の楽観論とは異なり、党とシュタジは党大会までのアンソロジー企画壊滅という決意であった。

よほど堪えたのだろう。La は早々と1月27日の組織者への手紙で寄稿を取り下げた (Plenzdorf 1995:12)。

760127 アンドレ通報によれば、Wa の以上の報告に対して、Sch は「非常に心配そうに、かついらいらし、ハイムらとの相談が至急必要だと考えた」。

また Sch は「とりわけ名前を挙げられた4人の作家が参加をすでに取り下げたという知らせに驚き、それは「La 向けの Hu の畏」なのか、「4人が本心を明かすにはあまりに臆病なのか」と考えつつも、キルシュ以外の3人には「すでに殆どそんなことではないかと心配していた」と言う。U.カントは「彼の偉大な兄 [H.カント] の尻」に敷かれているとも言った。〔作家同盟とシュタジの疑心暗鬼誘発作戦の成功である。〕

760127 アンドレ通報によれば、Wa が対策を提案した：

集まっているすべての原稿が「きわどい」が、「最も強烈」なのはプレントドルフの寄稿である。「企画を“救う”ためには、“爆弾を幾分弱め”なければならない。それは“子羊をいけにえにする”ことを意味するが、“プレントドルフなら“それを処理することができる”」。

つまりプレントドルフの寄稿を「弱める」という策であり、作家かつ原稿審査係の Wa であればこそその着想であった。しかし彼はシュタジが第1次寄稿7本を問題にし、寄稿者の一部は特にハイムの寄稿を問題にしたことを知らなかった。

Sch は Wa のこの策をハイムに聞いてみると答え、4人の離脱発言には「抗議する」価値があるかどうか考えねばなら

ないと言った。

何よりも検閲打破の意図自体が問題にされていることに気付いた Wa は、さらに次のように提案した：

「今やたぶんアンソロジーの編集が最重要問題では全くなく、党による検閲の継続に反対してなんらかの対処をするという基本方針が何よりも問題とされる状況が到来した」。

だから「静かさを守るという我々の戦術が今なお正しいかどうかを検討しなければならない。党の攻撃に反撃によって応え、ただ単に我々の企画のみをもって広い世論の中での議論を、しかもできる限りまだ党大会前に、党に強要することが、おそらくベターである」。

「静かさを守る」戦術から「反撃」に転換し、そのためにアンソロジー企画を「広い世論」に訴えるというこの提案について、Sch がハイムと相談し結果を Wa に知らせることになったが、結果を「IM は確認できなかった。Wa の反応からもそれは読み取り得なかった」と 760127 アンドレ通報にある。

実際には Wa の「広い世論」に訴えるという提案は採用されなかった。18節にあるように、1976年2月4-5日の Wa を含む5人の「幾つかの話し合い」が、「いわゆる“社会主義的反対行動を強める”ことで一致した」からである。そのため「反対行動」は体制内合法性遵守に限定され、西独メディアを利用しないのみならず、第2回寄稿者会合すら「抗議集会」化を懸念して延期(結局は中止)してしまった。

「広い世論」に訴えるには西独メディアの利用しかなかった。新聞声明案は前年9月10日にあったが、体制内の作家同盟機関紙利用すぎず、それでさえ寄稿者全員の同意は得られず、実行されなかった。「広い世論」向けの声明は東独のすべてのマスコミが載せるはずがなかった。

西独メディアの利用への寄稿者全員の同意はなおさら無理であり、組織者のみでそれを実行する決断もなかった。

好対照はハイムの依頼を受けてビアマン追放抗議声明を組織したヘルムリンの決断であった(1976年11月)。彼はそれを SED 機関紙や国営テレビに発表しようとしたが、拒否されたために、フランスの通信社 AFP 特派員に声明文を渡し、一気に世界に流布された (bpb 2016)⁶⁶。

18. シュタジの作戦状況分析と組織者の対応

1976年1月31日付けのシュタジ・大ベルリン支部第 XX/7 部の「作戦資料“自主出版”についての収集情報の分析」(以下「分析」と呼ぶ)は、これまでの成果に自信を深めつつも、特にヴァルターとシュレジンガーへの警戒を強めた。

「分析」は次の4項目から成る：1)アンソロジー企画の発生史、2)9月会議(=寄稿者会合)後の活動、3)導入された差別化・分解措置への反応、4)大ベルリン支部第 XX/7 部による今後の措置 (Plenzdorf 1995:270ff.)。うち1)と2)を Plenzdorf(同前)は省略した。

3)ではアンソロジー側の反応が「IM アンドレ、IM ビュヒナー、IM ロマン、IM カール」(各本名は上記)の報告のまとめとして紹介され、IM 個々の報告は記されない(IM ロマンは12節のように自らを語っただけだろう)。3)の内容は(ヴァルターの反応のうち13・17節記載部分は省略)：

・「デ・ブルイン、クナート、R.シュナイダー、U.カント」

それが西メディアで公表されたと言う。両方だろう。

⁶⁶ Thieme(2011)は、ハイムが抗議声明を通信社ライターに伝え、

が「アンソロジーへの今後の協力を拒否すると見られ得る」。〔実際に取り下げたのは U.カントのみ。〕

・組織者たちの間では、[当局側の]「色々な措置によって」、一方で「ある程度の不安」と「企画の成功への疑念」が確認され、他方で「活動の陰謀化の強化」と第 2 次原稿の取り組み強化が見られる。特にシュレジンガーは「非常に集中してアンソロジーの完成に取り組んでいる」と見られる。

・陰謀強化はヴァルターの行動および組織者たちの「慎重さ」(例えばシュレジンガー宅電話ではなく公衆電話の利用)に現れている。陰謀強化にはアンソロジー組織活動への「ヴァルターの組み込みも寄与している」。彼は原稿審査係として「現代作家たちの 2 つのアンソロジーの出版」を担当しているの、多くの作家を訪れる「合法的な口実」を持っている。

4) では以下の「今後の措置」が指示された:

・「個別の措置計画に定められている人物たちの偵察のために必要な措置」は「3 月半ばまでに」終了せよ。

・「IM 投入」を各寄稿者の「差別化過程と分解過程」が達成されるように強化する。

デ・ブルイン[12 節参照]、HD.シューベルト、He.シューベルト、エルプ[11 節・補注 1 参照]に対してはアンソロジー組織者への「不安が形成されるべきである」。

その際 HD は「組織者グループとの固いつながり」および「アンソロジーの目的とより高いイデオロギー的一致」があるので「企画の政治的・イデオロギー的側面よりも、主にそうした企画の見込みと展望の無さを前面に出す諸措置が導入されねばならない」。

他の 3 人には「アンソロジーの政治的動機の明確化」が必要であり、また彼らの寄稿は他のアンソロジー [= 『物語る』] での出版措置の導入があり得る。

・シュレジンガーについては、彼に対する「分解措置への彼の反応を報告することができる有能な IM を獲得する」ことと、アンソロジー継続のための彼らの「新しいアイディアについて適時に情報を得る」ことが重要である。「そのためには他の作家たちにおける分解措置の成果が首尾一貫して利用されねばならない」。

・ヴァルターについては、「アンソロジー参加の度合いと動機、目的が最も迅速に解明されるべきである」。

・「1974/75 年からの作戦的処理」 [= 諸 OV] の継続とともに、「一方のヴァルター、シュレジンガー、シュタデと、他方のプレントドルフ、ハイムの間」に存在する差異が攻撃的な分解措置に利用されるべきである。[ここに言う「差異」の 1 つはアンソロジー編集をめぐるもの(9 節)だが、ほかにもあったかもしれない。]

・「これら人物グループの今後の処理のために」、アンドレ、アドラー(Adler)⁶⁷、ビュヒナー、フリードリヒ、ロマンなどの IM 合計 9 人と、GMS1 人を投入する。

作戦の進展、特に協議についての組織者側の対応を 1976 年 2 月 6 日に IM アンドレがシュタジに通報した(760206 アンドレ通報と呼ぶ)。また「計画外」の緊急の

通報であった。彼はやはり勤勉な IM であった。その内容は 1976 年 2 月 9 日のシュタジ大ベルリン支部第 XX/87 部の作戦情報 128/76「作戦重点“自主出版”」(Plenzdorf 1995: 280ff.)にある(途中コメント挿入):

1976 年 2 月 4-5 日に「組織者および特に積極的な共著者」、つまり「シュレジンガー[以下 Sch]、シュタデ、プレントドルフ、HD.シューベルト、ヴァルター」[以下「冒頭の 5 人」と呼ぶ]が、最近の「協議」を「主要テーマ」に「幾つかの話し合い」をした。

Sch が寄稿者たちから協議の内容を聞き取っていて、5 日には「プレントドルフ、U.カント、デ・ブルイン、He.シューベルト、エルプ夫人、それにレスキーン」との協議があったことを知った。

ラントグラフとの協議はすでに「2 月 26 日」に知った。[「2 月 26 日」は明らかに誤記で、1 月 26 日に知った(17 節)。シュタジの誤記か、Plenzdorf の転記ミスか未確認。]

プレントドルフは「文化相[ホフマン]との彼の面談」について 4 日午後遅くに Sch に知らせた。

5 日に Sch は「上記の人物たち」[冒頭の 5 人のうちの 4 人]に、「ラントグラフとレスキーン」以外に寄稿を取り下げた者はいなかった、「R.キルシュ(Rainer Kirsch)やクナート、デ・ブルイン、U.カントのいわゆる「辞退」は作家同盟が「意識的に流したうわさにすぎない」と報告した。

[ラントグラフは 1 月 27 日の組織者への手紙で取り下げた(Plenzdorf 1995:12)が、U.カントの取り下げは後日であり、レスキーンは取り下げなかった。「R.キルシュやクナート、デ・ブルイン」の取り下げは、すでに作家同盟書記ヒュブシュマンが 1976 年 1 月下旬にラントグラフに語った偽情報で、R.キルシュは寄稿者ではなく、クナートとデ・ブルインは取り下げなかった(17 節)。]

プレントドルフは Sch に「文化相にきちんと意見を言った」と自慢し、文化相に、党・国家・作家同盟はアンソロジー企画に対して「社会主義的民主主義および DDR 憲法、さらに SED 第 9 回党大会のためのすでに公表されたドキュメント案にも反している」と非難し、アンソロジーのための「寄稿や準備作業への協力から身を引かないだろう」と「断固」として言明したと言う。

冒頭の 5 人は「一致して」、「とりわけヴァルター」が、「協議作戦」によるアンソロジー潰しは、「企画が実現すると」憲法に合致した民主的権利の一貫した擁護の実例が模倣され得る恐れがあるからだと主張した。

Sch は、協議によって寄稿者たちを「動揺させ、それによって、“彼らを再び、とくに時代遅れになった党の文化政策路線の中に押し込める”ことを達成するつもりである」と強調した。

シューベルトは、「協議作戦」を、「芸術におけるタブーを廃止するという第 8 回党大会の路線が一つ一つ再び撤回されるという証拠」だと見た。

Sch は近く「協議に召喚される」と考え、シュタジによる連行も予想した。そのためプレントドルフが、アンソ

⁶⁷ 原稿審査係ピュシエル(Walter Püschel)である(Walther 1996:595)。彼は戦争末期に徴兵され米軍捕虜、帰還後 SED 入党。新生活出版社原稿審査係やライプツヒヒ文学研究所などを経

て作家、かつ 1962 年から Eulenspiegel 出版社原稿審査係主任であった(Baumgartner 1996:672)。

ロジニー企画に「違法性」はなく、「ましてや“証明する”ことはできないのだから、彼がそんなに“不吉に”考える必要はないと言って、彼を落ち着かせようとした」。

[アンソロジー企画の実務を担ってきた Sch はかなり追い込まれた様子であった。]

冒頭の5人はこの日々に「二者間や多者間の会話」を続け、「いかにして“この協議作戦に対抗しなければならぬか”」についての調整をした。その結果「いわゆる“社会主義的反対行動を強める”ことで一致し」、「以下のような戦術的行動方針」を決めた：

- －文化省と作家同盟に苦情、請願、個人的面談。
- －公開朗読会での寄稿利用。
- －寄稿を西の出版社や文学雑誌に提供しない。
- －西のジャーナリスト・文学者等に情報提供しない。
- －協議に実務的に応じるが、引き下がらない。

この方針に沿って Sch が「文化相代理ヘプケへの“苦情の手紙”を準備し始めた」。プレントドルフは「国家評議会議長への“請願”を書くつもりである」。

[「社会主義的反対行動」とは体制内合法限定であり、特に西へ「情報提供しない」ことや公然たる抗議の回避である。Sch は作家同盟第1書記 G.ヘニガーへ 1976年2月10日付けの手紙を送った(19節)。おそらくヘプケ宛でも同様の内容だろう。東独には請願法があって国家評議会議長あて請願を投函することができ、出国希望者もよく利用した。]

シューベルトは、ベルリン作家同盟党指導部に苦情を言いに行こうとしたが、Sch とヴァルターが止めた。シュタデは文化省出版・書籍販売本部での「苦情」申し立てを継続するつもりである。

[シュタデの「苦情」は彼個人の物語集の一部削除指示に対する苦情(13節)だろう。彼は作家同盟書記ビュッナーに抗議の手紙を出した(19節)。]

プレントドルフは、それぞれの手紙や請願が「同じ内容になってはならないし、「時間的間隔も注意されねばならないと指摘した」。

Sch とヴァルターは上記方針に沿って、「アンソロジー用の一定の諸原稿」を「新規創設の西ベルリンの文学雑誌“Litfab”」に掲載することを「拒否した」。

[ということは掲載の呼びかけが折衝があったことになる。アンソロジー情報の西側への流出については19節参照。]

「組織者たちは1976年3月に計画された[2回目]の寄稿者会合を4月に延期することを考慮している」。3月開催が「企画妨害への」「公然たる抗議集会になってしまうことを危惧」したからである。(紹介完)

第1回寄稿者会合が次回会合を1976年3月5日に決定していた(4節)。延期した第2回は開催されなかった。

19. アンソロジー組織者3人の弁明的抗議とヘルマン・カント(Hermann Kant)らの追撃

アンソロジー組織者たちにとってシュタジの陰謀は不明確であっても、党・文化省・作家同盟・出版社の動きは明らかであった。そこでまず、シュタデが1976年2月3日、作家同盟書記ビュッナーに親称で手紙を書き、次のように猛然と抗議した(Plenzdorf 1995:275ff.)：

アンソロジー企画は「2年前に生まれたが、実質的活動は1年半前からだ」。「この活動は公然となされた」のであり、「該当する作家たちに知らせ」、「シュレジンガーとプレントドルフはヒンストーフ出版社に、私は出版社モルゲンに知らせた」。「だから秘密保持という非難は根拠がなく、陰険だ」。

編集者が原稿の構成を決定するのはどの出版社でも「通例の手続き」だ。通常編集者は少数だが、アンソロジーでは「全寄稿者が編集者になること」だけが特殊にすぎない。

アンソロジーは「党が私に教えたすべて」の義務の「実現のための手段」だ。その義務とは、「我々の文学を国際的に尊敬される水準にすること」、「作家間の孤立化」の克服、「文学についての議論活性化」だ。

そのような[重要性を持つ]アンソロジーに対して「最近何週間か文化省や出版社、作家同盟によって本格的な攻撃がなされたし、まだなされている」。そこには「明らかに役割分担の計画が存在し」、「作家同盟は、アンソロジーから寄稿を取り下げるように参加者に圧力をかける課題を引き受けた」。

「あなた自身がこの尽力に加わっている」。ここではその「卑劣な方法」を詳論しないが、例えば「特定の作家たちがすでに[アンソロジーから]離脱したという、事実合致しない主張」[17節参照]がそれだ。

「私はここでは、なぜまずアンソロジー組織者たる我々3人と話をしないのかを聞きたい」。それは「卑劣、不信、不法性の認識」ゆえか、あるいは3人は「議論の余地がない」と思っているのか。「そうした考えは率直に言って、全く戦慄すべきものかつ侮辱」であり、あり得ないような「不信の権化だ」。

作家同盟は「文学振興」という「しなければならないこと」ではなく、その「まさに逆をしている」。それは、「ある種の作家たちが社会と対立している」と証明したがついている西メディアの「思うつぼだ」。

「これに関連して若い作家たちと彼らにとっての出版可能性の問題も私を苦しめている」。……[その例として「非常に才能がある」青年ノイマン(Gerd Neumann)⁶⁸が検閲につぶされる例を挙げる。]

ノイマンは学籍除籍後、「まさに長年貧窮の中」にあり、絶望したが、友人たちの説得により再び書き始め、「3つの物語から成る1冊の本」を完成させた。そこでは「特定の重要な問題についての彼の見解」が叙述された。しかしその出版を「今年初めにヒンストーフ出版社から拒否された」。「彼は、出版社が要求するように今変えるべきなのか?」。彼にとって、「再びすべてが、すべての希望とすべてのチャンスがだめになった」。「どこかの屋根裏部屋で飢え死にしかねない」。

「アンソロジーに戻る」。原稿を読みもしないで「最初からアンソロジーの背後の否定的意図を推測する」の

⁶⁸ 作家Margarete Neumannの息子、1942年生まれ。機械工・トラクター運転手の職業教育を受けたが、作家に転身。1966-69年ライプツヒヒ文学研究所在学、「修正主義的性格のイデオロギ

一的・美学的公言」[おそらく「プラハの春」の支持]により除籍かつSED除名(Müller-Enbergs 2010:945)。

は「根深い不信」によるのであり、「この不信が私の場合には尾行や信念詮索にまで至っている」。これでは「生活することも仕事をする事もできない」し、「発展した社会主義」のような「生き生きとした社会」にふさわしくない。

アンソロジーは「作家たちの肯定的な反応」として「これまでに 25 人の作家が合計 350 ページ参加した」が、「原稿締切りを半年延期することを私は提案した」。そうすればアンソロジーには「最終的な構成」をより良くする可能性が生じ、「〔文化〕省と出版社、〔作家〕同盟」には「我々の見解を調査する可能性」が生じる。しかも、「作家たちは最後に、彼らの好むままに、離脱することも頑張ることもできる。彼らはその熟慮のためのより多くの時間と機会を持つ。そのことが、本来あなたに書きたかったことだ」。

「シュレジンガーも彼の見解を文化省に通知するつもりだ。私はあなたの理解と、不信の少なさまたは無さ、その他の点での良き協力を希望する」。

この手紙はアンソロジーの正当性と合法性を強調しつつ、作家同盟の「卑劣な」引き抜き工作に猛烈に抗議した。しかし彼が IM アンドレに漏らしてしまった「作家たちの出版社」構想や原稿審査係排除の既存出版社利用という構想がなかったかのように論じ立てた。

だから抗議は強い言葉ではあっても、検閲の不当性ではなくアンソロジーの合法性の主張であり、弁明的であった。わずかにノイマンの悲劇を通じて出版社検閲を糾弾した。

この手紙は、日付としては少し早い、組織者たちが時間差を設け異なる内容で出すことにした手紙や請願(18 節の 760206 アンドレ通報)の一環だと思われる。

次いでシュレジンガーも、上記にある文化省ではなく、作家同盟第 1 書記 G.ヘニガーへの 1976 年 2 月 10 日付けの手紙(Plenzdorf 1995: 278)に、次のように書いた:

「私は緊急の案件をあなたに問い合わせる」。アンソロジーにはこれまで 25 人が寄稿した。「作家同盟の職員」が寄稿者たちと面談したということ「最近色々な方面から知った」。

その際とりわけ次のような指摘がなされたとのことである: ①アンソロジーは自主出版される、②アンソロジーは西の出版社に提供された、③組織者が「プラットフォーム」〔=組織基盤〕を作るつもりである。

これらの「うわさ」の出所は分からないが、この手紙はそれを調べるように要請するためではなく、以下についてあなたに分かってもらうためである:

- 「①我々が我々の企画を“自主出版”で実現するつもりだということはばかげた指摘である。(…それはどんな仕組みだったのか?)」。
- ②我々はこのアンソロジーを西の出版社に提供したこともそのつもりもない。
- ③各寄稿者の「芸術構想」は異なり、「何らかの“プラットフォーム”を形成する意図を持ったことがない」。

このアンソロジーは作家たちの「より深い芸術的コミュニケーションに」、従ってまた「DDR 文学」に貢献する。〔だから〕「あなたがその種のうわさを聞く場合には、これらを断固否定してくれるようお願いする」。

彼は「自主出版」の意図も、西への提供も、「プラットフォ

ーム」形成も否定した。しかし「自主出版」構想の存在は、IM アンドレの通報やベルリン作家同盟会員集会、寄稿者会合などから明らかであるし、このアンソロジーの意味はそこにあった。また「プラットフォーム」の意図は組織者を越えた寄稿者会合での「検閲打破」合意に現れた。西への提供としてはシュレジンガー自身が槍玉にあがった(本節末尾)。

我々の感覚では何の問題もないにもかかわらず、こうした弁明をせざるえないことに「タブーなし」の限界が現れた。

シュタデ同様、シュレジンガーの手紙も作家同盟の介入に強く抗議するが、介入の不当性糾弾の論拠を検閲の不当性ではなく、アンソロジーの合法性に求め、やはり弁明的抗議であり、撤退開始を思わせた。

アンソロジー企画はそれなりの組織も戦略・戦術の準備もなしのドンキホーテ型挑戦であったのだから、極力弁明して被害を最小にするという対策以外になかったのだろう。

闘うなら、世論に訴えるというヴァルター提案によるしかなかったが、組織者たちはそれを採用しなかった(17 節)。

作家同盟会長アンナ・ゼーガース宅に 1976 年 2 月 19 日にプレントドルフが、彼とシュレジンガー、シュタデ連名の「出来事の“描写”」(»Darstellung« des Vorgang)と題する文書を持参した。それは同時に SED 中央委文化部、同ベルリン県指導部、文化省にも送られた。

それはタイプ印刷 4 ページに、「アンソロジーの短い歴史」と各種非難への「反駁」、「最近 2 年間の政治的变化への警告的示唆」、「芸術に好意的な雰囲気を要求するアンソロジーの実験的性格」を記した(Plenzdorf 1995:13f.)。

それをゼーガースは 2 月 26 日に作家同盟第 1 書記 G.ヘニガーに渡した。但し上記 3 人が付した短い添え書きは渡さなかった。その際彼女はヘニガーに、プレントドルフには「描写を理解しないしそれを重要視することはできないと言った」と伝えた(同前:285)。こうした経緯についてのヘニガーの覚書(1976 年 2 月 26 日)に「描写」が添付された(同前:286ff.)。添付された「描写」に日付はない。

「描写」の中で最も注目されるべきは、アンソロジー企画の「“生産協同組合的”側面」の強調にある。それが企画についての組織イメージと見られる。

「描写」は冒頭に企画の目的を記した:1)参加者全員の編集参加による「作家の孤立」の改善、2)作家間の「コミュニケーション」の深化、3)作家間の「相互尊重と共同企画」の中での相互批判による「伝統的な競争思考のブルジョア的諸関係の解体」。

要するに、作家による共同編集と非「ブルジョア的」な集団著作である。但し分担が明記されない「著者集団」作品ではなく、相互検討を経た個人作品の集合である。

「描写」は続いて、アンソロジー原稿は当初 200 ページ、その後拡大して 350 ページになり、「1976 年春に詳細なテキスト討論が始まり、わが出版社の 1 つに提供される予定である」などと記した上で、いわば本論に入る:

「最近 2 ヶ月に殆どすべての参加者」に対し、「企画への協力から離脱させる」ための作家同盟や出版社との「面談がなされた」。「その結果、若い世代の一人の作家〔ラントグラフ〕が寄稿を取り下げた」。「U.カントの寄稿取り下げ通告はまだになる。」

「描写」によると、「面談」の際の作家同盟などの主張は: 企画は、①「出版制度の構造を根本的に変革する」

ことや、②「自主出版」、③「ベルリン作家同盟の党大会アンソロジーへの反企画」を意図し[「党大会アンソロジー」とは『物語る』である(21節・補注6)]、④「すでに西の出版社に提供され」、⑤「秘密裏」の“イデオロギー的プラットフォーム”形成を目的としている。

これに対して「描写」は次のように反論した：

①「根本的変革の試み」はなく、「作品承認と印刷許可、印刷の経過は通常のやり方と異なるから」。

②「自主出版」は「一度も話し合われなかった。それはわが出版制度の構造ではあり得ないから」である。

③「我々の[アンソロジー]企画の作業は、党大会アンソロジーの1年半前に始まった」し、両アンソロジーに参加の作家もいるのだから、非難は当たらない。

④我々のアンソロジーは「西の出版社に提供されなかった」。そうするには全参加者の同意が必要だが、その協議が「なかったことを確認することができる」。「我々の作業の前提は明らかに」国内出版社の「1つで表現しようとしていることにある」。

⑤企画は「秘密裏」ではなく、「少なくとも2人の出版者が、うち1人[=ヒンストーフ出版社社長(9節)]は最初から知っていた」し、寄稿招待を「東独国営でシュタジの検査があり得る」ドイツ郵便で送付し、相手は「沈黙を義務づけられなかった」。彼らは逆に「他の作家に協力を勧めるように要請された」。寄稿の「約70%」は彼らの出版社に知られている。各寄稿に「統一性」がなく、各参加者は企画以前には他の参加者のことを知らず、「イデオロギー的プラットフォーム」という非難には根拠がない。「この非難は作家たちに非常に不条理に思われている」。

「描写」は最後に、アンソロジー企画と第8回党大会以後の文化政策の関連を次のように主張した：

この企画は「個々の生産的作家たちの間の関係を促進する企て」であり、「“生産協同組合的”側面」、従ってまた「芸術に好意的な雰囲気を必要とする実験的性格」を持っている。

参加者は「第8回党大会以来の文化政策方針の中でこの雰囲気を感じ取り、この企画によってその意図[=文化政策の意図]に従っていると信じている」。

この「実験は指揮介入や中傷、陰謀のない基盤の上でのみ成功し得る」。

「今の段階では我々の[=国内の]諸出版社の1つに協力させる用意がある。しかし企画に有利な社会的培養器がもはや提供されない場合には、寄稿者たちはこれ以上その作業を継続し得る状況にないと気付いている。にもかかわらず寄稿者たちは、その企図の進歩的核心が認められ、アンソロジー作業が奨励されることを望んでいる」。

このように「描写」は、アンソロジー企画が作家たちの「生産協同組合的」なものの実験であったと言う。それが「企図の進歩的核心」であった。生産協同組合は製品の集団生産・出荷をするのだから作家たちの出版社のように聞こえる。

続く文では、「今の段階では」既存出版社利用による出

版を考えているが、「有利な培養器」、つまり党のタブーなし路線が撤回されるなら、企画を断念せざるを得ないと悲観しつつも、なお「企図の進歩的核心」の奨励を要請した。

東独生産協同組合を代表する農業のそれ(LPG)は集団経営であった。組織者のイメージは手工業協同組合(PGH)に近かったかもしれない。例えば私が利用したPGH加盟の散髪屋は、LPGと異なり「集団生産」ではなく、組合を通じて国家の計画経済に組み込まれつつも仕事は個々の店ごとであった(近所の国営理髪店のほうが清潔感があったが、親近感はPGH店が優った)。インタビューした電気工事店も作業は個々であった(青木1985参照)。

結局、「描写」も「自主出版」の意図を否定し、やはり弁明的抗議であり、シュレジンガーは「破産宣言」と評した(20節)が、シュタデやシュレジンガーの抗議文書になかった「企図の進歩的核心」の奨励を訴えた。上記のように3人は時間と内容を異にする抗議文書を個々に出すことにしたが、「描写」は連名であった。

だが、もちろん訴えは実らなかった。作家同盟官僚のみならず会長ゼーガースもあっさりそれを却下した⁶⁹。

1976年3月19日には組織者3人同時に、ベルリン作家同盟党指導部が委託したH.カント(以下HK)やゲールリッヒ(以下GG)、G.ヘニガーら5人との「協議」に呼ばれた。ただシュタデは病欠欠席のためプレントドルフ(以下Ple)とシュレジンガー(以下Sch)が出席した。いわば個別協議の締めくくりであった。IMヘルマンとマーティンが内容を通報した(表題では協議、本文では面談とある)(Plenzdorf 1995:293ff.)。

まずGGとHKが1974年11月13日のハイムとSchらの検閲廃止要求に触れながら、「出版社の仕事[=検閲]を排除する」[著者編集の]企画だと露見しているのだから、「ことを些事に見せること」をやめよと強く指摘した。

「著者編集」は資本主義社会では必要かもしれないが、「わが社会主義社会ではいかなる存在基盤も欠いている」のだから、アンソロジー出版を「DDRにおける通常の形態」にせよと迫り、Pleが彼らの「立場を理解すると言明した」。

またGGとHKは、Schがその寄稿の西側での出版を米国人講師に依頼したことや、西独週刊誌シュテルン編集者にアンソロジー企画の情報を開示したことを暴露し、作家同盟には情報開示を拒否していると批判した。そのため次のベルリン作家同盟会幹部会会議(4月22日)でPleがアンソロジーについて「事実のみ」を「いかなるコメントも」なしに報告することになった。

二人は作家同盟幹部の攻勢になすすべがなかった。

20. 断念：ヘルマン・カント(IM マーティン)の最後の一撃

IMアンドレ(以下An)は1976年4月8日のシュレジンガー(以下Sch)との会話を同月14日に通報した(文書は4月30日付け)(Plenzdorf 1995:300f.)。それによると：

Anは4月8日にSchに、Schが用意したと言う書類を受け取りに立ち寄ってもいいかと電話した。Schは14時頃を指定しつつ「あまり時間はない」と答えた。しかし実際には、SchはAnとの会話を「歓迎すべき

の抗議声明に「同意しない」と言明した(ND1976年11月20日)。

⁶⁹ 彼女は『物語る』にも寄稿し(補注6)、また党機関紙のピアマン追放賛同談話特集の中でただ一人写真入りで「若干の作家たち」

気晴らし」と感じた様子で、「3 時間近く互いに話した」。
[Sch が An を信じ切っていたことがよく分かる。]

「最初の話題」は An のアンソロジー寄稿であり、Sch は彼に「いわゆる“描写”と添え書き[19 節]のカーボンコピー並びに[アンソロジーの]最初の 18 寄稿が入った書類入れ」を渡し、これらは Sch 自身用なので「ついでの時に返して欲しい」、第 2 次寄稿は「編集委員会によってまだ手を加えられていない」ので入っていないと付け加えた。

「5 月 1 日の前の週」に彼とプレントドルフ、シュタデが出版社モルゲン社の社長テンツラー（[Wolfgang] Tänzler）および[原稿審査係主任 H.]ヘニガーと会う予定であり、「そこで最終的に、“アンソロジーの運命”がどうなるか決められるはずである。二人は事前に文化省出版・書籍販売本部で相談した」と Sch は言う。

Sch は「非常に疲労困憊し気が滅入っているように見えた。“描写”[19 節]を“破産宣言”と論評し、もはやアンソロジーの実現を信じていない。テンツラーやヘニガーとの話し合いには最終的な出版拒否を見込んでいる」。

Sch によれば、プレントドルフは「この件でまだコウノトリを信じているが、私にとっては確定している：もはや何も起きない。そして私はうんざりでもある」。

この時すでにシュレジンガーは断念の様子であった。予め「編集委員会」が「手を加える」(überarbeiten)とあるのは、アンソロジーの全員編集という方針から逸れていた。

少し経った 5 月 3 日に An が、4 月 28 日の西独常駐代表部(東ベルリン)における「ジャズ催し」(これを An は別途通報)に出たあとの An と Sch の会話を通報し(文書日付は 5 月 17 日)、アンソロジー企画の「死」を伝えた。

通報によれば、Sch からアンソロジーの話題を切り出し、「共著者としての私 [=An] にこの件の最新の状態を知らせることを義務と感じている」と言いつつ Sch は次のように語った(Plenzdorf 1995:302f.) (途中コメント挿入)：

「文書での“描写”[19 節]に関して[作家同盟副会長]H.カント(以下 HK)がプレントドルフとシュタデ、Sch (以下三人と呼ぶ)を招き、「作家同盟を中傷したと非難し」、第 1 次・第 2 次寄稿全部を含むアンソロジー原稿を「審査」のために作家同盟に渡すことを要求し、応じなければ「作家同盟除名」だと脅した。

[「描写」は 2 月に判明済みなのに 3 月 19 日の面談の際にはこの脅しを言わなかった。4 月 8 日のアンドレ通報(上記)により最後の詰めが可能と判断したのかもしれない。]

HK は、「作家同盟と文化省による審査後に初めて、原稿が出版のために自由にされ得るかどうかが決定され得る」と述べ、三人は「彼らの“自発的イニシアチブ”によって作家同盟規約に違反したと付け加えた」。

三人は「この件をこれ以上深刻化させないため、また共著者たちに今後の発展を閉ざさないために“断固とした抗議”を断念し」、「HK の要求に応じて原稿全部を彼に届けた。このことは「他のすべての共著者」にも三人から「通知された」。

Sch が An に「作家同盟での協議を準備すべきだと指摘した。念のため彼は、私 [=An] の物語は政治的にもちょっと挑発的だと言った」。

[この発言は、寄稿者との個別協議(11 節)が第 2 次寄稿者にも実施される場合に備えて An に気をつけろという助言である。もちろん Sch は An が IM とは知らなかった。]

この関連で Sch は私に 1975 年 9 月以後に寄稿を提出した以下の作家の名前[脚注 15 に記載]を挙げ、さらに「コトブス在住の某の名前を挙げたが、…聞き取れなかった。疑われないように聞き返さなかった。

[「某」とはケーラーである(脚注 16・17 とその本文参照)。]

三人が HK に出版社モルゲンとの交渉状況も知らせたところ、HK は「同社社長テンツラーに彼ら [=三人]との協議内容を知らせるだろうということを強く指摘した」[=HK がテンツラーに圧力をかけるという脅し]。

「この間に」三人と「テンツラーのさらなる話し合いが持たれた。同出版社原稿審査係主任[H.]ヘニガーも同席した。テンツラーは彼らに、[H.]カントから警告されたことを認めた」。

「テンツラーと[H.]ヘニガーは、彼らが必要と考える場合に寄稿者たちと話し合う権利を留保し、三人もその権利を認めた。

Sch は、「こうして今や組織者たちの本来の企画は“死んだ”」、今後のことは“[作家]同盟や[文化]省の人々と[出版社モルゲン社長]テンツラーの機嫌”にかかっている」と言った。

Sch が結論したように、出版社が「変更を必要」とみなした場合に「話し合う」ことを認めたことによって、検閲打破というアンソロジー企画は潰えた。

21. 作戦終了と次の対策

アンソロジー事件の結末について、「シュタジ大ベルリン支部第 XX/7 部」作成の「作戦資料“自主出版”の終了メモ」(1976 年 8 月 11 日)を紹介する(Plenzdorf 1995:305f.、番号は青木)。但し終了宣言は 9 月 2 日である(後述)：

「作戦的処理」の目的：①[SED 第 9 回党大会前にアンソロジーが独自出版社(Eigenverlag) [=作家たちの出版社]から出版されず、参加した作家たちがその設立企画を断念すること]、②アンソロジーが外国出版社に持ち込まれないこと、③アンソロジー作成が「SED 第 9 回党大会前に文化政策への公然たる攻撃 [=世論への訴え]のために」乱用されないこと。

作戦は大ベルリン支部第 XX 部が実施し、「大規模かつ調整された IM 投入並びにその他の作戦的手段・方法の投入によってアンソロジー組織者の計画と意図が適時に明らかにされ得た」。

作戦には「社会勢力[作家同盟幹部など]や国家要員[文化省幹部など]の幅広い組み入れ」を行なった。

その結果「“自主出版”の作戦的処理の目的が達成された」。「その際以下の成果が得られた：」

a)アンソロジー参加者たちとの「異なる意図や見解が差別化過程促進のために活用された」、

b)「他の[アンソロジー]参加者によって組織者たちに」、外国での出版および「アンソロジー計画についての公然たる議論」を断念させることに成功した、

c)原稿完成を「約 3 ヶ月」遅らせ、ようやく「1976 年 3 月」完成になった。

d)完成原稿は出版社モルゲンに持ち込まれたが、

「該当する諸規定」や「文化政策上の規定に応じて決定されねばならない」。

目的①にある SED 第 9 回党大会は 1976 年 5 月 18-22 日であり、それまでの決着が至上課題であった。その課題は 20 節のように 4 月末に事実上達成された。それでもシュタジは万全を期すために、同党大会直前にアンソロジー企画に対する「妄想症」的措置をとった(補注 7)。

成果 b)と c)は、圧力と組織者の判断の混合でもある。

シュタジにとって最も重要な成果は「公然たる議論」の阻止だろう。それに失敗すると、政権が深手を負うことになった。だがその成果は作戦の圧力にもよるが、そもそも「公然たる対決」の回避(8節)、寄稿者会合の「新聞声明」案の不発(4節)、ヴァルターの「広い世論の中での議論」提案不採択(17節)が示すように、組織者自身にも公然化の決断がなかった。西独での出版もそうであった。完成延期も圧力と同時に、組織者内の調整(9節)の結果でもあった。

1976年9月2日シュタジ第 XX 局長が、「作戦重点“自主出版”の中心的な政治的・作戦的処理は、政治的・作戦的目標の実現と企画の阻止、党の政策への妨害効果の防止の実現をもって終了した」と宣言した(Plenzdorf 1995: 307)。

アンソロジー企画は結局、党・文化省・作家同盟とシュタジの攻勢、とりわけ IM 投入と差別化・分解作戦の前に陣形を崩され、最後は組織者と出版社モルゲン社長への作家同盟副会長 H.カント(IM マーティン)の恫喝に屈し、「公然たる」闘いなしに企画を解消した。

企画は 20 年後に Plenzdorf(1995)として実現したが、そこには組織者たちの手元に残った第 1 次原稿(本人が掲載を拒否する U.カントを除く)と第 2 次のうちのヴァルター寄稿しか再現され得なかった(表 1)。

シュタジは、ミールケの新方針を適用して、アンソロジー企画関係者に「刑法措置」を適用せず、「より静かで隠蔽された抑圧」(3節)に成功した。

不発のアンソロジー「ベルリン物語」に代わり、対抗として構想された『物語る』(Vorstand 1976)をベルリン作家同盟幹部会が編集、出版した。主編集者はノイバート⁷⁰であった。

寄稿した 40 人のうち「圧倒的多数が SED に緊密」であっただけでなく、18 人は「MfS [=シュタジ]とも陰謀的に結びついていた」(Walther 1996:342)。但しノイバートは「本書について」と題する前書き(1976年1月3日付け)を書いただけなので、実際の寄稿は 39 人である。

本書は、作家同盟が「党大会アンソロジー」と呼称した(19節)ように、第 9 回党大会に向けた党賛美が意図された。ちなみに、アンナ・ゼーガースの寄稿表題は「私は党を、党は私を必要としている」である(本書詳細とその寄稿者のうちの IM については補注 6・6a 参照)。

アンソロジー事件終了の 2 ヶ月後、1976 年 11 月にはビアマン追放とそれへの抗議の大合唱が起こった。

そこでシュタジは 1977 年にも、「否定的・敵対的」な作家たちに対するさらなる「分解」作戦等を企画した。同年 12 月 27 日付けのシュタジ・ハレ県支部の文書によれば、12 月

22 日に第 XX/7 局長中佐ブロシェ(Brosche)が、「DDR 首都の文化創造者の否定的・敵対的核心」に対する次のような措置を説明した(Walther 1996:48)：

シュタジは SED 中央委から「文化創造者の否定的・敵対的人物グループの統一的なブロックの成立を防止するすべての措置の導入」を委託された：

- 彼らの「結び付きや計画、企図、チャンネルの暴露と記録」、「それぞれの敵対的目的の解明」、
- 「敵対的・否定的人物グループの差別化、分解のためのふさわしい攻勢的な措置の実現」、
- 「政治的に弱く動揺している者たち」の「敵対勢力からの分離」、
- 「刑法第 97, 98, 106, 107, 100, 213, 220 条による犯罪行為並びに文化法・契約法違反と犯罪の法規範の他の侵害」の「暴露と証拠集め」、[刑法条項概略は順に、スパイ活動、その協力、国家敵対的扇動、憲法敵対的結合、国家裏切り協力、外国違法滞在、国家秩序侮辱・報復主義等流布。]
- 「更に攻勢的な措置(買収、分解、世論に暴露、ふさわしい IM の選択等)」のための「処理される人物たちおよびその結び付きの人物像の完全な解明」、
- 「出版社や国家・社会の諸施設内」の「敵を有利にする環境や条件の除去」(一は青木)。

その際「否定的・敵対的人物グループ」として「とりわけ挙げられたのは、クリスタ・ヴォルフ、アレント(Erich Arendt)、ヘルムリン、クナート、プレントドルフ、シュレジンガー、フューマン、ディークマン(Friedrich Dieckmann)。ハレ・ライプツヒ地域から R.キルシュとチェホウスキー(Heinz Czechowski)であった」。

OV「妨害工作員」の対象であったハイムは、1976年ビアマン追放抗議声明に署名、1979年には外為法違反で罰金刑、同年6月「重大な規約違反」ゆえに他の8人の作家とともに作家同盟除名となった(Müller-Enbergs 2010: 548) [除名は5節参照]。

OV「道化師」の対象であったシュタデはビアマン追放抗議署名の翌1977年 SED 除名、作家同盟脱退、1978年[1979年]ハイム訴追抗議書簡署名、その後フランクフルト県の田舎に隠遁した(同前:1253f.)。

OV「へぼ作家」の対象であったシュレジンガーはビアマン抗議署名や1979年ハイム訴追抗議署名後、1980年に西ベルリンへ移住した(同前:1147)。

クリスタ・ヴォルフは上記のように、アンソロジーに当初「関心」を寄せ、再度の要請にもかかわらず、寄稿未完了を理由に参加を「回避した」。彼女夫妻は長年 OV「二枚舌」の対象であった。

作家同盟は新会長ヘルマン・カントのもと1979年に一挙に9人の作家を除名した(5節)。批判的作家たちへの出国・移住ないし国内亡命の促進などが続いた。その結果、シュタジは「“作家の圧倒的多数”が肯定的または少なくとも DDR に忠実である」と評価し、「1980年代初めに入るとともにシュタジは DDR 文学シーンの全般的な麻痺」を確認したと言われる(Walther 1996b:273)。

⁷⁰ Werner Neubert. 1966-74年「新ドイツ文学」編集長、1969-78年作家同盟書記や理事、1969-89年暗号名 W.ケーラー(Wolfgang Köhler)として IM(種類は IME)であった。1971年

ハインリッヒ・ハイネ賞ほか(Müller-Enbergs 2010:942; Walther 1996: 342)。

Müller-Enbergs (2010:1011)には、プレントドルフは SED 除名の記述はなく、OV も「自主出版」のみである。しかし上記のように彼は OV「劇作家」の対象でもあった。

OV「劇作家」は 1984 年 10 月 29 日に終了した。それまでに投入された IM は主なものだけでも 12 人に達した。アンソロジー組織者に加えて「ビアマン追放への抗議声明」の連帯署名の組織者でもあり、さらに西独紙誌で「敵対的な表明」を続けてきたためであった。しかし、IM 集中的投入と、シュタジ「大臣代理・中将ミッティヒ」([Rudi] Mittig)によって承認された処理構想に基づく政治的・作戦的処理の結果、プレントドルフの活動と彼の影響可能性および社会主義的国家・社会秩序に反対するその有効性が制限され、阻止された」ので、シュタジ大尉シラー (Hans Schiller) がこの OV を終了した。

これを紹介した Walther (1996:358f.)は、従来は作戦的処理の対象者の改心を目指したシュタジが、「作家たちがある程度穏健に行動」すれば十分であるという姿勢に転換したことを「明示している」と評した。

時代が再び変わり始めた。

22. おわりに

以上のように 1970 年代前半には 1960 年代後半の強い規制からの緩和という意味での「自由化」を強く感じ取る場面が文学界にも広く存在し、その「雰囲気」が検閲打破という当局にとっての重大な挑戦を生み出した。

この事実は、「自由化」が世界祭典の場だけではなかったことの証明でもあり、世界祭典ショーウィンドウ論を否定するとともに、ホーネッカー政権初期の特徴の 1 つを示す。

リュールの言う「三月革命前の息吹き」を思わせる「決心」は、作家たちの検閲挑戦の決心であり、アンソロジー組織者たちはすでに世界祭典開幕前にそうした決心を彼に語ったと推測される(青木 2020:8・9 節)。

作家世界の中に限られたとはいえ、人口 1600 万余りの中に 40 万余のソ連軍が駐留する衛星国かつ世界有数の国家保安網を誇る独裁国家の中で集団が検閲打破を試みたことが、「この時期」の「この雰囲気」を象徴的に示した。

その背景には知識人への「プラハの春」の強い影響とその鎮圧への不満があった。シュタジの 1969 年 1 月 24 日の調査報告(脚注 5)が示すように、文学者に限らず文化人・知識人、さらに一般市民にもプラハの春への共感強く、当時ライブチヒ文学研究所を処分された学生が本稿に多く出てきたこともその証左である(東独市民や知識人によるプラハの春支持と鎮圧抗議の実情については青木 2005:105-8 参照)。

また「この時期」は新しいホーネッカー政権の新機軸の時期であっただけでなく、祭典直前に発効した両独基本条約とその関連取り決めによって、西独市民の東独来訪が大幅に増え、彼らとの交流・議論が日常的に可能になった時期でもあった。一般市民だけではなく、研究者・ジャーナリスト、出版関係者も日常的に情報を得るとともに情報を伝えた。リュールもそうであった。東の市民も西のテレビを見ることに何の問題も無かった。

こうした「接近による変化」の効果はすでに最初のベルリン通行証協定実施(1963 年 12 月 19 日・翌年 1 月 5 日)以来、非常に顕著であった(青木 2018:5 節)が、それが大

規模化かつ恒常化した。

他方で、北ベトナムの対米戦争勝利やチリのアジェンデ政権成立、独立に成功した第三世界との連携進展などにより共産圏指導部に社会主義世界拡大の楽観的展望が広がった時期でもあった(青木 2019:12・13 節参照)。

但し祭典であれ文学であれ日常世界であれ、シュタジの作戦が途絶えることはなく、街中に警官の数は多く、当局の検閲を含む種々の形の言論規制がなくなることもなかった。

雰囲気の再変化の兆しはすでに 1975 年に表面化した。トークショー・アイントップ禁止や人気 No.1 のレフト・コンボの公演禁止などである。後者は、ビアマンの影響を受けたメンバー・パナッハ (Gerulf Pannach) の作詞が問題にされた (bpb 2019)。当局が政治的に活用するロックの場でさえ当局は歌詞に神経質になった。

1976 年秋のビアマン追放事件はアンソロジー事件終了直後に発生したから、当時アンソロジー事件を知る作家たちは、両者を連続した弾圧と受け止めただろう。

両者に直接の関連はないし、シュタジの担当部局も手法も異なり、社会的影響にも大きな差があった。アンソロジー事件は広く知られることも世論の反響もなかった。従って 50 数万人の青年が体験し、彼らが 1989 年に社会の中核を占めることになった世界祭典とも、また世論の広範な反発と不信を引き起こしたビアマン追放事件とも異なる。

アンソロジー企画の表面上の意義は、当時の自由化の「雰囲気」の強さと、それがどのように作家たちに伝播したかを示すこと、多くの関係者がビアマン追放抗議に参加したように「タブーなし」方針後退への闘争心を内に蓄えたこと、加えて、シュタジの新しい文化人対策の成功例として後世に陰險な手法の詳細な記録を残したことなどにとどまる。

しかし最高指導部にとってのアンソロジー事件の衝撃は、プラハの春を想起させただけに、小さくなく、作家・芸術家への警戒心を高め、ビアマン強行追放決断の一因になった可能性がある。その意味でも同事件はビアマン追放抗議の大合唱の下地を作ったと考えられる。

東独反体制研究の大著 Neubert (1998:240)も反体制辞典 Veen (2000:319)もアンソロジー発禁という事実を伝えただけで、集団的な検閲挑戦に触れていない。

その原因の 1 つは、シュタジが国民に全く知られないように事件を処理するという大きな成果を挙げたことであった。当局が我慢したのか、アンソロジー企画の参謀になったヴァルターさえ逮捕はむろん、出版社モルゲン原稿審査係解雇もこの時点ではなかった。

もう 1 つは、アンソロジー組織者が断固さや組織基盤、戦略戦術が不十分なまま、検閲という重大政治案件に挑戦し、その企画はドンキホーテ型企画でしかなかった。

もし組織者が世論への訴えを執行するか、当局が逮捕・有罪判決という従来通りの処理をすれば、西独マスコミが大きく報道し、作家やファンが声をあげ、特にテーマが検閲挑戦と分かれば一般国民の注目も大きく、当局が苦境に陥ったかもしれない。

折しも東独は国連加盟に向け国際自由権規約に署名し(1973 年 3 月)、アンソロジー事件の最中、1975 年 8 月 1 日にホーネッカーが署名した CSCE(全欧安保協力会議)ヘルシンキ宣言の全文が党機関紙ほかに掲載された。

ヘルシンキ宣言には東独を含む参加国間の「相互関係」

の10原則の1つとして「思想、良心、宗教、信条の自由を含む人権と基本的自由の尊重」(第7原則)が謳われ(詳しくは吉川 1994: 68-70)、フォローアップ会議がその履行と内容充実を推進した。

東独からの出国希望者たちは、作家たちと異なり、上記国際文書、とりわけヘルシンキ宣言を武器に出国・移住の自由を求めて内外世論に訴えるための公然たる出国運動を急発展させた(青木 2009)。1975年夏から出国申請した医師ニチューケー家は内科部長解任・減俸などの抑圧の中で申請を繰り返した末、1976年7月10日に彼を含むリーザ(ドレスデン県の小都市)の市民33人が「国連人権部門、CSCE 参加諸国代表者、各人権団体、世界世論」あてに移住権など「人権の完全な達成」を訴えた請願書(Petition)を送付した。これを西独マスコミはこれを「リーザ市民権イニシアチブ」と呼んだ。大衆運動としての出国許可要求の始まりであった(同前:3節)。

しかしアンソロジー組織者は「広い世論」への訴え策を採用せず「社会主義的反対行動」に限定した(17・18節)。

「広い世論」に訴えるには西のメディアに頼るしかなかったが、組織者がその決断をしなかった。それが、出国派の断固さとはむろん、ヘルムリンやハイムによるピアマン追放抗議声明のケースとさえ決定的な違いとなった。

アンソロジーは検閲への挑戦という真つ当かつ勇敢な企画であった。しかし惜しむらくは、組織者が、おそらく「この時期」の「この雰囲気」ゆえの実現可能性に頼るだけで、周到な戦略戦術や組織的基盤形成を考えず、自前の出版と言いつつその決意も確たるものではなかった。

アンソロジー事件終了直後に起こったピアマン追放をホーネッカー政権の初期文化政策の明確な転換点と見なすことが通例である。

確かにこの追放が「明確な」転換点であるとはいえ、すべてが1960年代後半に戻ったわけではない。両独関係改善と緊張緩和の時代にそれは不可能でもあった。また逆行現象がピアマン追放のみによって始まったわけでもない。

1975年にはレンフト・コンボやアイントップの個別の禁止があったが、アンソロジー企画もたらした最高指導部の警戒心はその比ではなかったはずである。それは人気の作家集団による検閲挑戦ゆえピアマンという邪魔な個人の存在よりも高い脅威であったはずである。

ピアマン追放は何度か策が講じられたが、実行されなかった。1976年11月の強行実施には、アンソロジー事件終了直後だけになおさら、それによる最高指導部の警戒心の高まりも影響したのではないかと思われる。

なお、経済面では文化政策と異なる動きがあった。ホーネッカーは政権掌握直後には農業以外の中小私営・半私営(後者は国家と委託契約または資本参加がある私営)へのいわゆる「ノックアウト」措置(国有化)を一気に推進した(1972年)。つまり私営タブーの方針であった。彼はその成果をただちにブレジネフに報告し、政権獲得支持への謝辞とした。

ところがその副作用(供給不足)ゆえに早くも1976年の

「私営の小売商店や飲食店およびサービス給付のための手工業企業の振興についての決定」により私営振興策に転じた(青木 1985:7-10)。

ちょうど文化の「タブーなし」発言の頃に私営タブーが発動され、「文化タブー」復活の時に小規模私営の復活・振興となった。そのため1970年代後半から1980年代初めの東独は再び共産圏随一の私営公認国となった。

研究滞在したベルリン経済大学社会主義政治経済学講座の会食が近所の私営レストランで開かれることに、私が「矛盾だろう」とからかったことがある。すると、「国営とは雰囲気比べものにならないから」という返事であり、その通りであった。ピアマン追放に強い怒りを示した友人もホーネッカー政権下の供給改善や文化・経済の規制緩和には満足していた。

しかし経済面も1980年代に困難が加速することになる。

(補注1)東独における書籍検閲の実態と制度

東独の書籍出版の仕組みには、出版社における原稿審査制度と、文化省出版・書籍販売本部⁷¹における印刷許可手続きと書籍販売統制があった。

前者では出版社の原稿審査係および外部原稿審査係が事実上の検閲を行なった。但し、東独当局は「検閲」という言葉を嫌い、751110情報も作家たちの「検閲」という言葉をすべてカッコ付きにした。

東独の検閲実態を当局に対して包括的に糾弾したのは、東独作家ヘルムリンのホーネッカー宛て「覚書」(Hermlin 1995:7ff.)であった。ヘルムリンの検閲実態批判は作家としての彼の経験と観察に基づくものであった。これはすでに青木(2020:5節)に紹介した⁷²。

ここでは、ヴァルターが原稿審査係として体験した検閲実態を補足したい(Walther 1996b)(途中コメント挿入)：

アンソロジー事件は「DDR 権力者が検閲制度を回避しようとするいかなる試みにもいかにまさに激しく反応するかを示した」。当局は長年かかって検閲のための「コントロール機関」を築き、それが「最小のイデオロギー的逸脱にさえ警報を発した。

そのための第1報知器は出版社に座っていた」。すなわち「原稿審査係たち」(Lektoren)である。原稿審査係は「できる限り早く原稿を検閲し、必要があれば変更を迫るべきであった」。同時に若い作家には、「最初のストーリースケッチから執筆を手伝った」。

[従って原稿審査係は作家にとって匿名ではなく、検閲係と相談係を兼ね、敵対関係とは限らなかった。これは功罪両面であり、若手への純粋の助言や、検閲通過限界の示唆あるいは下記のように検閲回避の助言もあったが、作家を事前相談の形で非敵対的に検閲通過の枠内に誘導したシステムでもあった。]

原稿が出版社内で承認されると、次に出版社は、「外部の鑑定人」[ヘルムリンが特に糾弾した「絶対的な匿名性」の「外部原稿審査係」]に依頼して、「政治

⁷¹ Hauptverwaltung Verlage und Buchhandel。同本部の東独建国以来の前身組織名は青木(2020:9)参照。

⁷² ヘルムリンは、戦前には共産主義青年団員として反ナチ闘士であり、当時の「同行者」としてホーネッカーと親しかった。他方、

本稿ではアンソロジー潰しに奔走した作家ヘルマン・カントとも親しかった。しかしヘルムリンはリベラルな考え方ゆえに地位を失ったこともある。ハイムの依頼を受けてピアマン追放抗議声明を組織し、多数の署名を得ることに成功した(詳細は青木 2020:5節)。

的疑惑がないことを証明しなければならなかった。

[ヘルムリンは「外部の鑑定人」の利用を知り批判したが、このような制度化を把握していなかった。IM アンドレ(作家ラウドン)は原稿審査係だけではなく「出版社鑑定人」(=外部鑑定人)の経験もあった(11 節)。]

外部審査も通過した原稿が「ようやく中央の検閲当局つまり“出版・書籍販売本部”へ行った」。1973-1989 年の同本部長は、[本稿にも登場する]ジャーナリスト・ヘプケ(Klaus Höpcke)であった。

彼は「書籍大臣」と呼ばれ、DDR では「彼の役所の許可印なしにはどの印刷機械も動き始めなかった」。「出版社の計画案」を見つつ、彼が印刷のための「紙の割り当て」を決め、それによって出版部数が決まった。

但し「抜け目ない原稿審査係たち」が上手な細工によって出版を実現させたり、印刷許可時点の許可基準が出荷前に厳しくなって印刷結果が廃棄になったりといった右往左往もあった。

シュタジは「ひそかに複製したテキストの危険の可能性の評価のために、路線に忠実な一群の作家や文学者をいわゆる専門家 IM(=IME)として保持していた」。彼らは「基本的にいかなる文章もまずは疑わしい」と見た。「とっくに亡くなっていた」ジョゼフ・コンラッドの作品さえ「ひょっとすると敵対的に解釈可能」であるが、「刑法上の重要性」はないという審査結果であった。

彼らは「無類の権力を大いに活用した」。例えば、叙情詩人ベルガー(Uwe Berger)は IM「ウーヴェ」(Uwe)として「1970 年から献身的に奉仕し」、「一連の有名な DDR 作家についての多くの弾劾」をした。

[これは検閲制度における漏れを防ぐいわば秘密検閲であり、本稿にあるようにアンソロジー事件でも活用された。]

IM ハンス(Hans)であったレクラム社長マークヴァート(Hans Marquardt は、フューマンの 280 ページのエッセーを 120 ページまで削った上、著者に「増補版を西側に提供しない約束」を強要した。

西側での刊行は「シュタジが塞ぐことのできない唯一の抜け穴であった」が、無名の作家に対して強硬に阻止しようとした例がある。女性詩人エルブ(Elke Erb) [アンソロジー第 1 次寄稿者]が西独ケルンの出版社から出版しようとしたケースである。

文化省出版・書籍販売本部長ヘプケが、その対策として作家同盟除名、外貨法違反訴追、国内での全般的な刊行禁止、アウフバウ出版社にある彼女の原稿の「コメントなし」の返送を 1985 年 1 月 7 日に立案し、シュタジ第 XX/7 局にも提示した。2 月 28 日に党とシュタジの同志たちはヘプケ提案に同意した。

ただしこのケースでは「この協奏作戦はすぐに行き詰まった」。「幹部たちがあまりに明白な抑圧にひるん

だ」ためであった。

このエルブ事件は 1985 年だから、時代はすでに大きく変化し始めていた。

BMiB(1985:1536)は、すでに大量に西独に出国した東独作家・研究者から実態を聴取することができたはずだが、検閲については単に制度の記述に終わった。1980 年代半ばのそれを次のように説明した:

第 1 に、幹部政策:文化関連の機関や施設、マスメディア、出版社、映画、作家・芸術家の団体などの「決定に関わる全ポスト」を忠実な SED 党員が占める。

第 2 に、出版規制。その手段:SED のメディア政策と、すべての出版への国家によるライセンスと印刷許可の義務づけ(その際、新聞雑誌は閣僚会議議長付属新聞雑誌局、書籍は文化省出版・書籍販売本部、映画は文化省映画局が担当)、西側刊行物等の輸入制限、郵便や小包の検査、「政治的な刑法」。

第 3 に、イデオロギー的な「批判と自己批判」、つまり自主検閲。

出版・書籍販売本部は、出版社にライセンスを与え、指導し、分業させ、年次・展望計画を指導・調整し、計画達成に向け監督し、出版社の原稿とライセンスのない出版社の製品を審査して印刷許可を与えるという任務を負っていた(BMiB 1985:1430)。

出版社には出版・書籍販売本部からライセンス番号(Lizenznummer, VLN)が割り当てられた。例えばマルクス・エンゲルス全集やホーネッカー演説・論文集などを出版したディーツ出版社(Dietz Verlag)のそれが「1」、経済出版社(Verlag Die Wirtschaft)は「122」であった⁷³。

さらに出版物は個々に印刷許可番号(Druckgenehmigungsnummer)を得なければならなかった。例えば経済出版社の「経済レキシコン:国民経済計画化」⁷⁴の奥付には「ライセンス番号 122;印刷許可番号 195/128/80」とあった。同社出版物には前者を省略し後者のみの表記もあった⁷⁵。

他方、同じく経済辞典でもディーツ社のそれ⁷⁶にはライセンス番号しかない。同社の他の出版物も同様である。但し文化省の組織再編の頃に出版の同社のある経済書⁷⁷には、ライセンス番号として「1-ES6B6」という表記があった。

アンソロジー原稿が持ち込まれた出版社モルゲンのライセンス番号は 48 であった。同社の表記例は「ライセンス番号 48-48/1/74」である⁷⁸。これはライセンスと印刷許可の一体表示である。

両番号とも表示なしに「原稿として印刷」とある出版物もあった。このケースの私が知る例⁷⁹は書籍として販売された。東独の科学知識普及協会である URANIA の出版だからかもしれない。東ベルリン・シオン教会牧師館地下で印刷・発行された「環境新聞」(Umweltblätter)は「教会内情報のためのみ」(Nur zur innerkirchlichen Information)と表記され、その枠内では合法であった。

⁷³ 東独出版物奥付の LSV(4 桁数字)は、書籍分類番号(Literatursystematik für Verlagszeugnisse)である。

⁷⁴ Lexikon der Wirtschaft: Volkswirtschaftsplanung (1980)

⁷⁵ 例えば H. Rost u.a. (1985) Planungsordnung 1986-1990.

⁷⁶ 例えば Wörterbuch der Ökonomie Sozialismus(第 5 版)。

⁷⁷ W. Horn (1963) Die Errichtung der Grundlage des Sozialismus in der Industrie der DDR.

lismus in der Industrie der DDR.

⁷⁸ Agsten u.a. (1974) LDPD auf dem Weg in die DDR.

⁷⁹ Kuciak u.a. (1971) Die kleinen und mittleren Betriebe im Prozeß der Konzentration und Kooperation in der Industrie der DDR, Urania.

補注2 「政治的・イデオロギー的確信」に基づき長期かつ積極的にシュタジ非公式協力者(IM)であった東独作家

	本名	暗号名	IM 期間
1	Horst Bastian	„Hartmut Möwe"	1958-1986
2	Uwe Berger (ベルガー)	„Uwe" (ウーヴェ)	1969-1986 (恐らく 1989 まで)
3	Günter Görlich (ゲールリッヒ)*	„Student"/„Wegener"/ „Herrmann" (ヘルマン)	1961-1976
4	Gerhard Holtz-Baumert (ホルツ=バウムート)*	„Villon" (ヴィヨン)	1957-1981
5	Hermann Kant (H.カント)	„Martin" (マーティン)	1963-1976
6	Jan Koplowitz	„Pollak"	1970-1989
7/8	Claus und Wera Küchenmeister	„Kaminski I und II"	1964-1979
9	Hasso Laudon (ラウドン)	„Andre" (アンドレ)	1961-1983
10	Waldtraut Lewin	„Wald"	1975-1988
11	Dieter Noll	„Schreiber"/„Romanze"/ „Georg"/„Klaus-Dieter"	1954-1989 (中断あり)
12	Helmut Preißler	„Anton"	1960-1971 (恐らくより長期)
13	Wolfgang Tilgner	„Pergamon"	1968-1989
14	Martin Viertel *	„Kurt"	25 年間
15	Paul Wiens (ヴィーンズ)	„Dichter" (詩人)	1962-1982

(注) * Walther (1996:647ff.) がケーススタディ。「恐らく」は Walther の推測、ほかはシュタジ文書に拠る。
本名・暗号名にカタカナを付記した6人が本稿登場人物。(出所) Walther (1996:647)。

(補注3) 作家に対するシュタジの作戦の種類と暗号名
(1970-1980年代)

作家の姓、名	作戦種類 “暗号名”
Bartsch, Kurt	OV “Ribagera” (リバゲラ)
Bartsch, Wilhelm	OPK “Kumpel” (鉞員)
Becker, Jurek	OV “Lügner” (うそつき)
Bernhof, Reinhard	OV “Poet” (詩人)
Biermann, Wolf	ZOV “Lyriker” (抒情詩人)
Böthig, Peter	OPK “Schaden” (障害)
Braun, Volker	OV “Erbe” (相続人)
Braun, Günter & Johanna	OPK “Zwilling” (双子)
Cibulka, Hanns	OPK “Swantow”
Czechowski, Heinz	OV “Literat” (三文文士)
de Bruyn, Günter	OV “Roman” (ロマン)
Dieckmann, Friedrich	OV “Schnittpunkt” (交点)
Dyrlich, Benedikt	OV “Poet” (詩人)/OPK “Lyriker” (抒情詩人)
Eckart, Gabriele	OV “Ecke” (角)/OPK “Kontra” (コントラ)
Emersleben, Otto	OPK “Reise” (旅行)
Endler, Adolf	OPK “Adolf” (アドルフ)
Erb, Elke	OV “Hydra” (ヒドラ)
Faber, Elmar	OPK “Spieler” (プレーヤー)
Faktor, Jan	OPK “Ausländer” (外国人)
Faust, Siegmur	OPK “Mephisto” (メフィスト)/ OV “Literat” (三文文士)
Fries, Fritz Rudolf	OV “Autor” (作家)
Frühauf, Klaus	OV “Pumpe” (ポンペ)

Fuchs, Jürgen	ZOV “Opponent” (反対派)/OV “Pegasus” (ペガソス)
Fühmann, Franz	OV “Filou” (いかさま師)
Gabrish, Anne	OPK “Fisch” (魚)
Gerlach, Harald	OPK “Dramaturg” (文芸部員)
Gilsenbach, Reimar	OV “Schreiber” (書き手)
Gollin, Annegret	OV “Attacke” (攻撃)/OV “Transit” (トランジット)
Gosse, Peter	OPK/OV “Gully” (排水孔)
Grüning, Uwe	VAO/OV “Ikarus I/II” (イカロス I/II)
Häfner, Eberhard	OV “Deuter” (説明者)/OPK “Liemalsfried” (リーマルスフリ ート)
Havemann, Robert	OV “Leitz” (ライツ)
Heiduczek, Werner	OV “Schreiber” (書き手)
Henniger, Heinfried	OV “Verleger” (出版者)
Hermlin, Stephan	OV “Leder” (革)
Hilbig, Wolfgang	OPK “Literat” (三文文士)
Hübner, Uwe	OV “Poet” (詩人)
Jakobs, Karl-Heinz	OV “Besserwisser” (独りよがり)
Jarmatz, Klaus	OPK “Literat” (三文文士)
Jendryschik, Manfred	OV “Federkiel” (羽根ペン)
Jentzsch, Bernd	OV “Prosa” (散文)
Kirsch, Rainer	OV “Lyrik” (抒情詩)/OV “Atelierkreis” (アトリエグループ)
Kirsch, Sarah	OV “Milan” (ミラン)
Kirsten, Wulf	OV “Lektor” (原稿審査係)

Klein, Olaf Georg	OV “Querulant”(不平家)
Klier, Freya	OV “Sinus”(空洞)
Koch, Jurij	OPK “Träumer”(夢想家)
Kolbe, Uwe	OV “Poet”(詩人)
Krawczyk, Stephan	OV “Sinus”(空洞)
Kunert, Günter	OV “Zyniker”(皮肉家)
Kunze, Reiner	OV “Lyrik”(抒情詩)
Lambrecht, Christine	OPK “Stier”(雄牛)
Linke, Dietmar	OV “Kreuz I/II”(クロス I/II)
Loest, Erich	OV “Verschwörer”(共謀者) /OV “Subjekt”(やつ) /OV “Autor I/II”(作家 I/II)
Lorek, Leonhard	OPK “Feder”(羽毛)
Maron, Monika	OV “Wildsau”(雌イノシシ)
Martin, Brigitte	OPK “Ballon”(気球)
Martin, Christian	OPK “Feder”(羽毛)
Maaß, Ekkehard	OV “Keller”(地下室)
Matthies, Frank-Wolf	OV “Reptil”(は虫類)/OV “Wolf”(狼)
Mickel, Karl	OPK “Bertold”(バートルト)
Moog, Christa	OV “Dichter”(詩人)
Mucke, Dieter	OV “Schreiber”(書き手)/ OV “Poet”(詩人)
Müller, Armin	OPK “A2/IX/569/79”
Neumann [Härtl], Gert	VAO “Anthologie”(アンソロジー) /OV “Anthologie II”(アンソロジーII)
Opitz, Detlef	OV “Georg”(ゲオルク)/OV “Otter”(カワウソ)
Pannach, Gerulf	OV “Chanson”(シャンソン)
Plenzdorf, Ulrich	OV “Dramatiker”(劇作家)
Poche, Klaus	OV “Buch”(本)
Poppe, Ulrike & Gerd	OV “Zirkel”(サークル)
Püschel, Walter	OV “Lektor”(原稿審査係)/ OV “Zersetzer”(破壊者)
Rathenow, Lutz	OV “Assistent”(アシスタント)
Reimann, Brigitte	OV “Denker”(思想家)
Rosenthal, Rüdiger	OPK “Hase”(野ウサギ)
Schacht, Ulrich	OV “Vereinigung”(結合)
Schädlich, Hans Joachim	OV “Schädling”(害虫)
Scheer, Udo	OV “Mentor”(助言者)
Scherzer, Landolf	OV “Sophist”(詭弁家)
Schlesinger, Klaus	OV “Schreiberling”(へぼ作家)
Schneider, Rolf	VAO “Jobber”(仲買人) /OV “Germanist”(ゲルマニスト)
Schreiter, Friedemann	OV “Dramaturg”(文芸部員)
Schreyer, Wolfgang	OV “Sand”(砂)/OV “Wühler”(扇動者) /OV “Roman”(ロマン)
Schubert, Dieter	OV “Schreiberling”(へぼ作家)

Schütz, Helga	OV “Jette”(イエツテ)
Schwenger, Hannes	OV “Kontakt”(接触)
Selber, Martin	OV “Taste”(キー)
Seyppel, Joachim	OV “Übersiedler”(移住者)
Stade, Martin	OV “Narr”(道化師)
Steinberg, Werner	OV “Ararat”(アララト)
Kachold-Stötzer, Gabriele	OV “Toxin”(毒素) /OV “Kapitän”(船長) /OV “Medium”(媒体)
Tetzner, Gerti	OV “Karen”(カレン)
Völlger, Winfried	OV “Feder”(羽毛)
Walther, Joachim	OV “Schmetterling”(蝶) /VAO “Lektor”(原稿審査係)* /OV “Verleger”(出版者)
Waterstradt, Berta	OV “Waterstradt”(ヴァタースト タット)
Wegner, Bettina	OV “Schreiberling”(へぼ作家) /OV “Eintopp”(アイントップ)
Wiens, Maja-Michaela	OV “Traum”(夢想)
Wolfram, Michael	OV “Literat”(三文文士)

(注)ハイムやヴォルフ夫妻、ヤンカ OV(3 節)、ヘートル(妻) (14 節(4))への作戦が欠けている。OPK や OV、VAO など作戦種類の意味は下記略語欄参照。作戦名が多義の場合、作戦内容により訳語変更が必要かもしれない。* OV “Lektor”という記述もある(補注 4 や脚注 14 など)。(出所)Walther 1996:377ff.

(補注 4) 作家へのシュタジ OV(作戦事案)の刑法容疑例

刑法第 99 条(国家裏切りの情報伝達) 刑量 2-12 年

OV「へぼ作家」, „Schreiberling”: 対象 Klaus Schlesinger と Bettina Wegner、期間 1974-1983 [開始時期について脚注 28 参照]

刑法第 100 条(国家裏切りの情報活動) 刑量 1-10 年

OV「独りよがり」, „Besserwisser”: 対象 Karl-Heinz Jakobs、期間 1978-1981

OV「詩人」, „Poet”: 対象 Uwe Kolbe、期間 1983-1989

OV「害虫」, „Schädling”: 対象 Hans Joachim Schädlich、期間 1977-1984

OV「へぼ作家」, „Schreiberling”: 対象・期間前掲

刑法第 106 条(国家に対する敵対的煽動) 刑量 1-10 年

OV「独りよがり」, „Besserwisser”: 対象・期間前掲

OV「劇作家」, „Dramatiker”: 対象 Ulrich Plenzdorf、期間 1977-1984

OV「いかさま師」, „Filou”: 対象 Franz Fühmann、期間 1977-1984

OV「排水孔」, „Gully”: 対象 Peter Gosse、期間 1976-1977

OV「ヒドラ」, „Hydra”: 対象 Elke Erb、期間 1981-1988

OV「原稿審査係」, „Lektor”: 対象 Joachim Walther、期間 1969-1971

OV「詩人」, „Poet”: 対象 Uwe Kolbe、期間 1983-1989

OV「散文」, „Prosa”: 対象 Bernd Jentzsch、期間 1976-1977

- OV「害虫」, „Schädling”: 対象 Hans Joachim Schädlich、
期間 1977-1984
- OV「交点」, „Schnittpunkt”: 対象 Adolf Dresen と
Michael Hamburger と Friedrich Dieckmann、期間
1976-1986
- OV「へば作家」, „Schreiberling”: 対象・期間前掲
- OV「詭弁家」, „Sophist”: 対象 Landolf Scherzer、期間
1979-1982
- OV「出版者」, „Verleger”: 対象 Heinfried Henniger と
Joachim Walther、期間 1975-1989

刑法第 107 条(憲法に敵対する結合) MfS 用語では「国家敵対的グループ形成」、量刑 2-8 年

- OV「へば作家」, „Schreiberling”: 対象・期間前掲
- OV「出版者」, „Verleger”: 対象・期間前掲

刑法第 219 条(不法な結合をすること) 量刑 5 年以下または罰金

- OV「ヒドラ」, „Hydra”: 対象・期間前掲
- OV「詩人」, „Poet”: 対象・期間前掲
- OV「へば作家」, „Schreiberling”: 対象・期間前掲

刑法第 220 条(公然たる軽蔑)[国家中傷] 量刑 5 年以下または罰金

- OV「詩人」, „Poet”: 対象・期間前掲
- OV「夢想」, „Traum”: 対象 Maja-Michaela Wiens、期間
1986-1989

(注) 条項内は OV 名アルファベット順に青木が変更。リストは刑法の適用例であり、作家への OV 網羅ではない。刑法条文略称訳は山田晟 1982(下巻)に。(出所) Walther (1996:365ff.)

(補注 5) ZAIG(中央評価情報グループ)とその「情報」書式

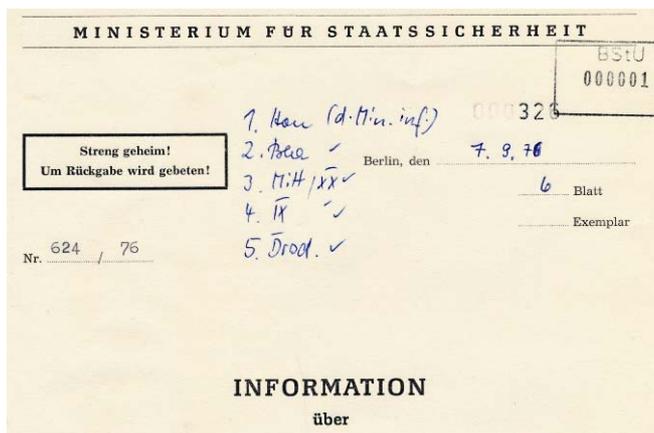
シュタジ本部の ZAIG(中央評価情報グループ)は、1965 年に ZIG(中央情報グループ)を改組し、評価と情報の統一体制として誕生した。シュタジの情報収集・分析の中枢であった。

1953 年 6 月 17 日の「人民蜂起」(いわゆるベルリン暴動)の最中に設置された「情報グループ」が改組されて「情報部」になり、それが 1959 年に ZIG に改称された。1960 年にその下部組織として県支部と本部各局に「情報グループ」が設置された (Engelmann 2016:386f.; Münkler 2015:97)。ZIG など前身組織の文書も ZAIG が継承して保管したものは BStU(シュタジ文書保管庁)では ZAIG 文書に分類されている。

ZAIG が国家保安省の名で党中央などへ発信した「情報」(INFORMATION)シリーズの書式は、シュタジの内部向け文書と異なり、シュタジ文書の中で独特であった。

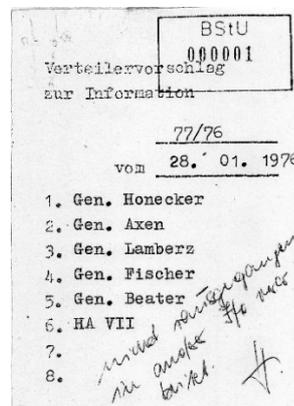
図 7 のように、第 1 ページは、あらかじめヘッダーを印刷した用紙にタイプされた。「MINISTERIUM FÜR STAATSSICHERHEIT」(国家保安省)というヘッダーが上下にラインを付けた大文字で印字され、その左下に「極秘! 要返却」が四角枠の中に、その下に「Nr. / 」(情報番号/年次)欄がある(Nr. = No.)。四角枠の右横に「ベルリン, den(日付)」, その下に「情報」のページ数と作成部数の欄がある。配布先は、四角枠と日付等の間に手書きで、または別の紙片(図 8)にタイプで記載された。

図 7 シュタジ ZAIG「情報」の書式



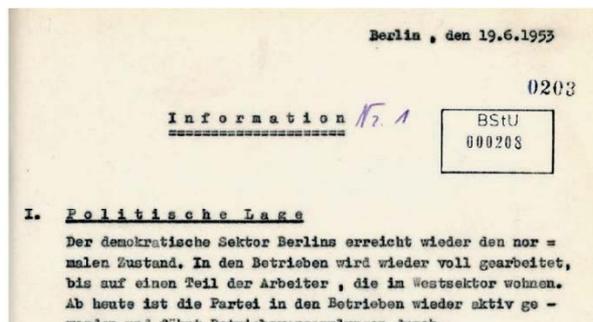
(注) ZAIG 情報 No.624/76 冒頭。テーマは、東独出国運動の先駆「リーザ市民権イニシアチブ」(青木 2009 参照)。手書き部分が配布先。ここでも第 1 配布先「Hon」(ホーネッカー)には「大臣が通報」(d. Min. inf.)とある。「000001」は BStU による頁番号。(出所) BStU ZAIG 2557:Bl.1 (1976 年 9 月 7 日)

図 8 シュタジ ZAIG「情報」配布先(別紙の場合)



(注) ZAIG 情報 No.77/76 から。テーマはやはり出国運動。配布先は小さな別紙にタイプ。(出所) ZAIG 2477:Bl.1 (1976 年 1 月 28 日)。

図 9 「情報グループ」最初の書式



(注) Information シリーズの No.1 (1953.06.19)。「Nr.1」と手書き (出所) Münkler 2015:96。

751110 情報の冒頭(Plenzdorf 1995:222)の記述は図 7 と同じ形式であり(但しヘッダーの単語先頭文字以外を小文字化)、日付欄は「Berlin, den 10. Nov. 1975」、情報番号は「Nr. 788/ 75」とある。そこでは情報のページ数、作成部数が省略されているが、同書表紙の写真(図 4)に文書ページ数「8 枚」(8 Blatt)、作成部数「7 部」(7 Exemplar)とある。部数より配布先数が多い。図 7 の場合は作成部数が記入されていない。

この書式は、私の手元にある原資料では、ZAIG の前身

である ZIG 以来変わっていない。最初の組織「情報グループ」の情報第 1 号(図 9)はこの書式をまだ使っていない。「ベルリン暴動」勃発の翌々日である。

シュタジの内部向け文書では、部局名と日付がその都度タイプされ、大臣命令も同様だが、機密書類番号が入った。

(補注 6) 対抗策『ベルリンの作家たちが物語る』

対抗策としてとして企画されたベルリン作家同盟幹部会編『ベルリンの作家たちが物語る』(Vorstand 1976)の執筆者は表 4 のとおりである。

本書を 751110 情報はアンソロジー阻止作戦の際の「否定的」でない寄稿者たち(表 1 の#と Walther 以外の 11 人と場合によりシュタデも)への対抗策としてこれを提案した(7節)。しかし本書に寄稿したのは 11 人のうちフリースと U. カントのみであり、寄稿表題は異なる。

表 4 『ベルリンの作家たちが物語る』執筆者

姓	名	生年	表題
Abusch	Alexander	1902	Ein Junge wird Kommunist
Baierl	Helmut	1926	Die Drei
Bastian	Horst	1939	Selbstverständigung
Berger*	Uwe	1928	Frühschicht
Braun	Volker	1939	Die Tribüne
Eckart	Gabriele	1954	Tagebuchnotiz, 28. 11. 73
Edel	Peter	1921	Erfahrung für immer
Fries(フリース)	Fritz Rudolf	1935	Zbigniew und wir
Görlich*	Günter	1928	Der Entschluß
Gorrish	Walter	1909	Der Mann im Lodenmantel
Hauptmann	Helmut	1928	Die Reserve des Generals Panfilow
Hauser	Harald	1912	Rups Geheimnis
Hermlin	Stephan	1915	Mein Friede
Herzfelde	Wieland	1896	Wie Atem und Arbeit ...
Holtz-Baumert*	Gerhard	1927	Der lange Ritt zur Schule
Jakobs	Karl-Heinz	1929	Die Wüste am Fuße des Kopet Dag
Kahlau	Heinz	1931	Von jedem
Kant*	Hermann	1926	Zu den Unterlagen
Kant(U.カント)	Uwe	1936	Brief an den Genossen Ernst L.
Kaufmann	Walter	1924	Das Fahrrad
Kirsch	Sarah	1935	Am Himmel ordnen sich die Vögel ...
Knobloch	Heinz	1926	Bilder von den Gleichgesinnten
Kohlhaase	Wolfgang	1931	Filmmotiv
Koplowitz*	Jan	1909	Die Schnürsenkel und die Würde
Kraft	Ruth	1920	Wir alle 104
Kraze	Hanna-Heide	1920	Das tägliche Leben
Lüdemann	Hans-Ulrich	1943	Der Thälmann-Bataillonier 270
Müller	Jupp	1921	Persönliche Bilanz
Mundstock	Karl	1915	Einstand

Neubert*	Werner	1929	まえがき
Noll*	Dieter	1927	Monolog
Panitz	Eberhard	1932	Nachträgliches zur „Sophia“
Renn	Ludwig	1889	Wie die Partei zu mir kam
Schermer	Erhard	1929	Der Wahrheit Wiederkehr
Schulz	Jo	1920	Blumen für Kawollnick
Seghers	Anna	1900	Ich brauche die Partei. Die Partei braucht mich
Steineckert	Gisela	1931	Gruß an einen Genossen
Stern	Kurt	1907	Unbegreiflich Begreifliches
Strittmatter	Erwin	1912	Vorspiel
Wogatzki	Benito	1932	Karls Auftrag

(注)生年順を姓順に変更。*長期かつ積極的 IM(補注 2)であった(7人)。(出所) Vorstand (1976:Inhalt)、*は青木が付記。

執筆者 40 人のうちノイバート(Neubert)は主編集者かつ前書き「本書について」(S.5)のみの執筆であり、残る 39 人が本文の寄稿者である。「本書について」によれば:

本書において「重要なことは、社会主義共同体の力に関する[個人ごとに]多様に経験された知識」である。

本書収録の寄稿は、「本書について」を別にして、作者の生年順に収録され、目次には各生年が付記された。生年順によって「本書が意図する歴史的時期を最も良く示唆する」ためである。

本書の意図は、「わが国における革命的労働運動の統一形成[=1946年 SED 創立]後 30 年に、ドイツ社会主義統一党第 9 回党大会の年に、我々についての、ソ連との固い同盟における今までのおよび未来への歴史的道筋についての読本」である。

だから 1889 年生まれの最高齢から 1954 年生まれまで揃えた。

本稿の登場人物としては、アンナ・ゼーガースやヘルムリン、ヘルマン・カント、ウーヴェ・カント、ホルツ=バウハート、コールハーゼ、ゲールリッヒ、ヤコプス、パニッツ、フリース、ザラ・キルシュ、フォルカー・ブラウンが寄稿した。

40 人の執筆者のうち 18 人が「MfS と陰謀的に結びついていた」(Walther 1996:342)。そのうち表 4 に*を付した作家 7 人が、信念に基づき長期かつ積極的にシュタジ IM(密告者)になった作家(補注 2)である。

Walther(1996)には残る 11 人のシュタジ協力者のリストはないが、同書の中を探すと殆どを見つけることができる。またシュタジが IM 候補にしたが、成功しなかった作家も寄稿した。クノプロッホ(Heinz Knobloch)である。

11 人の 1 人、バイアール(Helmut Baierl)は、1955-57 年ライプツヒ文学研究所に学び、1959-67 年ベルリーナー・アンサンブルの劇作家のあと作家として独立し、1969 年以来 SED ベルリン県指導部員(その前 2 年間は同候補)、同じく芸術アカデミー会員、1974 年から同副会長など要職に就いたが、1968 年からまず「公的情報源」である KP(接触パートナー)、非公式情報源 IM「カネ」(Flinz)、翌年から GMS(社会的保安協力者)を兼務した(Müller-

Enbergs 2010:58f.; Walther 1996:636)。

11 人の中で最も興味深いのは、シュタジの隠れ家に生まれ、模範児から早熟の女性詩人となったエックートの、IM 志願と IM 離反、東独発禁本の西独出版、西独移住という人生である(補注 6a)。

ちなみに4番目に高齢のアブシュ(Alexander Abusch)は東独閣僚会議議長代理(かつベッヒャー後継の文化相)として1963年12月5日に当時の西ベルリン市長ブランドのもとへ、同市民のクリスマスのための東独親戚訪問提案を持ち込み、第1次ベルリン通行証協定の表向きのきっかけを作り、その成功がブランド東方政策の基礎の1つになった(青木 2018:47)。

(補注 6a) 『物語る』寄稿の早熟女性詩人エックート(Gabriele Eckart):体制の寵児・IM から離反・底辺記録者へ

IM11人(補注 6)のうちの1人、早熟の女性詩人ガブリエーレ・エックート(Gabriele Eckart, 1954-)は早くも18才、「シヨル兄妹」名称EOS生徒(日本ではほぼ高校生)の時にIM勧誘に応じ、自らドイツの有名詩人「ヘルダーリン」(Hölderlin)を暗号名に選んだ。彼女をIM候補に提案したのは生徒の文芸サークルを世話していたFIM(指導IM「店主」(Kramer)であるが、実は彼女の家はシュタジ郡支所の隠れ家(konspirative Wohnung)に利用されていた。

シュタジ・カールマルクスシュタット県支部第XX/7部中尉ハイデル(Heydel)によると、「特に文芸志向の労働者や若い作家活動共同体、ドイツ作家同盟、その他の文化・芸術創造者の分野におけるイデオロギー的地下にいる敵を有効に解明し処理し抹殺する必要性」から彼女をIMに勧誘した。換言すれば、そのような「イデオロギー的地下」活動の存在という「作り話」(12節)で彼女をIMに仕立てた。

彼女は1972年秋に東ベルリンのフンボルト大学マルクス・レーニン主義哲学部に進学した。1973年には世界青年学生祭典と第7回作家会議の対策のためにシュタジ本部第XX/7局に貸し出され、特にザラ・キルシュ監視が要求された。彼女はすぐにザラと「非常に心からの関係」になったと通報したが、同年10月にはザラが距離を置いたと通報した。翌年彼女は同局のIMに移籍し、指導将校は大尉ギュトリング(Peter Gütling)となった。

1976年にシュタジは「従来将来性豊かな、あまりおしゃべりでないIMV[エックート]の憂慮すべき変化に気付き」、IM「詩人」(本名ヴィーンズ Paul Wiens)に調べさせたところ、ヴィーンズは、彼女が「ビアマン追放への抗議決議を書くつもりだと通報した」。

[卒業したばかりの彼女のシュタジ離れにはビアマン追放も影響したようであるが、Jäger(1985:1226)によれば、彼女はすでにフンボルト大学で哲学を学び始めると「失望」と「袋小路」に陥り、1974年の詩集では「若干の反抗的な言葉を敢えて使った」。少女時代にはその詩によって「公式の文化政策の寵児」(同前)であった彼女がどう変わったかは下記。]

1980年6月27日にギュトリングが彼女のIM終了報告を書いた。1982年2月には彼女に対するシュタジ・ブランデンブルク郡支所がOPK「コントラ」(Kontra)を導入した。当時彼女はポツダム近くの果樹園地帯ヴェルダー(Werder)でFDJの中央青年プロジェクト「ハーフェル果物」に文化委員として参加し従業員[などの]インタビューにより

著書「私のヴェルダー記録」(Mein Werder-Buch)を作成していたからである。

彼女が同支所の管轄地域から引き上げたという理由でこのOPKは1984年1月に終了したが、その終了報告には彼女は「硬化した否定的・敵対的態度を持ち」、党やその幹部の「指導的役割を侮辱」し、「西の生活様式の賛美」をしているとあった。

それでも上記の著書は「意味と形式」誌1984年2号[など]に一部が掲載された。しかし同年6月に本としては発禁となり、出版社モルゲンにあった原稿はボツになった。発禁決定は出版・書籍販売本部長ヘプケによる。

彼女は西独ケルンでそれを出版した(Eckart 1984)。この本は、出版・書籍販売本部の調査によると、「新生活出版社によって1982年に却下された原稿第1版に基づいて」いた。「DDR 著作権事務所長」によると、彼女は西独出版社への著作権譲渡許可を申請していなかった。

彼女は「他の妨害」もあり1984年7月にホーネッカー宛ての手紙で出国を申請したが、「第XX/7局の委託」を受けた関係者の圧力を受け1985年3月に申請を取り下げた。

ヘプケや作家同盟第1書記G.ヘニガーは、彼女を「殉教者」にしないために、西独での出版について処罰を提案せず、作家同盟除名と同時に西独移住を認めるという主張をした。シベリア研究滞在案もあった。他方第XX/7局は1985年彼女にOV「角」(Ecke)を開始し、慰撫工作として「彼女に若干の西側旅行を保証した」。

彼女は1986-87年西独・米国に滞在し、1987年に西独に移住し、その後米国に居住している。

以上はWalther 1996:707ff.; Müller-Enbergs 2010:270)による。後者ではシュタジの作戦名がOPK「角」(Ecke)とOV「コントラ」になっている。

彼女の西独・米国滞在と移住実現は、第XX/7局案とヘプケ・ヘニガー案の両方が実施されたことになるが、詳細は不明である。彼女の出国申請は1984年春のいわゆる「出国の波」(壁建設以後最大規模の出国許可)の直後であり、フリードリヒ通り駅(東ベルリン)などを行列して出ていく人々のニュース映像を見た多くの市民が「出ていくか、残るか」思い悩んだ。1987年は親戚訪問名目の西独訪問許可が緩和され大量の東独市民が西独を訪れた年であった。

Eckart(1984)をめぐる事情については東独出身で、東独文化政策の専門家による書評Jäger(1985)が詳しい(著者については青木 2020:16 参照)。その情報の多くはエックート自身からの聞き取りだろう。以下のような:

彼女は1976年学業を終え「哲学学士」となり、「世間知らずの理論家あるいはプロパガンダの高級専門家として働く選択肢があった」。

しかし彼女はすでに「若干の反抗的な言葉」を使うなど少女時代とは変化し、社会の現実を知るために「底辺での経験」を持つとして[ポツダムの西にある]果樹園地帯ヴェルダー(Werder)で補助労働者になった。その地で1980年1月から1年間FDJの文化活動の仕事を引き受けた。

[文化活動の様子はEckart(1984)の前書きに詳しい。これは東独版のために書かれた前書きの再録である。]

その地では老いも若きも彼女と語り合おうとしたので、「ヴェルダーの記録」(Werderbuch)を作ろうと、カセットレコーダーを持ち歩くことになった。彼女は「ヴェルダーの記録」を、

付き合いのある新生活出版社(FDJに近い)ではなく[実は上記のように拒否されたので]、出版社モルゲンに持ち込んだ[そして採用された]。

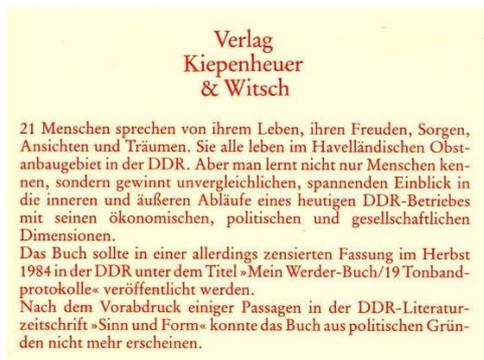
彼女は「原理的な反対者あるいは脱落者」ではなく、「批判的ではあるが全体としては[体制に]忠実な本を作るように心がけた」。だから話し相手には FDJ や SED の幹部も加え、「DDRの何が気に入っているか」という質問もした。しかし同時に彼女は「所与の限界の中で、オープンかつ誠実な本」を作るために、相手の「[憂鬱などの]状況について話すように[相手を]励ました」。

背景には園芸生産協同組合化(GPG)への不満や、「経験者の反対を押し切って上から実行された」「1975 年以来“中央青年プロジェクト”として組織された“りんご集約作付け園”の失敗(大規模な「並外れた単作」の弊害)、単調な労働、「自由な議論の雰囲気」が魅力の教会行事に比べ「しつこく押しつけがましい」か「つまらなく退屈な FDJ の青年活動」への「無関心または嫌悪」などがあった。

諸文学誌での[1983年からの]出版前的一部掲載(以下前刷りと呼ぶ)後に、「微妙なテーマについての議論を有害と考える人々の抵抗」により出版社モルゲンは出版権を彼女に返し⁸⁰、ケルンの出版社(Kiepenheuer und Witsch、略称 KiWi)とのライセンス契約も取り消した。[ヴァルターの検閲問題での 1983 年出版社モルゲン解雇(脚注 14)はこの件に関わるかもしれない]。

彼女は「未検閲の原稿(DDR版では 19 人の記録だった代わりに 21 人の記録)をケルンの出版社…に届ける勇氣を持っていた」。その結果が Eckart(1984)である(図 10)。

図 10 Eckart(1984): 出版社の宣伝文



(注)図は、東独果樹園地帯の 21 人が「暮らし、喜び、心配、意見、夢」を語り、さらに「今日の DDR 企業」の「比類無く、かつわくわくさせる洞察」があるなどと記す。(出所)Eckart(1984:裏表紙)。

「本書は西独の読者にとっても有益である」。「東と西のドイツ人」は全く別という「偏見」が正され、「少なくとも自由時間の行動や個人の生活目的はまだ互いに非常に似ている」ことが分かるからである。「私の限られた両独比較体験でも両独間の豊かさや近代化度の差異は大きい、日常における共通性の印象も強かった。』

以上のような紹介のあと Jäger(1985)は、東独誌掲載の前刷りと Eckart(1984)を比べて前者が何を削除したかを

調べ、青年向け文学誌「熱情」(脚注 14 参照)1983 年第 2 号、と「意味と形式」誌 1984 年第 2 号のそれを例示した。ほかに「新ドイツ文学」1983 年第 12 号も掲載した。

Jäger(1985)は最後に、本書の多少の問題点を指摘し(インタビュー方法が不明、相手の保護の問題⁸¹、対話記録の約 1/3 は同種の繰り返し)、東独での対話記録の先行書と比較した上で、「エッカートの特徴は「冷静」かつ「平然と諸事実がずばり指摘される」ことにあり、彼女は「努力して並の女性詩人」となるより、「抜群の女性ジャーナリストたり得るだろう」と評した。

(補注 7) 党大会成功のための「妄想症的」予防措置

シュタジの「第 XX/7 局の保安分野における作戦“マイルストーン 76”(Meilenstein 76)—SED 第 9 回党大会—の準備と実施の政治的・作戦的確保のための措置計画」(1976 年 5 月 6 日)は、目前に迫った SED 第 9 回党大会(5 月 18-22 日)に向けた第 XX/7 局の保安措置計画である。そこでは「とりわけ“敵対勢力の作戦的処理とコントロールのための措置”が決められた」。そこでは「作戦重点“自主出版”」について(Walther 1996: 301f.):

「作家たちの間での否定的な議論、国家と党の諸決定との対立を引き起こすための主導者プレントドルフとシュレジンガー、シュタデの活動の有害な影響の解明と阻止のために、これらの人物たちについて集中的な作戦的人物コントロールが実施されるべきである」。

そのために「IM ヘルマン[本名ゲールリッヒ](大尉ペニツヒ)、IM マーティン[本名 H.カント](同前)、IM Pollak(同前)[本名 Jan Koplowitz(補注 2)]、IM Kleiner(中尉 Diepold)、GMS Henry[「ある作家同盟幹部」(Walther 1996:732)](少尉エーデル)」を投入する〔()内は指導将校、カタカナが本稿登場〕。

「組織者プレントドルフとシュレジンガー、シュタデ」に対するこれら IM の監視により、「政治的頂点[=第 9 回党大会]の妨害への世論に有効な有害な影響が阻止され、党の政策が妨害されないように支援される」。

また「西ベルリンの作家グラス(Günter Grass)」らを「他の DDR の作家と結びつけている」作家ザラ・キルシュ(Sarah Kirsch)を「作戦的コントロール下に」置くべきである。そのために IM「詩人」(Dichter)[本名 P. ヴィーンズ(補注 2)]を当て、グラスらの入国の際には「IM Pollak、詩人(Dichter)、Hans」と第 VI 局が対処する。

党大会期間中にはザラを東ベルリン以外に「研究滞在」させるように、「IM ヘルマン[ゲールリッヒ]の可能性を利用する」〔以下省略〕

この措置計画はミールケの命令 9/76 によってシュタジの他の部局も担当分野ごとに作成させられたもので、Walther(1996:299)は「まさに妄想症のよう」だと評した。

(Mein Werder-Buch: 19 Tonbandprotokolle)であった。

⁸¹「被質問者の名前やその他の個人指標は人物保護のために部分的に変更された」(Eckart 1984:7)が、Jäger(1985:1229)は、東独「当局はデータ保護のそうした涙ぐましい努力を殆ど尊重しないだろう」と心配した。

⁸⁰ 前刷りは幾つかの文学誌に載った。Eckart(1984:7)によれば、そのうちの「意味と形式」誌[1984 年第 2 号]における「前刷り後に政治的理由からものはや[東独での]出版は不可能となった」。1984 年秋に出版社モルゲンから出版予定であった「検閲済みバージョン」の表題は、「私のヴェルター記録: 19 人のカセットテープ記録」

略語

751110 情報 = ZAIG が作成しシュタジ本部から SED 最高指導部に宛てたアンソロジー「ベルリン物語」対策文書
 シュタジ = Stasi, Staatssicherheit の略。東独国家保安省 (MfS) またはその職員を指す。東独時代にはシュタージ (Staasi) とも略称された (例えば Plenzdorf 1995:263)
 西独 = 西ベルリンを含む。西ベルリン以外は西独本土と記す
 党 = SED (ドイツ社会主義統一党) (東独支配党) を指す
 内部情報 = interne Hinweise または intern bekannt、シュタジの IM からの通報
 『物語る』 = 「ベルリンの作家たちが物語る」という表題の本 Vorstand (1976) を指す
 ライプツヒ文学研究所 = 1955 年創立、ベッヒャー死去後 1959 年ライプツヒ・ベッヒャー文学研究所 (Institut für Literatur „Johannes R. Becher“ in Leipzig) に改称。
 ADN = Allgemeiner Deutscher Nachrichtendienst、東独国营通信社
 AKG = Auswertungs- und Kontrollgruppe、評価・統制グループ。シュタジの部門名
 AOP = archivierter QV (passive Erfassung)、アーカイブ化された OV (受動的登録)。OV 終了後の保管ファイル
 BMiB = Bundesministerium für innerdeutsche Beziehungen)、連邦ドイツ内閣関係省 (西独)
 bpb = Bundeszentrale für politische Bildung、連邦政治教育センター (元西独、現ドイツ)
 BStU = Die Bundesbeauftragte für die Unterlagen des Staatssicherheitsdienstes der ehemaligen DDR、旧 DDR シュタジ文書連邦保管庁。2019 年 9 月 26 日ドイツ連邦議会は 2021 年夏までの連邦アーカイブへのシュタジ文書の移管を決めた。その後は本部が旧シュタジ中央庁舎に移る (2019.11.14 bpb)。中央庁舎は本誌本号表紙写真の大臣執務室もあった
 CSCE = Conference on Security and Cooperation in Europe、全欧安全保障協力会議、ドイツ語略語は KSZE
 DA = *Deutschland Archiv*、1968 年 4 月創刊の東独を中心にソ連東欧専門月刊誌、現在はオンライン発行
 DDR = Deutsche Demokratische Republik、ドイツ民主共和国 (東独) のドイツ語略称
 DEFA = Deutsche Film-AG、東独の映画会社
 EOS = Erweiterte Oberschule、拡大中等学校。10 年制義務教育後の大学進学コースの 1 つで 2 年間。東独の「統一社会主義教育制度」は青木 (2019: 図 13) 参照。
 FDJ = Freie Deutsche Jugend、自由ドイツ青年団 (東独、SED 指導下のいわば官製青年組織)
 FIM = Führungs-IM、他の IM や GMS の指導のための IM。1968 年以前は GHI (主 GI)
 GI = Geheimer Informator、秘密情報提供者、IM の旧名称
 GMS = Gesellschaftlicher Mitarbeiter für Sicherheit、「社会的保安協力者」。情報収集などのシュタジ協力では IM と同じだが、勧誘されるのは世間の知名度も国家忠誠心も高い人物であり、IM の場合ほどの陰謀的活動ではなかった。1989 年には約 3.3 万人 (Engelmann 2016:108)
 GPG = Gärtnerische Produktionsgenossenschaft、園芸生産協同組合 (東独)
 HA = Hauptabteilung、シュタジ本部の局。各大臣代理 (1989 年 4 人) が複数の局を所管。第 XX 局はミッティヒの管轄。
 IM = Inoffizieller Mitarbeiter、非公式協力者。シュタジへの密告目的の部外協力者だが、「敵対的・否定的人物」の「処理」を指示されることもあった。また一部は他組織の仮面を付けたシュタジ職員であった。IM には色々な種類があった。1989 年合計は約 18.9 万人 (Engelmann 2016:171)
 IMB = 敵との結び付きの防御ないし敵対活動の容疑のある人物の直接的処理のための IM。1979 年 12 月 8 日の「方針 1/79」

によって導入。それまでの IMF と IMV を統合
 IME = 特別投入非公式協力者。能力や可能性により普段の活動外の特別の政治的・作戦的課題 (例えば書籍検閲) に投入
 IMF = 作戦地域 (主に西独) の敵との結び付きに対する国内での防御に当たる IM。1968 年 1 月の「方針 1/68」によって導入。1979 年に IMB に引き継がれた。
 IMS = 社会的な分野または対象の保安を委託された IM。1968 年 1 月の「方針 1/68」によって導入。1979 年から、責任分野の政治的・作戦的実行と保安のための IM と定義。
 IMV = 処理される人物と親密な (vertraulich) 関係にある IM
 IM-V = IM-Vorlauf、IM 候補。ある事案 (Vorgang) における非公式協力を得るために IM に獲得する候補とされた人物。(以上 IM 関係は BStU (2015) による)
 IM 候補 = IM-V 参照
 KGB = Komitet gossudarstvennoi besopasnosti、国家保安委員会 (ソ連)
 KPD = Kommunistische Partei Deutschlands、ドイツ共産党。1918 年末ローザ・ルクセンブルグらが創立、コミンテルンの一翼。東独では 1946 年に SPD (ドイツ社会民主党) を吸収して SED に名称変更した。西独では KPD が存続し、1956 年非合法化。
 LDPD = Liberal-Demokratische Partei Deutschlands、ドイツ自由民主党。東独の体制内政党 (いわゆるブロック政党)
 LPG = Landwirtschaftliche Produktionsgenossenschaft、農業生産協同組合 (東独)
 MfS = Ministeriums für Staatssicherheit。東独国家保安省
 ND = *Neues Deutschland*、東独支配党 SED の中央機関紙
 OibE = Offizier im besonderen Einsatz、シュタジの特別投入将校。IM と異なりシュタジ常勤将校が国家機関等の重要任務に就くことを指す
 OPK = Operative Personenkontrolle、作戦的人物コントロール。人物の陰謀的な偵察と監視。
 OV = Operativer Vorgang、シュタジの「作戦事案」
 PGH = Produktionsgenossenschaft des Handwerks、手工業生産協同組合 (東独)
 RHG = Die Robert-Havemann-Gesellschaft e. V.、ロベルト・ハーベマン協会 (ベルリン)
 SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党 (東独支配党)、1990 年民主社会主義党 (PDS)、2007 年から左翼党 (Die Linke)
 Stasi = シュタジ。Staatssicherheit の略。MfS またはその職員。Staasi (シュタージ) とも言った
 VAO = VA-op = Vorlaufakte operativ、作戦予備文書。OV による人物処理の前段階で、容疑が強くない場合。1976 年廃止。
 VEB = Volkseigener Betrieb、人民所有企業。東独の国有企業
 ZAIG = Zentrale Auswertungs- und Informationsgruppe、中央評価情報グループ。シュタジ本部の情報分析の中核
 ZIG = Zentrale Informationsgruppe、中央情報グループ (ZAIG の前身)
 ZOV = Zentraler Operativer Vorgang、中央作戦事案

引用文献

- (注) 本文記載の URL や Wikimedia Commons、新聞記事を除く。URL は本稿掲載時有効。
 青木國彦 (1985) 社会主義計画経済体制と私的営業、研究年報『経済学』70-2 (東北大学) (<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/gsk.html> 掲載)
 ----- (2005) 「プラハの春」の東独波及とポーランドからチェコへの連帯クーリエ: ヘルシンキ宣言からベルリンの壁開放へ、『カオスとロゴス』26 (上記 URL 掲載)
 ----- (2009) 東独出国運動の発生: 逃亡の時は過ぎ、闘うべき時が来た、研究年報『経済学』70-2 (東北大学) (上記 URL 掲載)
 ----- (2018) ケネディのベルリン演説 (1963 年 6 月) 再考: ブラン

- ト東方政策との比較、研究年報『経済学』76-1(東北大学)(上記 URL 掲載)
- (2019) 1973 年第 10 回世界青年学生祭典(東ベルリン)に見る自由化百景: 東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について (1)、『社会主義体制史研究』10 (<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm> 掲載)
- (2020) 東独文化政策の規制と緩和(1963-1976 年): 東独ホーネッカー政権初期の自由化について(2)、『社会主義体制史研究』12(上記 URL 掲載)
- クンツェ、ライナー(山下公子訳 1992)『暗号名「抒情詩」』草思社『広辞苑』、第 6 版、岩波書店
- 酒井府(2002)『ベルリン物語集』と国家公安省、『獨協大学ドイツ学研究』47
- (2002a)『ベルリン物語集』と国家公安省、同上 48
- (2003)『ベルリン物語集』作品論、同上 49
- (2003a)『ベルリン物語集』作品論(続)、同上 50
- (2018)『表現主義戯曲/旧東ドイツ国家公安局対作家/ヘルマン・カントの作品/ルポルターージュ論』鳥影社
- ソルジェニーツイン(木村浩訳 1974)『収容所群島』2、新潮社
- 高岡智子(2011) 東ドイツ映画『パウルとパウラの伝説』のメロドラマ的作劇法、神戸大学『表現文化研究』10-2
- 東独統計年鑑 = Statistisches Jahrbuch der DDR
- ビーアマン、ヴォルフ(野村修訳)(1972)『ヴォルフ・ビーアマン詩集』晶文社
- 東ドイツ短編集刊行委員会編(1992)『エルベは流れる』同学生社
- みすず書房編集部編(1968)『戦車と自由』(1)、みすず書房
- 道家忠道他訳編(1980)『現代ドイツ短編集: ドイツ民主共和国の作家たち』三修社
- 山田晟 1982『ドイツ民主共和国法概説』下、東京大学出版会
- 吉川元(1994)『ヨーロッパ安全保障協力会議(CSCE)』三嶺書房 AGM 198, Bl.307-367, in: BStU.
- AOP 11806/85, Bd. 18, in: BStU.
- Auerbach, Thomas u.a. (2008) *Hauptabteilung XX: Staatsapparat, Blockparteien, Kirchen, Kultur; »politischer Untergrund«* (MfS-Handbuch), BStU.
- Bahro, Rudolf (1977) (1990) *Die Alternative*, Bund. バーロ(永井清彦他訳 1980)『社会主義の新たな展望』I・II、岩波書店。邦訳は 1977 年版による。原書 1990 年版は、1977 年版に「1989-90 年あとがき」(S.545ff.)を付した。
- Baumgartner, Gabriele u. D. Hebig (1996) *Biographisches Handbuch der SBZ/DDR 1945-1990*, Bd.1, K.G. Saur.
- BMiB (Hg.), H. Zimmermann (Wiss. Leitung) (1985) *DDR Handbuch*, 2 Bde., überarbeitete und erweiterte Auflage, Wissenschaft und Politik.
- bpb (Hg.)(2016) Stephan Hermlin, letzte Änderung März 2016, in: <https://www.jugendopposition.de/145378>
- u. RHG (Hg.)(2019) „Fuchs, Kunert und Pannach“, letzte Änderung Dezember, in: www.jugendopposition.de/145382
- BStU (Hg.) (2015) *Abkürzungsverzeichnis. Häufig verwendete Abkürzungen und Begriffe des Ministeriums für Staatssicherheit*, BStU.
- Dokumentation (1971) 16. ZK-Tagung: Rücktritt Ulbrichts (1), in: DA, H.5.
- DY30/vorl.SED/18052, in: Bundesarchiv.
- Eckart, Gabriele (1984) *So sehe ich die Sache: Protokolle aus der DDR: Leben im Havelländischen Obstanbaugbiet*, Kiepenheuer & Witsch
- Engelmann, Roger u.a. (Hg.) (2016) *Das MS-Lexikon*, 3., aktualisierte Auflage, Ch. Links
- Falk, Oliver (2003) Quo Vadis?: Jugend und Jugendpolitik nach den X. Weltfestspielen, in: *Kulturation*, H.2.
- Havemann, Robert (1964) *Dialektik ohne Dogma?: Naturwissenschaft und Weltanschauung*, Rowohlt. ハーヴェマン(篠原正瑛訳)『ドグマなき弁証法?』弘文社新社
- Hermlin, Stephan (1995) *In den Kämpfen dieser Zeit*, Wagnbach.
- Jäger, Manfred (1985) Die Fakten beim Namen genannt: Gabriele Eckarts authentischer Journalismus (Rezension), in: DA, H.11.
- (1995) *Kultur und Politik in der DDR 1945-1990*, Edition Deutschland Archiv.
- Links, Christoph (2016) *Das Schicksal der DDR-Verlage*, edition berolina
- MDR (2009.11.16) Ausschlüsse aus dem Schriftstellerverband 1979, in: <https://www.mdr.de/zeitreise/stoeborn/damals/artikel75>
- Menge, Marlies (1982) Bettina Wegner: Ebenso zäh wie dünn, in: *Die Zeit*, Nr.42.
- Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010) *Wer war wer in der DDR?*, 2 Bde., 5. aktualisierte und erweiterte Neuausgabe, Ch. Links.
- Münkel, Daniela (Hg.) (2015) *Staatssicherheit: Ein Lesebuch zur DDR-Geheimpolizei*, BStU.
- Neubert, Ehrhart (1998) *Geschichte der Opposition in der DDR 1949-1989*, 2., durchgesehene und erweiterte Aufl., April 1998, Ch. Links.
- Plenzdorf, Ulrich; K. Schlesinger; M. Stade (1995) *Berliner Geschichten, »Operativer Schwerpunkt Selbstverlag«: Eine Autoren-Anthologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde*, Suhrkamp.
- Rauhut, Michael (1993) *Beat in der Grauzone: DDR-Rock 1964 bis 1972 - Politik und Alltag*, Basis Druck.
- Schröder, Carsten (2003) Hinter den Kulissen des X. Festivals, in: <http://www.bpb.de/geschichte/deutsche-geschichte/weltfestspiele-73/65346/>
- Schröder, Nicolaus (2015) Das 11. Plenum der SED: „Unsere DDR ist ein sauberer Staat“, in: <https://www.deutschlandfunkkultur.de/das-11-plenum-der-sed-unsere-ddr-ist-ein-sauberer-staat.976.de.html>
- Steineckert, Gisela u. Joachim Walther (1974) *Neun-Tage-Buch: Die X. Weltfestspiele in Berlin*, Neues Leben.
- Suckut, Siegfried (Hg.) (1996) *Das Wörterbuch der Staatssicherheit: Definitionen zur »politisch-operativen Arbeit«*, 2., durchgesehene Auflage, Ch. Links.
- Thieme, Tom (2011) Mehr als ein Weltliterat: Die Sonderrolle Stefan Heyms in der Ära Honecker, in: *DA Online*, 16.11. 2011
- Veen, Hans-Joachim, u.a. (2000) *Lexikon Opposition und Widerstand in der SED-Diktatur*, Propyläen.
- Vorstand des Bezirksverbandes Berlin des Schriftstellerverbandes der DDR (Hg.) (1976) *Berliner Schriftsteller erzählen*, Aufbau. 本文中では『物語る』と略称(表題「ベルリンの作家たちが物語る」)
- Walther, Joachim (1996) *Sicherungsbereich Literatur: Schriftsteller und Staatssicherheit in der Deutschen Demokratischen Republik*, Ch. Links. 著者は本書執筆のためにシュタジ文書「15 万ページ」を閲覧した(Walter 1996a:224)。
- (1996a) Im stinkenden Untergrund: DDR-Autoren im Schatten der Stasi (I), in: *Der Spiegel*, Nr.39.
- (1996b) Die Firma schreibt vor und mit: DDR-Autoren im Schatten der Stasi (II), in: *Der Spiegel*, Nr.40.
- Wensierski, Peter (2015) DDR-Widerstandssikone Bettina Wegner, in: *Spiegel Online*, 01. Oktober.
- Wolle, Stefan (2013) *Die heile Welt der Diktatur: Herrschaft und Alltag in der DDR 1971-1989*, 4. Auflage, Ch. Links.